

# 隣の席のチャンピオン

晴貴

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

俺のクラスの隣人は高校雀麻界でその名を知らぬ者はいないチャンピオンである。

## 目

## 次

1 話	side 見汐太陽										
2 話	side 宮永照										
3 話	side 見汐太陽										
4 話	side 見汐太陽										
5 話	side 見汐太陽										
6 話	side 宮永照										
7 話	side 宮永照										
8 話	side 見汐太陽										
9 話	side 見汐太陽										
幕間	side 宮永照										
10 話	side 見汐太陽										

89 82 69 60 52 43 36 28 20 13 7 1

12 話	side 見汐太陽										
13 話	side 見汐太陽										
14 話	side 弘世董										
15 話	side 見汐太陽										
16 話	side 見汐太陽										
17 話	side 見汐太陽										
18 話	side 見汐太陽										
19 話	side 見汐太陽										
20 話	side 大星淡										
21 話	side 大星淡										
22 話	side 見汐太陽										

217 200 193 183 167 159 146 137 130 122 116 107 98

23話 s i d e 見汐太陽 |  
バレンタインデー編 s i d e 見汐太陽 |  
24話 s i d e 宮永咲 |  
257 237 228

# 1話 side 見汐太陽

俺のクラスの隣人、宮永照はチャンピオンだ。

それもエクストリームアイロン掛けのようなマイナーなジャンルのトップではなく、世界的な人気を誇る麻雀の高校チャンピオンである。

『絶対王者』やら『高校生一万人の頂点』やら宮永の強さを物語る大層な肩書きも多く、今でも定期的に雑誌やテレビの取材を受けていてメディアへの露出もあるので下手な芸能人よりもよっぽど知名度は高いだろう。

当然宮永が在籍している白糸台高校でも一目……いや、三目くらいは置かれた存在だ。

だが俺こと見汐太陽にとつて宮永照という人間は世間で言われているほど大それた人物じゃない。メディアの前ではそれなりに取り繕つているが実際は口下手で、人付き合いが苦手な不器用な奴だ。

それでいて性格はマイペースというかちょっと天然が入ってるし、不測の事態が起きた場合すぐテンパる。んでもつてお菓子と猫が好きで、実は胸が小さいことを密か

に気にしていたりする。

学校でさえクールで完璧超人なイメージを持たれているが、ところがどっこいそうで  
もない。

その人間性は噛めば噛むほど味が出るというか、その味に深みがあるというか、とにかく全体的に面白おかしい反応を返してくれる存在だ。だから俺は今日も今日とて宮永をからかって遊ぶのである。

「宮永はスルメとコーヒーどちらが好きだ？」

「……なに、突然？ というか組み合わせが変」

「俺は今、宮永をスルメかコーヒーどちらに属させるべきかを真剣に悩んでいるんだ」

「私は人間」

「……待て、本当にそうか？」

「どういう意味？」

俺と宮永の間に緊張が走る。目を逸らした方が負ける、生きるか死ぬかの視殺戦だ。

さすがに高校雀麻雀の覇者だけあって宮永は俺の射抜くような視線に動じた様子は見せない。しかし対する俺も宮永から放たれるプレッシャーには押されな……なんか宮永の背後にオーラみたいなのが見えてる気がするけどなんだあれ。あと右腕に竜巻宿してるのでどっちも幻覚か？ 幻覚だよな？

いや幻覚でもやべーって。

宮永のツモ牌はいつもこんな危険を感じてんのか。まあ俺も三日に一回は感じてるけど。

だがこのままでは押し負ける。そう予期した俺は不意に立ち上がった。

足は肩幅より少し広めに開き、身体をくの字に曲げて左手は腰に置く。そして右手は目元に持つていき、月に代わってお仕置きするどこぞの美少女戦士よろしく横ピースを決める。『きやるくん』的な効果音が聞こえてきそうなポーズをとった俺は、精一杯の裏声で決め台詞を叫んだ。

「あつわちやんだよー☆」

「……」

「……」

俺と宮永の間に……訂正しよう。クラス全体に沈黙が降りた。朝のホームルーム前のざわついた空気が一瞬にして凍り付いている。肌がヒリつくぜ……！

そんな痛いくらいの沈黙を先に破つたのは宮永だつた。さすがインハイ王者、胆力が並の者とは違う。

「……それはなに？」

「大星の真似」

「舐めてんの？」

後ろから声が聞こえた。本物のあつわちゃんの声だ。

ただし結構なドスがきいている。そうか、これが真のあつわちゃんボイスか。ならば見させ本物！ 優作がオリジナルを超えることを証明してやる！

「あつわちゃんだよー☆（重低音）」

「指摘したのはそこじゃないよ！」

知らんがな。

「てかなんで大星がここにいんの？」

割とマジで。ちよくちよく来てるけどクラスはおろか学年違うからね。

俺達三年生。お前一年生。アーユーオーケー？

「いやや悪いのー？」

唇を尖らせながら大星が宮永に抱き着く。おかげで宮永のオーラと竜巻が収まつた。しかしそのせいで大星の高一らしからぬ二つのおもちが宮永の左腕に押し付けられてダイナミックに形を変えている。お前それもう成長する余地がほとんどない宮永に対する当てつけ？

胸囲の下克上だ。宮永にかける言葉が見当たらぬ。現実ってやつはいつでも残酷なのさ。

「悪くはねーがそろそろホームルームだしはよクラスに戻れ。百年生（笑）のクラスに  
な」

「むつ！」

「なんだよ『むつ！』て。百年生ってお前自分で言つたんだろうが。

弘世から聞いてるぞ。

「まあ麻雀の実力が高校百年生レベルでもその表現は小学一年生レベルだけどな」

「言つたな！そこまで言うなら私の実力をその身に教えてあげる！」

「上等だ。俺も真の力を解放してやろう」

「見汐君、麻雀のルールほとんど知らな……」

宮永が何か言いかけたが、それを遮るようにチャイムが鳴る。

大星は「昼休みにまた来るから逃げないでね！」とイルビーバック宣言を残して廊下をダッシュしていく。もうチャイム鳴ってるけど今からで間に合うのか？まあ遅れたら自業自得ってことで。

「さつきなんか言つたか宮永」

「……何も」

「あつそ」

「ちょうど担任もきたので宮永との会話はいつたん打ち切る。

ちなみにこの後、本当に昼休みにまた来た大星と俺、隣にいた宮永、そして訳も分からず他のクラスから連れてこられた弘世との四人で麻雀を打つことになった。  
もちろん大星に狙い撃ちにされた俺はめちゃくちゃ飛ばされた。お前それ弘世の持ち技じやねーのかよ。

## 2話 side 宮永照

私のクラスの隣人、見汐太陽君はちょっと変わっている。

どの辺りが、と問われれば言動の大半と答えざるを得ない。彼は突然おかしなことを言うし、普通の人じや思いつかないような行動を取る。よく私をからかっては大笑いしているし、もしかしたら私のことを遊び道具か何かのように思っているのかもしれないが、これについてまだ確証はない。

こうして言葉だけで形容すると迷惑この上ない存在だと思うかもしれないけど、私自身は彼のことを悪く思っていない。これはきっと私に限ったことじやないはず。

見汐君の近くにはいつも人がいる。教室でも、廊下でも、登下校の時でも。そこには男子も女子も学年の違いも関係ない。周りから見れば私もそんな中の一人だろう。

彼は人との距離を狭めるのがとても上手い。好き勝手話しているようにしか思えないのにいつの間にか気を許してしまっている。淡とも知り合つて三日もした頃にはあいうやり取りをしていた。あれはもう才能といつてもいいかもしない。

一緒にいると相手にどう見られるかなんて気にしないで素の自分を出せるような気

がする。

いつだつたか「どうしてそんなに簡単に人と仲良くなれるの?」と聞いたこともある。見汐君の返答は「俺の心はバリアフリーだからな」という、具体性に欠けるものだつたけど。

素人なのに淡に麻雀で勝負を挑むのがそうなのだろうか。

何にせよ思つたことを口に出せず一言二言で会話を終わらせてしまう私とは正反対な人。

見汐君は言葉足らずな私との会話を諦めず、次の二言が出てくるまでいつも待つてくれる。それでいて私がしぼり出した一つの単語から会話を広げてくれる。

まあ会話の八割は見汐君が喋っているけど、それでも去年から比べれば私もそれなりに口数は増えたようだ。

……相手が見汐君の時だけは。

チラリと横目で隣の席に座る見汐君を盗み見る。昼休みの対局で淡に集中砲火され飛ばされたことなどまるで堪えていない様子だ。肘を立ててそこにあごを乗せ、机の上に広げた雑誌をペラペラとめくつている。

そういうえば見汐君と初めて会つた時もこんな感じだつた。

彼との出会いは一年ほど前。二年生に進級した新しいクラスで隣に座つていたのが

見汐君だつた。

今年もそうだけど、宮永と見汐でどつちも「み」から始まる苗字だから隣同士になるのかな。

一年前も見汐君は私の横で雑誌を読み耽つていた。私はほとんど読んだことないけど、若者向けの流行がたくさん書いてある雑誌だつた。

それだけなら話はここでおしまい。だけどそうならなかつたのは見汐君の読んでいた雑誌の表紙が私だつたからだ。そこには私の写真と並んで『今世間をにぎわせている十代特集!』と銘打たれている。一ヶ月ほど前にそんなインタビューを受けた記憶も微かだけどあつた。

出版社からもらつた見本を流し読みした時には麻雀だけでなくスポーツや音楽の分野からも選ばれていたはずだけど、その中で私が表紙に選ばれた理由は未だに分からぬい。

とにかくその時の気分は、一言で言うと氣まずかつた。別に驚かれたいとかそういう期待はしていないけど、過度に反応されて注目を浴びるのは煩わしい。あつたのは彼が私に気付いたらどんな反応をするのかという嫌なドキドキだけ。

しかし彼はそんな私の心配をよそに黙々と雑誌を読み進めていく。そうしている内にクラスの人達も私と見汐君の置かれた状況に気が付きだしてしまつた。

そして彼らまでこれからどうなるのかと固唾を飲んで見守り始める始末。せめて今だけでいいからこのまま彼が雑誌に集中しているように祈る。

それも空しく、というよりは私が注視しすぎたせいかも知れない。視線を感じたのか彼がふとこちらを見た。

しつかりと視線が合うこと数秒、再び彼の視線が雑誌に落ちる。そしてまた私を見た。

「これ読みたいのか？」

全く予期していなかつた言葉に固まってしまう。

彼はご丁寧にも表紙がちょうど私と向かい合うように読んでいた雑誌を差し出しきた。今度は営業スマイルを浮かべていて表紙の自分と見つめ合う形になる。

狙つてやつているのではと疑つたのはしかたのないことだと思う。控えめではあるがクラスのあちらこちらから吹き出したり笑いを堪えているような声が聞こえてきた。視界の端では董も俯いて肩を震わせているのが見えている。

「……いい」

ふるふると首を横に振つて丁重にお断りする。

「あつそう」

すると彼は興味を失つたのかまた雑誌を読み始める。教室には笑つてはいけないと

いう空気だけが残された。

これが私と見汐太陽の出会い。結局私がどういう人間なのか、見汐君が正しく認識するまで一ヵ月以上かかった。

周囲の人間がそれとなく教えればもつと早かつたと思う。後から知つたけどこの一件があまりにも面白かったため、見汐君の友達が徒党を組んで私に関する情報をシャツアウトしていたらしい。彼に友達が多くつたからこそできたことだろう。

面白いと思うことを率先して行う見汐君は、その宿命なのか面白いことを期待される人間でもあつたというわけだ。

でもようやく気付いた瞬間の言葉が「宮永って誰かに似てると思ったらあれだよな。麻雀の宮永照……あれ？ 宮永の下の名前ってなんだつけ？」だったのはあんまりだと思う。

見汐君はたまに私のことを天然だというけど、彼だつてそういうところがある。

「……なんだよその目は？」

そう声を掛けられてハツとする。昔のことを思い出しながら、ぼーっとして見汐君のことを眺めていたらしい。

見汐君が訝しげな目で私を見ていた。

「別になんでもない」

「ほんとかあ？」

「……ただ、見汐君と初めて会った時のことを思い出した」

「なんでこのタイミングで？」

「なんとなく」

そう、なんとなく。そこに深い意味はない……と、思う。

### 3話 side 見汐太陽

それは帰りのS H Rも佳境に入つた時だつた。担任が「そうそう」と前置きを挟んでからこう切り出した。

「先週配つた進路希望調査票をまだ出してない人は今日中に私のところまで持つてくるようにな」

……ああ。

確かにそんなものをもらつたが、その日の内に存在を忘却していたことを今さらながら思い出す。時すでに遅しだが。

調査票の行方さえ定かじやない。

「失くした人はここに予備があるから自分で取つてください。締め切りは今日の五時だから遅れないように。はい、じゃあ日直帰りのあいさつ」

日直の「さようなら」を唱和して S H Rが終了した。自由の身となつたクラスの皆は続々と教室から出ていく。例外は俺を含めた提出忘れ組だ。

まあ俺の場合は進学つてことでいいからすぐに書き終わる。

教壇に置かれていつた調査票を引つ掴んで机に戻ると『都内の大学（理系）』『同上（文系）』『就職』という思考時間ゼロの希望進路を記入していく。記入欄さえ埋まっていれば文句ないだろう。

むしろ気になるのは俺の隣で調査票とにらめっこしてる宮永だ。コイツ何してんの？

「宮永は何をそんなに悩んでんだ？お前はプロになるんじやないのか？」

「……まだそうとは決めてない」

「マジで？」

てつきりプロになつて賞金ガツボガボのうつはうはコースだと思つていたが。

高校チャンピオンとはいえプロになるのは相当の覚悟がいるということかも知れな  
いな。宮永さえためらうとかプロの麻雀界つてどんだけ魔境なの？

「私には妹がいる」

俺が恐ろしい世界を想像しているといきなり話題が飛んだ。

まあ慣れたことなので突つ込むこともなく話を進める。

「離れて暮らしてんだっけ？」

「うん。長野」

確か宮永も元は長野で、数年前に東京へ越してきたとかだつたな。

家庭の事情っぽいし宮永も聞いてほしくなさそうだつたから踏み込んだことないけど。

「妹は麻雀が強い」

「どれくらい?」

「……今は私より強くなっているかも」

「それはやべえな」

一年の時からインハイ連覇してる高校生最強の宮永より強いかもしけないとか大星でも裸足で逃げ出すレベルなんじやないの?

たぶん高校三百年生くらいの実力があるな。牌を打った衝撃波で相手死にそう。「でも妹は麻雀で本気を出さない。勝ち負けを競うのが得意じやないから」

「負けず嫌いの宮永とは対称的なんだな」

「……そうかもしれない。だからこそ私は本気の妹——咲と戦いたい。真剣勝負をして勝ちたい。プロになるのはそれから」

区切りをつけるつてやつか。別に宮永にプロで戦う覚悟がないわけじやなかつたらしい。

「妹はいくつなんだ?」

「今年高校生になつた」

「つてことは今年がラストチャンスか。インハイで戦えるといいな」

「うん……！」

宮永にしては珍しく饒舌で意気込んだ返事だつた。体から氣炎が立ち昇つてゐる……ような気がする。まあそれだけの想いがこもつてゐることだ。

しかしそうなると夏まで宮永は進路希望を明確にできないわけで、だからといって調査票を未記入のまま出させるわけにもいかない。

よし、そうと決まれば調査票には宮永に合いそうな職業を書かせよう。どうせ希望は予定、予定は未定なんだから適当でもいい。高校生の内は現実見るより夢見る方が大事なんだよ。

「じゃあとりあえず空白だけは埋めちまおうぜ」

宮永がコクリと頷く。素直なのはいいことだ。

第一希望には『プロ雀士（妹次第）』と書かせた。問題は次だ。

「お前麻雀以外にやつてみたい仕事つてあるか？」

その質問に宮永は黙りこくる。そんなに答えがポンポン出てくる質問じやないしそれもしかたないことだ。

たつぶり三十秒は熟考してからようやく口を開いた。

「猫の世話」

ピンポイントすぎねえ？っていうか仕事なのかそれは。  
まあいいけどさ。

さすがに限定となると難しいが、猫と触れ合う機会が多いのはやつぱりペツトショップか？獣医や保健所だと猫好きの宮永にはつらい場面も多いだろうし。  
あ、最近なら猫カフェという手もあるな。

「宮永は猫カフェに行つたことはあるか？」

「ない。でも行つてみたい」

「そういうところで働けば一日中猫と戯れられるぞ。ただし猫カフェの店員はメイド服の着用が義務付けられているらしい」

もちろん嘘だ。

どうせそのうちバレるが今この瞬間さえ騙せればそれでいい。

「……そうなの？」

「俺も詳しくは知らないけどニュースで見た記憶がある。人前でそういう恰好ができるない人間には難しい仕事かもな」

「どうか宮永が接客・サービス業つてどうなんだ？」

メディアに対してなら作り笑いは見せるけど、基本的には無口無表情だからサービス業には向いていない気がする。それに知名度が高くてファンが多いのも無用な混乱を

招く原因になりかねない。

もし猫カフエに入つて無表情の宮永に出迎えられたら俺絶対爆笑するし。

「……それくらいできる」

葛藤も垣間見えたが宮永にとつては 猫への愛 メイド服の羞恥心 ということらしい。正直凛とした印象の強い宮永ならフリフリのメイド服よりもスーツの方が似合いそうだけど。女教師スタイルつてやつだ。

だがその覚悟に免じて二つ目の欄には『猫カフエ 経営(メイド長)』と書かせた。なんで言われたままに書くんだろうコイツは。

「さあ最後だ。他にやつてみたい仕事はなんだ?」

「お菓子を食べる」

「せめて作ろうぜそこは」

唐突にボケをかます宮永に突っ込みつつ、結局最後の空欄は『シュークリーム職人の弟子(永世)』で落ち着いた。出世欲ひつく。

この進路希望調査票を提出した宮永は後日、担任から呼び出しを受けた。ついでに俺も一緒にな。

どうやら担任はある意味不明さ加減から俺の仕業だと見抜いたらしい。それはいいけど小声で「宮永はこんな男のどこがいいのかねえ……」と呟いたのはいただけなかつ

た。宮永には聞こえなかつたからよかつたものの、もし聞かれていればコークスク  
リューの餌食になつていただろう。  
誰が？俺がだよ。

## 4話 s i d e 見汐太陽

新学期が始まって三週間ほど経つた。

高校生活も三年目を迎える受験生という肩書を得たわけだが、部活もやってなければ塾の類いにも通っていない俺は放課後になるとすぐさま学校からおさらばする。

その後は友達とどつか寄つてぶらぶらしたり、まつすぐ家に帰つて寝たりとぐーたらな生活習慣が身に付いている。

しかしそんな俺の生活リズムにも例外は発生するもので、その最たる原因はクラスの担任にして白糸台高校雀部の監督も務めている鹿島先生だ。

今日も帰り支度を整えて廊下に出た瞬間に呼び止められた。狙っていたようなタイミングの良さである。

「おい見汐」

「宮永ならもう部活に行きましたけど?」

「そうか。ならお前もこい」

何が“なら”なのか意味分からん。その用法だと接続詞として正しい役割果たして

なくない？世界史の教師とはいえそれでいいのか。

まあこの人にそんなもんを求めてもムダなんだけど。

鹿島先生の目的は俺を麻雀部まで連行することであつて過程はどうでもいいのである。最大の問題は俺が麻雀部員じやないってことだが。

「今年もですか？」

「もちろん今年もだ。見汐も薄々は気付いていただろう？」

「ええ、まあ。宮永と同じクラスで担任が先生だと分かつた瞬間からそんな気はしていました」

「なら問題ないな」

だから“なら”的使い方よ。十川先生（現国教師）に密告してやろうか。

……そんなことしたら俺の内申点が人質に取られそうだからやめとこう。なんだかんだ鹿島先生は素直に手伝つてりや多少のことはマジで融通を効かせてくれたりするからな。

その代わりとして麻雀部の雑用やらされてるけど、まあギブ＆テイクつてやつである。

こんな関係になつたきつかけは去年の夏前頃だつた。

ある日の放課後、それまで担任でも教科担でもなかつた鹿島先生に呼び出されたのが

すべての始まりだ。思えば呼び出しが校内放送ではなく生徒を介した人伝、しかも場所が麻雀部の監督室という時点で怪しむべきだつたけども。

しかしあの時の俺がまず抱いたのは「麻雀部の監督室つてどこ?」という疑問だつた。なので俺は宮永に頼んで案内してもらうことにしたのだ。

その際に鹿島先生に呼び出し食らつたと正直に説明したのだが、「一体何をしてかしたんだろう」とでも言いたげな宮永の視線は今でも覚えている。

で、宮永にくつづいたまままでは麻雀部の部室に入った。教室を三つほどぶち抜いたくらい大きなスペースに雀卓が並んでいて、それでも座れない部員は思いの卓で対局を観察しているようだつた。おかげでかなりの人口密度を誇っているし、何より牌の音がうるさい。

指を耳栓代わりにしようか悩んでいると、ふと牌の音が小さくなつた。どうやら宮永と、その後を歩く俺の存在が気になつたらしい。俺達の方を盗み見る視線が多くつた。エースを務める宮永と、そんな彼女について歩く見知らぬ男子生徒という組み合わせに興味をそそられるのは分からんでもない。そんな空気を見かねてか当時クラスメイトだつた弘世が俺達のところまでやつてきてどうかしたのかと尋ねてきた。

俺が再び正直に鹿島先生に呼び出された旨を説明すると弘世も宮永と同じような目を向けてきた。俺は何もしてないんですけど? という主張は認めてもらえなかつた。

そんな一幕もありつつたどり着いた監督室は麻雀部の部室の最奥にあり、部室の外から入れないような構造になっていた。絶対場所のチョイス間違つてただろ。

そう思いつつも扉をノックし、返事をもらつて監督室へ入る。これが俺と鹿島先生の初対面だった。

その後はあれよあれよと話が進み、俺が雑用をこなす代わりに成績に多少の融通をきかせてくれるという契約が交わされた。これが毎日顔を出せとか麻雀部のマネージャーになれだつたら断つてたけど、あくまで鹿島先生に呼び出された時だけのことなのでそこまで負担に感じちやいない。

たまに渋谷とかがお茶淹れてくれるし。

そんなわけで今日に至るまでズルズルと麻雀部の雑用を続けているのである。多分宮永の代が引退するまでこき使われんだろうな。

「うわー、今年も新入部員多いですね」

監督室についてまず手渡されたのは麻雀部の新入部員名簿。といつても用紙に記入して提出させたものをクリップで一纏めにしただけの簡素でアナログなものだが。

しかし五十名以上いるのに、その内の九割くらいが女子生徒とはねえ。

まあ麻雀つていうと女性向けの競技つてイメージあるから男子にとつて敷居が高く感じるのは仕方ないのかもしれん。弱小だつたり少人数などこならまだしも、白糸台は

個人・団体共にインハイ連覇中の名門で所属人数が二百人近い大所帯な部だから特に気後れするんだろう。

「それをデータ化してタブレットに入力してほしい」

「了解しました。でも別にこれって俺じゃなくて他の雑用にやらせてても大丈夫ですよね」

白糸台麻雀部は大所帯故に一年はその年のインハイが終わるまでサポートに回る者がほとんどだと弘世から聞いたことがある。宮永や大星が例外なのだ。アイツらマジ怪物。

一年生は牌譜をつけたり牌や卓の手入れ、部室の清掃などを分担して行っている。このデータ化作業に人手が足りないということはないと思うが、まあそんなことを言い出したらなんで俺が雑用として駆り出されてんだよって話なんだけど。

「部内の仲間とはいえプライバシーもある。あまり人の目に触れさせるものじゃない」「がつたり部外者の目に触れますけど？」

しかも男の。まあ身体的な情報は皆無だから俺としては興味ないんだけど。

ぶつちやけプライバシー保護的には教師失格じやねーの？

「……それよりも見汐」

流した。

「なんですか？」

「作業をしながら顔も上げずに返事をする。お、この子俺と同中出身じゃん。面識は……ねーな。

「宮永はどうだ？」

「どうだ？」と聞かれても相変わらず無口だし感情を表に出さないせいで未だにクールキャラで通つてますけど……って先生も知つてゐるでしょ」

クラスでは担任だし、部活では監督やつてるし。

去年までは教室でどんな感じか話すことはあつたけど、それ今年も必要ある？

「休み時間の様子までは分からなからな。まあお前が変わりないというなら心配していなーいが」

「なんで俺基準？」

「……無自覚か」

「何がよ。

「まあいい。無口でクールというのは周囲から見た評価だろう。お前から見た宮永はどうなんだ？」

「なんですか突然」

「考えてみれば見汐自身が宮永をどう捉えているか聞いたことがないと思つてな」

「はあ……」

宮永ねえ。

からかえばいちいち反応するし、天然でたまに将来が心配になるくらい素直なところもある。無口無表情の割に感情はまる分かりとかいう離れ業を持つてるところもポイント高い。あれはどういう原理なんだろうか。マジカル表情筋？

まあとにかく内面の分かりやすさという点では俺の知り得る中でもトップクラスだ。裏表がない感じがして付き合いやすい。

それになんだかんだ言つても気遣いできるというか、優しいと思う。ああいうのがもつと周囲に伝われば印象も変わつてくるんじやねーのかな。

「まあ総評すると面白くて楽しい奴です」

そう説明すると鹿島先生はなんとも形容しがたい表情をしていた。どういう感情だとそんな顔になるんだ。

おかげで男性役のタカラジエンヌのようなキリツと雰囲気が台無しである。

「……宮永が分かりやすい、か。そう言われると教師としても監督としても形無しだな」「麻雀に比重傾き過ぎなんじやないですか？まあ監督なんでしようがないかもしれないですけど」

「返す言葉がないよ」

そう言つて鹿島先生はふつと笑つた。

そしてそのまま俺の方を向く。

「私の未熟さを教えてくれたお礼だ。見汐の進路について詳しくアドバイスをしてやろ  
う」

鹿島先生が取り出したのは例の思考時間ゼロで書いた俺の進路希望調査票だった。  
どうやら具体的な大学の名前を挙げなかつたのがまずかつたらしいな。

「……それお礼というか普通に教師としての仕事じやん」

「よく言つた。そこになおれ」

もうなおつてますけど、とは鹿島先生のプレッシャーを前にしては言えなかつた。  
地雷踏んだっぽいなこれ。

## 5話 s i d e 見汐太陽

鹿島先生に進路指導を受けつつデータの打ち込みを行うという苦行をなんとか切り上げて監督室から脱する。必要以上のダメージを受けちまつたぜ。

「あれ、なんで太陽先輩がここにいるの？」

脱出した直後大星にエンカウン特した。そういうえばコイツ、一年だから俺がたまに雀部にくること知らねーのか。

馴れ馴れしくし過ぎてそんな事実すっかり忘れてたわ。

「よう大星。とりあえずジユース買つてこいよ」

「嫌だよめんどくさいし」

速攻で拒否られた。一年が三年の命令を断るとはい一度胸だ。

しかしそんな態度を取つていいのかなあ？

「ここまで嫌なら仕方がない。買ってきてくれたらしいものやろうと思つたのに」

「いいもの？」

大星が食いついた。やだ、この子単純……！

脳内で三文芝居を打ちながら制服の内ポケットからスマホを取り出す。スイスイと操作して一枚の画像を表示させ、それを大星に見せつけてやった。

「買ってきてくれたらこの画像あげたのにな〜」

「ね、猫耳テルー!?」

大星が驚きのあまりのけ反る。そうだろうそうだろう、この写真にはそれだけの価値があるのだ。大星はそれをよく分かつているな。

スマホの画面に映し出されているのはブレザーの制服姿で頭に猫耳カチューシャを装備している宮永だ。二ヶ月ほど前、宮永の誕生日に撮影したものだ。

事の経緯は今年の二月十八日、宮永の誕生日まで遡る。俺はその日に計画を実行した。

と言つても大したことはしてないが。

宮永の十七歳の誕生日当日。授業を終えた宮永が部活に向かう前に呼び止めて、俺はあるプレゼントを贈った。

別段手の込んだプレゼントでもない。宮永が好きそうな猫の写真集をあげただけだ。しかし宮永の反応は期待以上だった。

中を見てみると俺に促されて包装紙を丁寧に開き、それが猫の写真集であると分かつた途端に宮永の目が輝く。

「見汐君、ありがとう」

「おー、どういたしまして」

「……読んでもいい？」

「もう宮永の物なんだから好きにすりやいいさ」

そう言うとシユリンク剥がして猫達のキュートな姿に釘付けになる宮永。廊下で猫の写真集を立ち読みするチャンピオンというのも中々シユールな光景である。だが俺の真の目的はここからだつた。

写真集と一緒に買った猫耳カチューシャを手に宮永の背後に忍び寄る。狙われている本人は集中して気付く様子を見せない。チャンスだ。

背後に立つた俺は微風にさえ揺れる今にも崩れそうなほど不安定なジエンガからブロツクを抜き取るような纖細さで、かつ全くためらうことのない大胆な手捌きで宮永の頭部に猫耳カチューシャを装着させることに成功する。思わずガツツポーズを決めたくなるほどの偉業を達成した瞬間だつた。

しかし歓喜に浸つてばかりもいられない。第三者から注意されて気付かれてしまう恐れがある。

「なあ宮永」

ポンと肩を軽く叩いてこちらに振り向かせる。その一瞬のタイミングを狙つて俺はスマホのシャツターを切つた。

「ピピ、パシャ——というどこか気の抜けた撮影音。

だが俺のスマホは猫耳宮永というレアな姿をしつかり収めていた。

「……どうして写真を撮ったの？」

「宮永の誕生日だからな。記念撮影だ」

「記念撮影……」

「いわゆる友達との青春の思い出、みたいな」

我ながら寒々しい言葉が口をつく。嘘は言つてないがこのシチュエーションで吐くセリフじゃないよな。

それでもここを切り抜けるためには必要なことなのだ。その猫耳似合つてるから許せ宮永。

「そう。でも今度からはちゃんと声をかけて撮つて」

「あ、はい」

抗議の声に身構えていると、まさかの撮影許可が下りた。やけにあっさり引き下がられて思わず敬語になつてしまふ。

でもまあ考えてみれば宮永は取材やらなんやらで写真撮影には慣れてるっぽいからな。おまけに有名人にカテゴリーされてるからいきなり写メられたらいいじゃ動じないのかもしれん。

「じゃあ私は部活に行く」

「おう、頑張れよ」

宮永は踵を返すと写真集を小脇に抱えて堂々と歩みを進めていく。見送る背中はまさに王者の風格。

それ違った生徒が皆振り返るほどの存在感を放つていた。

……主に頭頂部から。

そして翌日。

朝教室に入った瞬間、俺は無言の宮永に脇腹をつねられるという目に遭った。何も言わないしいつも通りのポーカーフェイスではあつたが、怒りか羞恥か、宮永の顔にはわずかに赤みが差していた。

「いてて！止めてくれ宮永！ほんとに痛い！痛いです宮永さん！」

「……」

「あ、ちょっと?!強くなってる強くなってるってえ！いつてえマジで！」

「……」

「無言は怖いからなんとか言つてくれー！」

快挙を引き換えて、二年A組には俺の苦悶の声が響き渡つたのだった。

「こうして艱難辛苦を乗り越えて俺はこの奇跡の一枚を手に入れたのだ」「カンナンシンク？」

おい、コイツ本当に入試合格したのか？ 絶対艱難辛苦の意味知らねーだろ。ああでも麻雀強いらしいし特待なのかもな。

「お前麻雀があつてよかつたな」

「うん？ そんなことよりそのテルーの写真ちようだい！」

「断る」

「なんで!?」

「素直にジユース買つてきてりややつたのに」

「行くよ！ 今すぐ行くよ！」

ダッシュしだしそうなポーズを見せる大星。

クラウチングではなく非常口の看板みたいなポーズを取るあたり、そこはかとなく運動音痴を匂わせる。

「もう時間切れでーす。おーい渋谷」

「お久しぶりです見汐先輩。どうかしましたか?」

「今手空いてる?お茶飲みたいんだけど」

「いいですよ。銘柄はどうしますか?」

「分かんないから渋谷のおすすめで」

「むー!無視するなー!」

大星が俺の周りをグルグル回つてピヨンピヨン跳ねる。ウゼエ。

跳ねる度に揺れるおもちはしつかり観察させてもらうけども。これでまだ十五歳とは将来性あるな。元気出せ宮永。

「落ち着けよ。お前ら仲良いんだから直接撮らせてもらえばいいだろ」

「えー、でもテルーは写真撮られるの好きじやないからなー」

「それって雑誌とかの取材でつてことだろ?」

「違うよ、撮られること自体が苦手つて言つてた。だからそれちようだーい!」

「うわ!背中に乗ろうとするな!」

「……何をしているんだお前達。特に見汐」

「え?俺?」  
大星とじやれてたらこめかみをヒクつかせた弘世が現れた。

「そうだ。レギュラー二人を侍らせるとはいひ身分じやないか」

「別に侍らせては……つてレギュラー二人？」

大星は確定としてあとは……

「見汐先輩、お茶が入りましたよ。淡ちゃんと董先輩もいかがですか？」

おつとりした声。温和で落ち着いた性格。実は巨乳のメガネっ子。

それらを兼ね備えた麻雀部きつての癒し系・渋谷堯深。しぶやたかみ

「……マジで？」

「ああ、マジだ」

困惑氣味に弘世へと送った視線。弘世はそれを力強く叩き返してきた。

「……渋谷、お茶ありがとな。そしてごめん」

「？えつと、どうして謝られたのか分からないんですけど……」

「気にするな。そういう気分だったんだ」

いやマジですまん。お前のことずっとお茶くみ係だと思つてたわ。

これからは自分でお茶を淹れることにしよう。

# 幕間　s i d e 鹿島雨月

見汐が監督室を出て行つてすぐ、扉一枚を隔てた向こう側からにぎやかな声が聞こえてくる。

思わず呆れてため息が出そうになるが、しかし代わりに浮かんだのは苦笑だった。良くも悪くも見汐太陽という生徒はいつも騒ぎの中心にいる。

そしてそれは隣にあの宮永照がいても変わりない。

私が彼女——宮永照と出会つたのは教師生活五年目の春。監督を務めていた白糸台高校の麻雀部に宮永が入部してきたのがきつかけだつた。

一目見て理解した。彼女は物が違う、と。

現役時代は国内ランク三桁。二桁の順位なんて夢のまた夢ではあつたが、それでも七年間プロという舞台で戦つてきた身だ。小鍛治プロを始め本当に同じ人間なのか疑いたくなるような雀士とも対戦してきた。

宮永に感じたのはそんな彼女らに匹敵しうる、周囲から隔絶した天賦の才。麻雀界ではよく「牌に愛される」という表現が用いられるが、彼女はまさに牌に愛された子だ。

そんな彼女を前にして私が思ったのは「自分がこの少女に麻雀を教え、育てる事ができるのか」という不安だった。

入部してきた時点での実力はすでに私を超えていた。宮永が得意とするあんな連続和了なんてプロでもそう易々とできることではない。

どんな策も異能も真正面からぶつかって叩き潰す。相手を圧倒し卓上を蹂躪する。それが宮永照の麻雀だった。

私は入部してすぐの宮永を団体戦の大将に据えた。それについてまつたく異論を唱える声が上がらなかつたのが彼女の突き抜けた強さを物語つていると言えるだろう。

白糸台高校の麻雀部と言えばそれなり以上の名門校だ。そこに籍を置く部員の中には全国でも上位に数えられる実力を持つている者も多くいた。それでも彼女には挑む氣さえ失せてしまう。

強すぎるあまりに、宮永は早くも部内で孤高の存在と化していた。

そしてそれは彼女が全国デビューを果たしてからさらに加速していく。

一年生ながら団体戦の大将として登場し、決勝では劣勢を一気にひっくり返しての優勝。個人決勝においても全国を勝ち抜いてきた猛者を難なく飛ばして優勝を決めた。

個人・団体の二冠を獲得した超新星。宮永照の強さと名前は瞬く間に全国へと広まつていった。

宮永はその後も連戦連勝。大会に出場すればメディアが押し掛け、しかしそんな空気など知つたことではないとばかりに淡々と頂点に立つ。そしてまた彼女の名前が持ち上げられる。

その繰り返し。対戦した相手からは「人間じゃない」という声も聞こえるようになつた。私が小鍛冶プロらに感じたものを、彼女達も感じていたのだろう。

結局宮永は二年生へ進級するまであらゆる大会で勝ち続けた。指導者としては喜ぶべきことなのかもしれないが、その時点では宮永の強さに危うさのようなものを感じ始めていた。

常に、そして麻雀を打つごとに、宮永の中の何かが張り詰めているように見えたのだ。もしそれが限界まで張り詰め、そして破裂してしまつたらどうなるのか。私はそんな不安に襲われるようになつていた。

指導者として、教師として、それだけは避けさせなければいけない。

しかしそのためにはどうすればいいのか分からぬ。会話を試みても宮永は必要最低限のことしか喋らず、そしてあまり人と関わり合いたくないような素振りでもあつた。

それでいて彼女は麻雀に関して手を抜くことは一切ない。まるで少しでも緩めれば今まで積み上げてきたものが無に帰すのだと言わんばかりに、後ろから迫つてくる何かを振り払つて必死に逃げるかのように、麻雀にのめり込んでいた。

教師失格だという自覚を持った上で言う。宮永には近付き難かつた。

そう思い、実際に尻込みしてしまつた自分がひどく情けなく、教師を辞めることさえ頭をちらつくようになつた。

そんな時である。偶然、校内で宮永と見汐が一緒にいるところを見かけたのは。あの衝撃は一年経つた今でも忘れられない。

場所は中庭のベンチ。私はそこを二階の渡り廊下から見下ろしていた。

木陰で一人文庫本を読んでいる宮永の元に近付く一人の男子生徒。その男子生徒は宮永に気配を悟られないようにするためなのか、慎重な足運びで生垣を挟んだ彼女の背後に回る。

一体何をするのかと凝視していると、それまで読書に集中していた宮永が急にバツと顔を上げた。そして二、三度周囲を見渡してから読書に戻る。

しかしまたすぐに、今度は文庫本をすごい勢いで閉じながら立ち上がつた。そして先ほどよりも忙しない動きで辺りに視線を巡らせる。かと思えば今度は全身をビクツと振るわせて硬直した。生垣の奥では何かを手にした男子生徒がうずくまつてお腹を抱えながら震えていた。恐らく笑いを堪えているのだろう。

後に男子生徒——見汐に確認してみたところ、スマホから心靈系の音声を流して宮永にいたずらをしていたのだと悪びれもせずに白状した。理由は「鉄面皮の宮永が涙目に

なつてゐるところを見てみたかったから」だという。

呆れて開いた口がふさがらなかつた。あの宮永照にそんなバカげた理由であんな幼稚ないたずらをする奴がいるのかと。

しかし思い返す。

あの後見汐のいたずらだと気付いた宮永はいつもの無表情で犯人に詰め寄り、彼はそれをへラへラと笑いながら受け流していた。それはまるで気心が知れた友人同士のような光景に私の目には映つた。

そうこうしている内に昼休みの終了を告げるチャイムが鳴る。他の生徒達がぞろぞろと校内へ戻る中、宮永と見汐もまた連れ立つて歩き出した。

見汐の二歩ほど後ろについて歩く宮永。前を歩く少年の背中を見るその顔は今まで見たことがないほど柔らかく、そして微妙に、だが間違いなく笑みを湛えていた。

初めて見る宮永の笑顔。そしてそれを引き出したのは間違いなく見汐太陽だった。たし、今年も同じクラスになるよう手を回しもした。

その選択は間違つていらないだろう。現に見汐と知り合つてからの宮永は少しずつ変わつていつた。それは人との関わり方も、そして麻雀の打ち方さえも。簡単に言えば視野が広がつた、とでも言えればいいのだろうか。

劇的な変化ではないが、大きな成長である。強引な部分もあつた打ち筋は洗練され、牌の読みもさらに精度を増した。卓上を掌握し、相手の一手二手先を知つてゐるかのような麻雀。

二年生の一年間で宮永は一層その実力を伸ばし、同時に抱えていた危うさはいつの間にか霧散していた。

確かに見汐に宮永との関係を強く持たせるのは間違つていなかつた。しかし百点満点の正解ではなかつたようである。

先ほどの見汐のセリフが耳に残つていた。

『麻雀に比重傾き過ぎなんじやないですか？』

まさにその通りだつた。私は、そして恐らく彼女の周囲の人間も、宮永照という少女を麻雀というフィルター越しにしか見ていなかつた。ただ一人、見汐太陽を除いて。必要だつたのは彼本人ではなく、彼と同じような視点。それだけに過ぎず、けれどそれはとても難しいことだ。とはいえ自分が教師としても人間としても未熟だつたことは誤魔化しようのない事実である。

宮永照は麻雀界の歴史に名を残す存在だらうが、見汐太陽もまた只者ではないのかもしれない。

そんな二人が揃つてゐるのだ。今年の白糸台高校麻雀部はきっと今までよりも、そし

てどこよりも強くなるだろう。  
私にはそんな確信があつた。

# 6話 Side 宮永照

「そーいえばテルってどうして太陽先輩と仲良いの？」

昼休み。学食でお昼ご飯を食べていると不意に淡がそう尋ねてきた。

その一言に一緒に食事をしていた董の視線も私に向く。けれど私の中にはもつと根本的な疑問が湧いた。

「仲、いいのかな?」

自分ではいまいちよく分からずそう聞き返してしまう。  
すると二人とも呆れたような顔になつた。

「どこからどう見ても仲良いよー」

「麻雀部以外ではつきり友達と呼べるのはアイツくらいなんじゃないか？」

暗に友達が少ないと言わされたような気もするが、まあ事実なので反論することもない。

それよりも周りから見れば私と見汐君は仲がいいということになるらしい。あまり意識したことがないからか、そう言われるのになんとなくむず痒い感じがする。

「太陽先輩って見た目ヤンキーだし、テルが友だちになつたきっかけとか想像できなくて」

「ヤンキー……」

「そうだろうか？確かに髪は染めているし耳にはピアスも空いていてチャラチャラとした印象は受けるかもしれない。でも素行が悪いということはないし、普段の言動を見ているとそういう存在からは遠いようだ」

「いや、淡も本気でそう思つてゐるわけじゃないだろう？」

「それはそうだけどテルの友だちじやなかつたら知り合いになつてなかつたかも」

「私には全く臆さず接してきた淡が見汐君は遠ざけていたかもしれないと思うと少しおかしい」

「でも改めて考えてみれば見汐君は無口で人付き合いが苦手な私みたいな人間とは正反対の性格だ。傍から見るとそんな二人が友達関係にあることを不思議に思うのも理解できる」

「もしあの出来事がなければここまで関係にはなつていなかつたかもしれない」

「テルー？どうしたの？」

「なんでもない。それと私が見汐君と仲良くなつたきっかけは……」

「うんうん！」

「——秘密」

「えー!？」

淡が不満そうな声を上げる。隣では董がガクッと姿勢を崩していた。  
董も興味があつたのかかもしれない。

でも、これは秘密。私と見汐君、そしてあの子だけの。

どうしてか、と言えば明確な理由はないけれど。それでもこれは内緒にしておきた  
かった。

その後は昼休みが終わるまで淡に教えてとせがまれ、それは放課後、部活の時間にも  
及んだ。最終的には鹿島先生に怒られていたけど。

おかげで淡の追及から逃れることができた。

その日の帰り道。なぜ咄嗟に秘密と言つてしまつたのか、ぼんやりと考えながら歩い  
ていた。

しかしその場所に来ると意図せずに自分の足が止まる。

なんの変哲もない住宅街の一角にある公園。しかし七カ月前、私はこの場所で立ち往  
生していた。

「……どうしよう」

思わず心の声が漏れる。しかしそれも雨の音に紛れて誰に届くでもなく消えていく。  
私が途方に暮れている原因は、あまり元気とは言い難い様子で横たわっている一匹の仔猫だった。

自宅へのショートカットのために毎日横切る公園。そこに設置された遊具の一つにドーム形状の滑り台がある。ドーム表面は滑り台になっているが、ドームそのものにも小さなトンネルがついている。小学生が四つん這いになつて通れるくらいの大きさしかないけど。

そのトンネルの中にこの子はいた。

タオルが敷き詰められた段ボール箱には仔猫と、恐らくは水かミルクの類いが注がれていただろう平皿だけがあつた。そしてご丁寧にも『拾つてあげてください』というメッセージカード付き。

もしかしたらいくらかの食料も一緒に入っていたかもしれないがもう食べてしまつたのか見当たらない。なんにせよ食べ物も飲み物も一日二日程度の量だろう。そして今はそのどちらも底を尽いている。

あまり視界が良くないこの雨の中で気付けたのは偶然。運が良かつた。  
けれどここからどうすればいいのか迷ってしまう。

拾つて帰ろうにも自宅のマンションはペット禁止。里親を探すにも一時的に保護はしなければいけないし、自分が里親探しなどできるとは思えない。だからといって見なかつたことにするのは言語道断。

結果、その場から動けなくなってしまった。

幸い仔猫は濡れていないが、段ボールから飛び出る運動能力すら備わっていないほど幼い。このまま手をこまねいていても衰弱していく一方だ。

頭の中はどうしようという言葉で埋まつていく。  
見汐君に声をかけられたのはそんな時だつた。

「もしかして宮永か？ 何してんの？」

Tシャツに半ズボン、足元は黒のクロックス。右手に透明のビニール傘を持ち、左手に下げているのはコンビニの袋。

振り返つた先にいたのはどこからどう見ても着の身着のまま出てきましたという出で立ちの見汐君。どうして見汐君がここにいるのか、という疑問は彼も近くに住んでいりのだろうと自己解決する。

優先すべきはこの子の方だ。

私は捨て猫を見つけたことと、そして衰弱していること、さらには仔猫を保護する手段がないという危機的な状況を正確に伝える。ここまで必死に言葉を連ねたのは高校

入学以来初めてと言えるくらいだつたかもしれない。

それに対する見汐君の答えはものすごく簡潔だつた。

「じゃあこいつはウチで飼おう」

全く躊躇なく、見汐君はそう言い切つた。俺がお前のご主人様だぞー、なんて言いながら仔猫を撫でる。

本当にそのまま連れて帰るらしく、傘とコンビニ袋の持ち方をあれこれ変えながらなんとか仔猫を持ち上げようとする。

さつきまで悩みに悩んでいた難題がものの数十秒で解決してしまつた。

「くつそ、上手く持てねえな。いつそ傘を捨てて……ってコイツが濡れるのはマズいか」

そんな難題をクリアした見汐君が仔猫の抱え方に四苦八苦し始める。  
ついにはコンビニ袋の中に仔猫を入れようか思案し出した見汐君に、私は傘を差し出した。

「私が傘をさすから、見汐君はその子を抱いてあげて」

「……ああ、そうすりやいいのか」

これで全部解決。あとは見汐君の家に行くだけ。

しかし公園から出たところで突然見汐君が問い合わせてきた。

「……宮永つて俺のことそこまで嫌いだつた? もしそうなら今後の対応改めるけど」

質問の意味がよく分からなかつた。なぜこのタイミングで、どうしてそんな質問をするのか。

もちろん見汐君を嫌つてなんていない。  
意図が分からずに首を傾げる。

「どうしてそんなことを聞くの？」

「どうしても何も、なんでお前俺に傘さして自分は雨に打たれてるわけ？一緒に傘入ればよくない？」

「……あつ」

「あつ、じゃねえよ。俺と同じ傘に入るくらいなら濡れた方がましつて意思表示かと思つたんだけど

「そんなことない」

仔猫が濡れないことを最優先にしすぎてしまつた結果そうなつただけ。

言われた通り、見汐君に並んで同じ傘の下に入る。

「天然娘め。手遅れだぞ」

「……うん」

今ばかりは天然と言われても甘んじて受け入れることしかできない。

私は全身、制服も下着もびしょ濡れになつていた。まだ残暑が残る九月の雨だからそ

ここまで体が冷えていないけど、見汐君の家は公園を挟んで私のマンションとは反対側にあるようだ。

それだけの距離をびしょ濡れのままあるいたら風邪をひいてしまうかもしねない。まあ仔猫のためならそれくらいは安い代償だけれど。

見汐君の家は公園から歩いて十分ほどのところにあつた。マンションではなく一戸建て。

私の住むマンションとは徒歩で十五分くらいの距離だ。

「到着つと。おい、沙奈ー！」

見汐君は玄関の扉を開けると家の中に向かつて誰かの名前を呼んだ。すると階段を踏み鳴らしながら中学生くらいの少女が降りてきた。

「なに？ お兄ちゃん」

沙奈と呼ばれた少女は見汐君の妹らしい。

見汐君はこちらに背を向けたまま親指で私を指すと、妹さんにこう言い放った。

「コイツ同じクラスの宮永つてんだけど見ての通り濡れ鼠だから風呂に入れてやつて。あとお前の服も貸してくれよ」

「え？」

私と妹さんの声が重なる。

仔猫を送り届けたら、私はいつの間にか見汐君の家でお風呂に入ることになつてい  
た。

## 7話 side 宮永照

急展開に頭が追い付かなかつたとでも言えばいいのか、私は流されるままに見汐君の家の湯船に浸かつていて。思いの外妹さんの「是非!」という押ししが強くて断れなかつたというのもある。

まだ残暑が残る季節とはいえ雨に濡れた体はやはり冷えていた。温かいお湯が染み入つてくるようで気持ちがいい。

思わず落ち着いてしまいそうになるが、冷静に考えるとそうそうゆつくりしていられる状況でもない。

とはいえ私が着ていた衣服は今、全て乾燥機付き洗濯機の中だ。それが終わるまではご厄介になるしかないのが現状だつた。

「あの、宮永さん。着替えとタオルここに置いておきますね」

扉の向こう、脱衣所から妹さんの声が届く。

「ありがとう」

「いえいえ!」

とても元気のいい返事が返つてくる。でもどこか恐縮しているように見えるのはどうしてだろう？

そんなことを考えながらお風呂から上がつて用意されていた着替えに袖を通す。ちなみに『下着は新品なので大丈夫です！』というメッセージが添えられていて少しだけクスッとした。服もショーツもちよつとだけ小さかつたのに、ブラだけは若干の余裕があつたことに感じるところもあつたけど。

脱衣所を出て、紺色を基調としたワンピースに、グレーのレギンスという格好で廊下に明かりが漏れ出ているリビングと思わしき方へ向かう。扉を開けるとそこにいたのは妹さんだけだった。

「お風呂と服、ありがとう」

「いえいえ！それよりも服は小さくないですか？一応余裕があるものを選びましたけど……」

「うん、大丈夫。それで見汐君は……」

「お兄ちゃんなら動物病院に行きました」

「……この雨の中を？」

「タクシーを呼んでたので濡れる心配はないですよ。とりあえずお医者さんに診てもらつて健康状態を確認してくるって」

どうして見汐君はここまで行動が迅速なんだろう。あの仔猫を飼うと決めた時もうだけど決断に迷いがない。

でも今みたいに自分ではどうしたらいいのか分からぬ時に一緒にいてくれると頼りになる。

「あ、あのー、それでですね……」

妹さんがモジモジしながらそう切り出した。

「どうかしたの？」

「宮永さんって先月の全国大会で優勝した宮永照さんですよね？」

「そうだけど

「お、お兄ちゃんとは一体どういうご関係なんでしょう？もしかして恋人とかだつたり

……」

恋人。予想外だつたその単語に言葉が詰まつて、反応が遅れてしまう。

恋人とはつまり、お付き合いをしているということ。いわゆる男女交際。私と見汐君  
が？

「……見汐君とはクラスメイト。席が隣りなだけでそういう関係じゃない」

「で、ですよねー！宮永さんがうちのお兄ちゃんと付き合つたりなんてあり得ないです  
よねー！あははは……はあ」

分かりやすい落胆のため息。小声で「期待しちやつたよう……」と呟いていたのがしつかり聞こえた。

反応から察するに私と見汐君がそういう関係であることを望んでいるらしかった。その理由はすぐに判明する。

「あの、宮永さん。こんな時に言うのも何なんですけど……もしよかつたらサインください！」

そういって彼女が取り出したのは見汐君と初めて会った時に彼が読んでいたのと同じ雑誌だつた。表紙には営業スマイルの私が載つている。

妹さんは私のファンであるらしかつた。

その後はサインをしたり一緒に写真を撮つたり、終始緊張した様子の妹さんと二人だけの時間を過ごす。見汐君が帰つてきたのはそんな時間が三十分以上経過してからだつた。

「ただいまー」

「お帰りなさい」

帰つてきた見汐君を出迎える。背後では妹さんが「夫婦みたいなやり取り……！」と興奮しているが、別に普通の会話だと思う。それ以外になんと言えばいいというのだろうか。

「手間をかけさせてごめんなさい」

「宮永が謝ることじやないけどな。俺が飼うつて決めたわけだし」

「……ありがとう。その子は大丈夫?」

見汐君に抱っこされている仔猫に目を向ける。

「別にどこも悪くないってよ。飯食わせてミルクもらつたらこの通りだ」

見汐君が胸に抱いていた仔猫を目線の高さまで持ち上げる。猫はそれに呼応するよう に“にゃあ”と鳴いた。

確かに公園で見かけた時よりも大分元気になつてているように見える。

「というわけでコイツの名前を決めるぞ。宮永なんかアイデイア出して」「突然そんなこと言われても……」

仔猫をじっと見つめる。瞳と鼻先以外真っ白だ。

そんな姿にとあるものが連想される。

「ハク」

「それっぽいけど麻雀牌から取ったよな?」

「うん。シロだと犬みたいだからハク」

「保留で。次沙奈」

「虎姫!」

「却下。お前ら少し麻雀から離れろよ」

三人であれこれと良さそうな名前を出し合う。それはどこか懐かしい空気だった。  
父や妹と一緒に暮らしていた時は、麻雀卓を囲みながらたくさん話をした。友達のこ  
と、学校での出来事、将来の夢。あそこにはキラキラとした思い出が詰まっている。  
あの時は私も今より表情も感情もしつかり顔に出せていた。咲と一緒によく笑つて  
いた。

そうできなくなつたのはいつの頃からだつただろう。咲が本気で麻雀を打つていな  
いことに気が付いた時？麻雀で負けたくないと意地を張り出した時？  
今ではもう覚えていない。

けれどここには、あの時の懐かしい空気が満ちていた。

「もう、お兄ちゃんさつきから却下ばかり！少しは自分でもアイデイア出してよ！」  
私がちよつと感傷に浸つていてる間に議論がヒートアップしていた。主役であるはず  
の仔猫はソファラーのクツシヨンで丸くなつているけど。

妹にそう言われた見汐君は腕を組んで唸る。

「そうなあ……宮永が第一発見者だし分かりやすくミヤナガでどうよ？」  
ミヤナガ……ミヤナガ？それは私の苗字だけど。名前に苗字をつけるのはおかしい  
と思う。

見汐君は麻雀以前に私から離れるべきだ。

「呼び捨てはちょっと……ミヤナガさんなら」

まさかの妹さんの方からも賛成の声が上がる。敬称の有無がそんなに重要？

気にするべきところはそこじゃないはずだ。

仮にあの子の名前がミヤナガになつたとしたらまるで私が見汐君に飼われているようになつてしまわないだろうか？

ミヤナガに笑いかけたり、その体を撫でたり、時には同じ布団に入つたり、首輪を付けられたり。相手は猫だけど私の名前だ。私がそうされるわけではないけれど、何かいけないことのように感じてしまうのは私が間違っているの？

「見汐君」

「なんだ？」

「私、首輪を付けられるのはちょっと……」

「冗談に決まってるだろ。正気に戻れ宮永」

そう言つた見汐君は可哀想なものを見る、それでいてとても生温い視線を私に向けていた。

公園を通りすぎる度にあの日のことを思い出す。

恥ずかしい勘違いもあつたけどあの出来事は私にとつて大切な記憶になつていてる。

三年生になつて部内での役割も増えたせいで、最近はあの子に会えていない。また今度会いに行こう。

あの子——白夏<sup>ハツカ</sup>がお気に入りのエサを持つて。

## 8話 s i d e 見汐太陽

「なあ見汐」  
「なんすか?」

場所はもはやお馴染みといつても過言ではない麻雀部監督室。

俺は革張りのソファーに浅く腰掛け、身を乗り出してケース分けした必要事項をパソコンに打ち込んでいく。なんのデータかといえば麻雀部の雑用マニュアルである。

それは普段の部活動でのものだけに留まらず、大会や遠征・合宿先などにも対応したそここ内容のあるマニュアルだ。

本来なら正式な部員が引継ぎを行うものなんだろうけど、去年から鹿島先生が俺に雑用の類いを任せすぎたことで当時の一年生、つまり現二年生の実務経験が不足するという事態に陥ってしまっている。

去年俺と一緒に雑用やってた男子部員が辞めちまつたのが痛い。アツイが残つてれば俺がここまでする必要なかつたんだけどなあ。いやまあ突き詰めれば鹿島先生の采配ミスなんだけど。

おかげでいつもの部活以外、学外での活動中における雑用仕事をしつかりとこなせる奴が俺しかいない。つていうか俺は部員じやないから正確には誰もいない。

大所帯なんだからマネージャーくらい募集しとけや！と鹿島先生を一喝した俺は悪くない。その場で先生に許可もらつて、もうすでに学校中の掲示板に『麻雀部のマネージャー募集』のチラシ張つてやつた。俺が卒業する前にきてくれマジで。

ちらつと辞めた後輩に手伝つてもらおうかとも思つたけど、常々「俺は雑用じやなくて麻雀がやりたい」と言つていたのを思い出して声はかけなかつた。

白糸台麻雀部は部員が多いが、それに反して卓や時間には限りがある。だから新入部員は余程の実力がないと中々卓に座ることもできないし、何よりレベルの違いを実感して退部する者もそれなりの数になる。

麻雀が打ちたいのにここでは自分の実力が足りず満足に卓にも座れない。そんな感じでくすぶつてた後輩を思えば退部したのを責める気にもならないわけで。

アイツは今近くの麻雀クラブに足繁く通つて麻雀を楽しんでるし、この仕事を手伝わせるのはそれには水を差す気がした。

そんなわけで俺は一人で雑用マニュアルの仕事に取りかかつていて。先生には後でこの対価をしつかり払つてもらうけどな！

「宮永のことなんだが」

「先生そろばつかですよね」

「どんだけ宮永のこと好きなの？」

「言つてくれるな」

「まあいいですけど。それで？」

「宮永と他の部員の距離を縮めるいい方法はないだろうか？」

「それ俺に相談します？」

「お前以上に適任がいるとは思えない」

「言い切つちやうのは教師としてどうなのよ。薄々勘付いたけどこの人ポンコツつぽいんだよなあ。」

麻雀の指導はかなり優秀らしいけどそれ以外がちょっと。

つていうか宮永はまだ部活内ですら孤立してんのかよ。まあネガティブな意味合い

じやなくて畏敬とか憧れが積み重なってる結果だろうけど。

「大星も一年ですよね。アソツを仲介して他の一年と関わらせたらどうですか？」

「……あの子もあの子で宮永以外を見下している節があつてな」

「今度制裁してやろう」

「怖いことをサラッと言うな」

だつて相手にとつても、何より大星自身にとつてもそういう態度つて好ましくない

し。

偉そうなことは言いたくないけどその辺の協調性を身に付けさせるのも教師の役目じゃない?

「じゃあ一年全員で宮永にドッキリをしかけるとか」

「万が一外したら修復不可能な溝を作りそそうだが……」

「宮永なら無表情で許してくれますよ」

慣れてないと不機嫌か静かに怒つてるようにしか見えないだろうけど。

そんなやり取りがあつたのが五月の頭、ゴールデンウイークに入る直前のことである。

麻雀部はゴールデンウイーク期間中に遠征合宿を行う予定で、その中で俺の雑用スキルが必要になるかもつてことだつたのでマニュアル化したのだ。

部外者の俺がついていくわけにもいかないしな。たとえ頼まれたつてそこまで付き合う気はないけど。

なので見事に仕事をやり切つた俺は今、ゴールデンウイーク最終日を満喫して惰眠を貪っていた。二度寝から目覚め、枕元のスマホで時間を確認する。

「午前十一時十七分。まだ眠いけど、それ以上に腹減ったな……。  
「少し早めの昼飯にするか」

寝巻のスウェット姿のまま一階のリビングに降りる。  
静かなので誰もいないかと思ったが、リビングには宮永の姿があつた。白夏と戯れて  
いた宮永は俺に気付いて挨拶をする。

「おはよう見汐君」

「おー」

朝……つて時間帯でもないが、とりあえず昼間に宮永が俺の家にいることについて違  
和感や驚きはない。白夏を飼つてから定期的にくるようになったからな。

最初の頃は俺に断りを入れてからきてたけど、今その役割は沙奈が受け持つてるので  
俺に情報は入つてこない。だから朝起きたらとか、家に帰つてきたら宮永がいる、とい  
う状況は日常風景だつた。

「沙奈と母さんは?」

「渋谷まで出かけた」

「じゃあ昼までに帰つてはこねえな」

渋谷なら買い物だろうし。

後で一応連絡だけは入れてみるか。

「見汐君はこんな時間まで寝てたの？」

冷蔵庫を漁つている俺に宮永がそう聞いてくる。

白夏を撫でる手は一時も止まらない。

「明日から学校だしな。寝溜めだ」

すぐ食えるものが何もなかつた。かといって自分で作るのも面倒だし、ここはカツプ麺で我慢するか。

そう思い戸棚からカツプ麺を取り出した俺を宮永が制止する。

「寝起きでそういうのはあまり体に良くない」

「寝起き関係なくね？まあ不健康極まりない気はするけど」

「なら私が作る」

「マジで？」

「うん。台所借りるね」

宮永が白夏を置いて我が家の中に入していく。

何度か宮永の手料理を食べたことあるけど料理の腕は結構いい。母親と二人で暮らしてるらしいから料理する機会も多いのかね。

ダイニングテーブルに腰かけ、テレビのチャンネルを適当に回しながら台所に立つ宮永の姿を眺める。ところでなんで宮永は自前のエプロンを持つてんだよ。

「昨日帰ってきたのか?」

「そう。大阪から」

「どうだつた? 遠征とやらは」

「三箇牧の子とまた打てたのは良かつた」

「ふーん」

「どこの誰だか知らないけど。まあチャンピオン宮永がそう言うくらいなんだからかなり強い奴なんだろう。

「だからこれはお礼」

「お礼?……ああ、そういうことか。直接役に立つもんでもないけどな」

「そんなことない。一年生の子は感激してた。痒いところに手が届くって」

「そーかい」

それなら頑張った甲斐があつたな。

やらなきやいけない仕事以外にも持つて行つた方がいい物リストや他校の生徒と行動を共にする場合の注意点、病気やケガなんかの緊急時に優先すべき必須事項まで詰め込んだくらいだし。それでもまだ真の完成には至つてないが。

鹿島先生にはそこまでやるかと呆れられたけど、アンタがもつとしつかりしてればあそこまでやってないわ。

しかし宮永がエプロン持参してきた理由はこれだつたんだな。あのマニュアルを作つてくれたお礼にご飯ご馳走しますよ的な。

実に義理堅い。

「できた」

「おー、うまそう」

そうこうしている内に料理が完成した。黄金色の卵と少し焦げたケチャップの匂いが食欲をそそる。

宮永が作つたのはオムライスだつた。

本日の料理長はケチャップを持つたまま小首を傾げる。

「なんて書く?」

「なんでもいいわ」

そもそもケチャップで字とか書かないし。小学生じゃねえんだから。

作つたの宮永だからそうとは言わないけどさ。じゃあ、といつて宮永が書いたのは“白夏”の二文字。

もう何も突つ込まないで食べることにした。

「美味しい?」

「ああ、うまい」

ケチャップライスにはウインナーの他にも細かく切られた玉ねぎやピーマンも混ぜ込まれていた。あの短時間でよく作れるものだと感心する。

やつぱり経験の差か。

俺や沙奈、そして父親はお世辞にも料理が上手いとは言えない。母親に任せつきりなのが見汐家の現状だ。沙奈にもそろそろ花嫁修業つてことで料理覚えさせるか。

「良かつた」

味の確認が済むと宮永は再び白夏の元へと向かう。

オムライスをつつつきながら猫じやらしで白夏と遊ぶ宮永を観察する。普段の無表情も少しほころんでいた。相当上機嫌だぞあれは。

そういえばこの光景は俺にとつて見慣れたものだけど、鹿島先生を筆頭に宮永と距離を感じてる奴が見たら結構な衝撃映像なんじやないか？小声で「にやあにやあ」言つてるし。

今度どさくさにまぎれて“みやあなが”とでも呼んでみるか。

鹿島先生にされた例の相談が頭をよぎつたりしつつ、俺のゴールデンウイーク最終日は宮永と二人で過ごしながら暮れていった。

## 9話 Side 見汐太陽

学校に到着すると教室へと続く廊下の途中に十数人の人だかりができていた。何事かと外から覗き込めばその中心にいたのは宮永だった。

どういう状況?と首を捻る。

しかしよくよく聞いてみれば「優勝おめでとうございます!」やら「応援します!」という声が宮永の取り巻きから上がっていた。そこで先週末に麻雀の春季大会あつたことに思い至る。

その声を聞けば結果は明白だった。宮永本当につえーなあ。

などと感心していると宮永と目が合った。俺には分かるぞ、あれは助けを求めている目だ。

だから俺はその意図を汲んだ上で笑いながらサムズアップを返した。ファンとの交流頑張りたまえ、ということである。

俺は宮永からのSOSをスルーして自分の教室へ向かった。宮永が解放されて教室に入ってきたのは約十分後。

席に座った宮永は恨みがましい視線で俺を見る。

「……どうして助けてくれなかつたの？」

「獅子ライオンは我が子を千尋の谷に落とす。俺はああすることが宮永のためになると信じて断腸の思いで立ち去つたんだ」

「実際のライオンはそんなことしない。そもそもその諺の獅子はライオンじやなくて空想上の生き物」

麻雀やつてると中国の故事にも詳しくなんの？んなわけねーか

読書家の宮永のことだから大方なんかの本から得た知識だろう。

「まあそう怒るな」

不満げな宮永の頬を指でつつく。やたらぷにぶにしてんな。

依然宮永の眼光は鋭いままだが、さつきの言葉に嘘はない。メディアやファンへの対応スキルは今後宮永にとつて絶対必要になつてくる。

史上初の個人・団体での三連覇がかかる今年の全国大会。最も注目を浴びる主役は言わずもがな宮永だ。日本の麻雀人気を考えれば報道が過熱するのは目に見えている。

当然インタビユーなんかの数も今と比較にならないくらい受ける羽目になるはずだ。口下手無表情ゆえの返答も、宮永のそういう部分を知らない世間から見れば冷たくぶつきらぼうに映ることもあるだろう。

だからいらぬ誤解を招かないよう俺は宮永に「ファンやメディアにはできるだけにこやかにな」と言い続けてきた。ウチにきた時は白夏相手に受け答えの練習をさせることもある。

そのおかげで去年から比べれば改善されてきているし、廊下で囮まれてたところをみると相手の体感温度を氷点下にするような返答はしなかつたようだ。

しかし整えられた場でないと営業スマイルを十全に發揮できないのが今後の課題である。テレビカメラがあると上手く猫被れるのに、咄嗟のファン対応だと完璧とは言い難い。さつきも顔は無表情のまんまだつたしな。

その辺をなんとか夏までに仕上げておきたいところだが。

……いかん。鹿島先生に宮永の問題任せ過ぎてマネジメントの真似事が身に染みつき始めている。俺は宮永のマネージャーでもなんでもないのに。

「……分かった。その代わり話を聞いて」

「おう、いくらでも聞いてやる」

自分の変化に軽いショックを受けていると、宮永の雰囲気がやつといつも通りに戻る。

宮永はカバンの中から一通の封筒を取り出した。茶封筒のような洒落つ氣のないものじやなく、親しい仲の相手へ手紙を送る時に使うようなカジュアルさのあるものだ。

「なんだこれ？」

「ラブレター」

キヤツチボール感覚で山なりに放り投げたボールがフルスイングで弾き返されたような衝撃が俺を襲う。

え、ラブレターってあのラブレター？普通このタイミングで渡すか？  
「さつき後輩にもらつた」

「お前がかい」

まあだろうとは思つたけど。宮永がラブレター書いてる姿つて想像しにくいし。

ただ宮永がもらつたラブレターを俺に差し出されても困る。まさかのモテ自慢とは言わんよな？

「……ただ、くれたのは女の子だつた」

「なるほど。問題は把握した」

超速で。これはつまり百合な展開か。

確かにクールビューティーで通つてる宮永は同性からも人気があるのは事実だ。身長も女子の中だと比較的背も高いし、凛とした雰囲気も相まって王子様的要素も揃つている。

なんか宮永が女子から告白されるのって当たり前のような気がしてきた。

「私は女の子とは付き合えない」

まあ同じ立場なら俺もそうだ。

同性愛を否定するつもりはないけど自分がそこに踏み込めるかと言えばそれはまた別の問題である。

「中身はもう読んだのか？」

「まだ」

「とりあえず読んでみろよ。もしかしたら手の込んだいたずらかも知れないぞ」

「そんなことをするのは見汐君だけ」

お前俺のことを行なうだと思ってんだ。そこまで悪質なことはしねえよ。

そう反論したかったが宮永がラブレターを読み始めたので押し黙る。時間にして一

分足らず、宮永が顔を上げた。

『お話ししたいことがあります。今日の放課後、B棟三階の空き教室で待っています』  
だつて

「本気っぽい？」

「……たぶん。どうしたらしいかな？」

「付き合えないならきっぱり断るしかないだろうな」

「そうしたら彼女は傷付く」

「それでもだ。曖昧な返答で期待を持たせるのは酷だし、相手が本気ならなおさら誤魔化すのはなしだと俺は思うね。特にこの送り主は相当の勇気を出したはずだし」同性愛は未だにマイノリティーだ。本人すら自分の恋愛感情に葛藤することもあるらしい。

この手紙の女の子はそれでも一步を踏み出した。その勇気と覚悟には嘘をついたり逃げたりせずにぶつかるべきだろう。

まああくまで俺個人の持論だけど。

「……逃げずに、ぶつかる」

何か思うところがあつたのか宮永は俺の言葉を反芻する。

宮永も唐突な出来事に困惑しているんだろうと思う。この反応からして同性から告白を受けるのは初めてみたいだしそれも当然と言える。

それでもいざ放課後を迎える頃には自分で決心がついたのか、毅然とした足取りでB棟へと向かっていった。あの辺の度胸の座り具合はさすが全国王者である。

女子に告白される宮永というのも俺の興味をそそる光景だが、それを覗き見るのはいくらなんでも無粋だろう。明日本人から結果を聞けばいいのか。

そう思い教室を出たところで弘世とバツタリ出くわした。

「よう弘世。今日も部活か？」

「ああ。お前はどうする?」

「部員じやねえんだからナチュラルに誘うなよ。自主的に行くわけないだろ」「いいじやないか。見汐はほとんど身内みたいなものなんだから」

「何その身内認定」

確かにちよくちよく顔出してるけど。部内の雑用仕事もマニュアル化して、あまつさえ麻雀部のマネージャー募集もかけてるけど。

……あれ?俺本当に部外者か?自信なくなってきた。

「それにあの話についても詳しく聞きたいしな」

弘世がニヤニヤとしたいたずらっぽい笑みを浮かべる。

コイツがこんな表情をするのは珍しいが、俺に心当たりはない。

「あの話?なんのことだ?」

「とぼけることはないぞ。照からラブレターをもらつたそうじやないか」

ああ、そういうこと。まあ確かに今朝の一場面だけ見たら俺が宮永にラブレターを手渡されたように見えるか。俺も一瞬勘違いしたしな。

弘世は「じれつたく思つていたがようやくくついたか」などと感慨深げに頷いているが、残念それはまやかしである。

「なあ弘世」

「なんだ？」

「俺が宮永からラブレターもらつたんじやなくて、宮永が後輩からラブレターもらつたんだぞ」

その一言に弘世が硬直した。それはもうダンサーかパントマイマーかと見まがうほど素晴らしい停止つぶりだつた。

弘世は鋗びたブリキのようにぎこちない動きで振り返る。

「今、なんと言つた？」

「だから宮永が後輩からラブレターもらつたんだつて」

「それで？」

「あん？」

「それでお前はどうしたんだ？」

「どうも何もないだろ。告白を受けるにしろ断るにしろ相手の気持ちを正面から受け止めろよつて——」

「バカなのか？」

唐突に罵倒された。

弘世の目が驚くほど冷たい。

「いや、疑問に思う必要はないな。見汐、お前はバカだ」

「おいおい、知らないのか？バカつて言つたやつの方が……」

「そんな下らないこと言つてないでこい！」

今度は怒り出した弘世に襟首掴まれて麻雀部まで連行される。

頭の中でドナドナのメロディーが流れる俺が連れ込まれたのは麻雀部の監督室だつた。俺自分の意思とは無関係にここにきすぎだろ。

弘世はノックもなく扉を開いた。中にいたのは鹿島先生に大星、渋谷、亦野の三人。弘世も入れれば宮永を除くレギュラー陣勢揃いだ。

何これ？レギュラー陣の集会？その割にはお菓子つまんでお茶飲んでるけど。

「あ、やつときた！」

「遅いですよ先輩」

「お茶用意しますね」

「ん？宮永はどうした？」

各々好き勝手にしゃべっているが、どうやら俺がここにくる前提で待ち構えていたらしい。これはあれか、ラブレターの一件で俺と宮永から根掘り葉掘り聞き出そうつて魂胆だつたな。噂広まるの早すぎ。

つーか監督室で何やつてんだよコイツら。全国一位の強豪校が部活時間にこんなでいいのか？

「緊急事態だ。それどころではなくなつた」

弘世がそう切り出して、先ほど俺が話した事の真相を暴露する。それが終わると一様に全員が弘世と同じような目を向けてきた。

生意気だな、大星、亦野。渋谷？お茶ありがとう。

「太陽先輩最悪つ！」

「サイマーですね」

「照先輩が可哀想です」

「この愚か者め」

「なんで俺がここまで責められなきやなんねえんだよ……」

「それが分かつてないからバカだと言つたんだ」

とりあえず弘世からの風当たりが一番キツイ。

でも宮永が告られたら俺が怒られるとかそのシステム理不尽すぎるだろ。

「大体見汐はそれでいいのか？」

未だ怒りは収まつていないうだが、それでも弘世が少し感情を押さえてそう尋ねてきた。

「それでつて？」

「もしかしたら照に彼氏ができるかもしけないんだぞ」

弘世がそう言つた瞬間、ようやく重要なピースが抜けていたことに気が付いた。

そういうや宮永が後輩の子からラブレターを渡されたとしか言つてなかつたな。そりや相手が男だと勘違いするか。

だからって俺を責める正当な理由にはならないと思うけどな。

「いや、それはねーだろ」

「なぜだ？ 今の関係に安座していられるなら……」

「ちげえわ。彼氏になるなら宮永の方だろ。ラブレターの送り主は女子だからな」

再び弘世の動きが停止する。というか監督室の空気が凍つた気がした。

普段ちよつとレズつ氣がある感じのコイツらでもガチレズ展開は衝撃なようだ。

まあいいや。これ以上ここに留まるとさらに面倒なことになりそうだしさつきと退散しよう。

「そういうわけなんで。じゃ、お疲れつしたー」

全員が言葉を失つていてる間に適当な挨拶で監督室から姿を消す。

この対応は明日以降が怖い気もするがすべては宮永が出す結果次第だろう。それに相手は女子だし宮永は断る感じだつたから俺も心配しないで送り出したわけで……つて心配？

「あ」

そんな思考に沈みかけた時、廊下の曲がり角から宮永が現れた。その隣や背後を確認してみるが一人だけのようだ。

「どうしたの？」

「もしかしたら後輩といい関係になつたかもと」

「なつてない」

食い気味で否定された。別にそこまで力強く否定する必要なくねえか。

それにもしても俺を見る宮永の目力がかつてないほど強い。いや、いつも通りの無表情ではあるんだけど、何かを訴えるような視線だった。

「なんかあつたのか？」

「相手は本気だつたみたい」

「つてことはマジ告白されたのか」

「うん。だけど断つた」

まあそれも仕方のないことだ。

相手の気持ちを尊重して、つてわけにはいかない話だしな。

「ありがとう」

「何が？」

「全部本当の気持ちで答えたから、相手も分かつてくれた。見汐君のアドバイスのおか

「そうかい」

アドバイスつてほど大したものじやなかつたけどな。拗ねずに済んだんならそれに越したことはない。そのお礼は素直に受け取つておこう。

しかしラブレターの相手が普通に男だつたらどうだつたのかね？異性に興味が薄いというか、今は麻雀が恋人つて感じの宮永が誰かと付き合うつてのは今のところ想像しにくい。

「つてさつさと部活行かなくて大丈夫か？」

通常ならもう部活が開始されている時間帯だ。

まあ監督とレギュラー陣があれだから多少遅れても問題なさそうではあるけどな。

「今から行く。今日はありがとう」

「どう致しまして」

「じゃあまた明日」

「おー」

宮永が麻雀部の部室に入つていつた。  
さて、俺も帰るか。ああ、なんかすげー疲れた……。

# 幕間　s i d e 宮永照

B棟は特別教室が多く配置されている。その三階、さらには放課後となるとほぼ無人状態。だからこそ相手は呼び出しの場所に選んだのだろう。

B棟三階唯一の空き教室の前に立ち、一度浅く深呼吸をしてから扉を開いた。中で待っていた少女が勢いよく私の方を向く。その顔は私にラブレターを渡した時よりもさらに緊張した様子だった。

「あ、あの！ 来ていただきありがとうございます！」

藤井千佳。それが手紙に記されていた彼女の名前。

藤井さんはどうしようもなくガチガチだ。言葉も動きもぎこちない。

見汐君が「相手は相当勇気を出してる」って言つていたけどそれも納得できる。これは彼女にとつてそれほど大事なこと。

だから私も逃げないでぶつかる。嘘をついたりして躲かない。

そうすることの方が正しい気がした。

「私は逃げないから落ち着いて話をして」

「は、はい！ありがとうございます！」

一応そういう声はかけてみたけれどやはり落ち着くというのは無理そうだった。

私には藤井さんが話すまで待っていることしかできない。

時間にすれば数十秒だった沈黙が、とても重苦しくて長いものに感じられた。それを破つて彼女が滔々と語り出す。

「今日宮永先輩に来てもらつたのはお話ししたいことがあるからで……」

「うん」

「そのお話というのが、ええつと……お、おかしいとか、もしかしたら気持ち悪いとか思われるかもしれないんですけど、それが私の気持ちというか……」

しどろもどろで要領を得ない。それでも藤井さんは自分の想いを伝えるために言葉を紡ぐ。

泳いでいた視線は次第に定まり、そして一番大事な瞬間には、しっかりと私の目を見据えていた。

「私、宮永先輩のことが好きです。付き合つてもらえませんか？」

藤井さんから伝わってきたのは真剣な気持ちと覚悟。

私は告白をしたことがないけど、同性に告白をするというのは異性にするよりも怖いものなのではないかと思う。振られるかもしれないというだけでなく、普通じやない、

変な人間だと思われるかもしない。それが原因で変な噂が流れたり、虐められたりするかもしれない。

そんな諸々の恐怖を天秤にかけても藤井さんは私に告白をした。

強いな、と思った。妹の強さから目を背けた私からすれば尊敬に値する強さだつた。  
私にはまだ妹と向き合う覚悟も、好きな人に想いを伝える勇気もないから。

でもせめて今ここでは逃げたくない。いずれ覚悟と勇気を手に入れるためにも。

「告白してくれてありがとう。それは嬉しく思う……けど、ごめんなさい。私は貴方と  
付き合うことはできない」

「……私が、女だからですか？」

「それがないと言えば嘘になる。でもそれが一番の理由じゃない」

「……いつも一緒にいる、あの男の先輩ですよね。実は薄々分かつてました」

藤井さんは瞳に涙を浮かべながら、それでも困ったように笑つた。

笑つてているのに、泣き出したいのを必死に堪えているような表情だつた。

「だつて遠目から見えていても楽しそうで、お似合いでしたから。きっと二人の間には入  
れないって思っちゃつてました。たとえ私と宮永先輩が男と女だつたとしても……」

「……藤井さん」

「それでも諦めきれなかつたんです。どうしようもなく好きになつちやつたんです。だ

から玉碎覚悟で告白しちゃいました」

胸が痛い。ここまで本気で私のことを好きになつてくれた人の想いを、自分の手で碎かなきやいけない。けれどそれは私にしかできないことでもある。

「本当にごめんなさい」

「いいんです、こうなることは承知していましたから。宮永先輩はあの人の方が好きなんですよね？」

「……正直に言うと分からない。私はまだ恋をしたことがないから、見汐君への気持ちが恋なのか、それ以外の感情なのか自分でも理解できない」

麻雀が強くなりたい。咲に負けたくない。

ただそれだけを考えて生きてきた私の前に突然現れた見汐君。気付いた時にはその存在が私の中でもとでも大きなものになつていた。

そんな彼に抱いている気持ちが恋なのか親愛なのか自分でも分からなくともどかしい。

「あの人……見汐君の隣にいると安心する。よくからかわれるし、たまに距離が近くてドキッときせられるけど、そういうのも含めてそこに自分の居場所があるんだつて思えて」

だから三年生になつても見汐君が隣の席だつたのはとても嬉しかつた。

できることなら見汐君にも私が隣にいることをそう感じていてほしいとも思った。

藤井さんのためにはここできつぱりと「見汐君のことが好き」と言えばよかつたのか  
もしれない。

でもそれは嘘になる。まだ私は本当の意味で見汐君が好きだと自覚できていないか  
ら。

「そんな答えじゃ納得できません。だから宮永先輩は早く自分の気持ちに気付いてくだ  
さい。そうすれば私も完全に諦めることができますから」

「それって……」

「ヒントはあげません！ここから先はご自分で考えてください！」

目尻にはまだうつすらと涙が残っていた。

でもさつきとは違う、影も憂いもない晴れ晴れとした笑顔がそこにはあつた。

「あ、それと一つ忠告です。あの先輩、わたくしたち二年生女子の間で結構人気あるみたいですよ？あ  
んまりゆつくりして いたら取られちゃうかもしけれませんからね？」

「……本当に？」

「はい」

見汐君がモテるというのはなんとなく分かる。明るくて社交性があつて容姿も悪く  
ないし、何より頼りになる。面倒見がいいというか包容力のあるタイプだと思う。

こうしてみれば後輩に人気があるというのも頷けた。しかしそれと同時に焦燥感のようなものまで感じてしまう。

「今日はありがとうございました！宮永先輩も頑張ってくださいね！」

そう言い残して藤井さんは教室から出て行つた。

私は彼女の言葉と、自分の胸に焦燥感が生まれた意味を考えながら廊下を歩く。そして角を曲がつたところで私の心を悩ませている張本人と遭遇した。

「もしかしたら後輩といい関係になつたかもと」

私の気も知らないで見汐君がいきなりそんなことを言う。少しだけイラッとしたので即座に否定したけど。

でもそんなことより、私には見汐君に言うべきことがある。

「ありがとう」

「何が？」

「全部本当の気持ちで答えたから、相手も分かってくれた。見汐君のアドバイスのおかげ

そう、あれはすべて偽りのない私の本音。見汐君が私にとつてどういう存在なのか、余すことなく伝えた。

何より逃げずにぶつかれと背中を押してくれたのは見汐君本人。口下手な私がそ

できたのは見汐君がいたからこそだ。

だからその感謝は伝えておきたかった。

見汐君は「そうかい」と言いながら肩をすくめる。大したことはしていないとでも思つているのかもしれない。

見汐君にとつては大したことがないとも、私にとつてはとても大事で大切なこと。

その言葉も行動も存在そのものも、私にとつては他の誰より得難い。

叶うことならずつと彼の隣にいたいと思う。その気持ちが恋と呼ばれるものなのか、私は一刻も早く知りたいと願つた。

# 10話 s i d e 見汐太陽

突然だが俺は高校生だ。要するに“学生の本分”というものが求められる立場にある。

じゃあその本分が何かといえば大抵は勉強のことを指して使われていることが多いだろう。だが俺はそれだけが学生の本分だとは思わない。

勉強も部活も学校行事も放課後にどつかで道草食うのもファミレスのドリンクバーだけで意味もなく長時間ダベるのもテンションとノリだけで意味不明な行動を起こすのも全部ひつくるめて学生の本分だ。言い換えるならば「青春しろ」ということである。「だから俺は自分で立候補したんだよ」

「えー、意味分かんない」

分かれよ。今説明したんじやん。

しかしその甲斐も空しく大星は理解を示さない。そんなにおかしいか？文化祭の実行委員に自分から立候補するのって。文化祭頑張るのとか青春っぽいじやん。

まあ大星の言動を見る限りコイツはやりたくないのに貧乏くじを引かされた感じだ

もんなあ。

白糸台高校は毎年、夏休みに入る直前に文化祭を行う。白糸台高校盛夏祭、通称“白糸祭”。白糸台の生徒はこの白糸祭を終えてから夏休みに突入するのである。

白糸祭は七月の本番のために五月下旬の中間テスト明けから下準備を開始する辺り気合が入っている感じだが、予算はあまりないのでその分時間と苦労を掛けて企画を仕上げろという学校側の意思表示だ。

各実行委員はHエイチRアールでクラスの企画出しを先導して行い、委員会とクラスの仲介役をしながら企画の草案を精査して実現可能な範囲まで仕上げていくのが主な仕事だ。あとは本番当日の運営も任されるため全体の流れを把握しておく必要もある。

根気とやる気が求められる仕事なのだ。

俺の隣では大星が「めんどくさいなー」とぼやきながら机に突つ伏している。お前委員長の話聞く気ないだろ。本格的に仕事が始まつてから狼狽えても知らんからな。

まあ今日は顔合わせの意味合いが大きいからそんなに影響ないとは思うけど。

結局大星は最後までだらけていた。他の委員から厳しい視線を飛ばされても気付かず、終始だらけていたのは逆にすごい。ダメな意味で。

「あー、やっと終わったー」

教室を出た大星があくびをしながらぐーっと背伸びをする。

そんな疲れるようなもんでもなかつたけどな。

つーかどちらかというとお前の隣にいた俺の方が気疲れしてるからね。あんまり舐めた態度だと風当り強くなるから気を付けろよ。

なんて注意しても素直には聞かなそうだけど。鹿島先生が部内でも宮永以外を見下す傾向にあるって言つてたが、あれつてもしかして麻雀に限つたことじやないのか？興味のないものに関してもそういうところがあるのかもしれん。

宮永に懷いてるのは麻雀が自分より強いからとかだろうし、それ以外やそもそも興味がない分野に対しては関係ないとかどうでもいいとか思つてそうだ。委員会に関しても「なんで私がこんなことを」オーラが滲み出でていた。

わがままというか子どもがそのまま大きくなつたみたいな奴だよなあ。コイツこのまま大人になつたらどうなるのかすぐ心配。

口下手無表情の宮永とはまた違うベクトルの心配だ。

「はあ、学食寄つてちよつと休んでいくか……」「え、いいの!?」

ポツリとこぼした一言に大星が反応した。なんで俺が奢る感じになつてんだよ。  
ちよこちよこと後ろをついてきたから奢つてやつたけど。そこで飲み物じやなくて  
パフェを頼むところがこの上なく図々しい。

「俺にも一口食わせろ」

「やだ」

「即答かよ」

お前目の前で奢つてやつた先輩が缶ジュー飲んでるのに思うところはないの？  
……ないか。

二人掛けの席に座つた俺は、缶ジューをちびちびと飲みながら美味しそうにパフェ  
を頬張る向かいの大星を眺める。こうしてると可愛いだけの後輩なんだけどなあ。

自信過剰というか傲岸不遜な面があるというか。ああ、生意気つてのが一番しつくり  
くるか。

「なあ

「なに？」

スプーンをくわえたまま首をこてん、と傾ける大星。すごくアホっぽい。

「大星つて麻雀以外に好きなものつてあるのか？」

「麻雀以外？」

「そうそう。趣味とかでもいいけど

「んー、アクセとかブランド？」

そう言つて大星がカバンから取り出したブレスレットを左の手首に付ける。その名

に相応しく星の装飾が散りばめられた女子らしいアクセサリード。

「そういうのつけてるところ初めて見たな」

「だつて学校では禁止だし」

「俺の耳を見てから言えや」

そこにはしっかりとピアスが二つほどご健在である。

派手つてことはないがパツと見てもすぐ分かる程度には目につくはずだ。

「そういえばなんで太陽先輩はピアスして怒られないの？」

「そんな校則ないからな。アクセとか髪染めるのが禁止かどうかは部活によつてだぞ。麻雀部はかなり厳しいからダメなことに変わりはないけど」

俺みたいな帰宅部でつてのは珍しいかもしれないが、軽音部やダンス部の連中にはピアスくらいしてると普通にいる。どんだけ周りの人間に興味がないんだよ。

でも麻雀部つて一応厳しいせに大星や亦野の髪についてはなんも言つてないっぽいよな。まさか地毛なのか？

大星は金髪だからそういう血筋つて線もあるけど、亦野はあれブリーチ確定だろ。超薄いミントグリーンみたいな色しやがつて。まあ監督からして割と鮮やかな赤だから突つ込むのも野暮な話か。規律が厳しいとは一体……。

「なにそれずつこい！」

「ずっとこくねーし。というか顔を拭け」

頬にクリームついてつから。

そう指摘してやると大星はポケットやカバンの中を漁つてから、気まずそうに答えた。

「ティッシュもハンカチもない……」

「はあ……」

思わずでかいため息が出る。

女子の身だしなみとしてそれはどうなんだ。

「違うよ？ 本当はいつも持つてるんだよ？ 今日はたまたまどつちも忘れちゃつただけだから

「はいはい、 そうですね」

「本当だつてば！」

「分かつたつつーの」

「むぐう……」

身を乗り出してきた大星の顔に、俺は自分のハンカチを押し当てる。今日のはまだ未使用だから安心せい。

しかしそんな気遣いなど大星には不要だつたようで、俺の手からハンカチを奪つて口

元を拭うと、いきなり別の方向に話が飛んだ。

「ぶはあ！そーいえばさ」

「なんだ？」

「先輩の財布、もしかしてアレイアア？」

「……よく知ってるな」

特に有名というわけでもないブランドを言い当てられた。

ポルトガル語で“砂”を意味するアレイアの名を冠している通り洗練されていない、武骨な印象を受けるデザインが多いブランドだ。値段もお手頃なので高校生の身分にはありがたい。

そんな男物をメインに扱っているブランドを一目で見抜いたのも驚きだが、会計の時にチエックを済ませている辺りがこれまた目ざとい。

あれか、持ち物から男のランクを評価していく特有のシステムが発動したのか。

「アレイアは腕時計に限るとシンプルなデザインが多いんだよ。その割にはカラーバリエーションがあつて好きなんだー。女の子向けはほとんどないけどファッショニヨンによつては合わせるのも全然オッケーって感じ」「へー。マジで詳しいのな」

「えっへん！」

アレイアの腕時計つてちゃんと見たことないな。いつも行く店では腕時計のスペー  
ス小さいせいもあるけど。

しかしコイツもしかして意外とおしゃれ志向なのか？ブランド名やその特徴がスラ  
スラ出てくるところをみるとわかではなさそうだ。

「ちなみにそのブレスレットはどこのだ？」

「あ、聞く？ 聞いちゃう？」

「なんか急に聞きたくなくなつた」

「これはね、最近見つけたハンドメイド雑貨のなんだ！」この前桜通りのちよつと裏手に  
あるリフエールつてお店をたまたま見つけてね——」

俺の意見なんて全く聞こえていないようだ。大星がベラベラと語り出す。相当お気に  
入りらしかつた。

その後三十分にわたりリフエール雑貨の可愛らしさや完全ハンドメイド故の品質の  
高さについて力説されたが、その最中に部活にこない大星を探しにきた捜索隊によつて  
話の途中で連行されていった。

正直助かつた。女の子向けの雑貨に興味とかないしな。

とはいえそれなりに意義のある時間でもあつたか。

麻雀部へ連れていかれる大星を見送りながら、たまにはこんな放課後も悪くないかと

思つ  
たりし  
た。

# 11話 side 見汐太陽

「……つてなわけで頼むよ。このとーり！」

「はあ……分かつたわよ」

頼み込む俺の姿に押し負けてか、同級生——中塚が呆れた様子で折れた。

ありがたいが、しかしその目はなぜか冷たい。宮永が男にラブレターをもらつたと勘違いした時の弘世を思い出す。

「でもそこまでする必要あるの？見汐は関係ないと思うけど」

「関係なくはないだろ。仲間仲間」

「ふうん」

どうも納得はしてないみたいだけどやつてくれるならそれでいい。そうすれば大丈夫だろ。

きつと、多分。

「まあダメだつたらその時はその時だな」

「お節介なんだか無責任なんだか……」

中塚の呆れ具合がパワーアップしていく。

これはお小言をちようだいする前に逃げるに限るな。

「んじやそういうことでよろしく！」

返事は聞かず、足早にその場を去つた。

昼休みなのでそのまま学食へ向かうが、一番混み合う時間と重なつたようで券売機の前に長蛇の列ができていた。これに並んで買うと食う時間がほとんどなくなるなー。

しかたないので学食に併設されている購買でいくつかの惣菜パンとコーヒー牛乳を見繕つた。教室に戻り自分の席に座ると、宮永がちょうど弁当を食べ終えたところだった。

「我、帰還セリ」

「お帰りなさい。学食に行つたんじや？」

若干片言の挨拶をサラッと受け流した宮永は、俺の手の中にある惣菜パンを見て疑問に思つたらしい。

まあ学食に行つた奴がメロンパンやらハムチーズサンドを抱えて帰つてきたら不思議に感じるか。俺は別に大食いキヤラで通つてるわけでもないし。

「ちよつと野暮用がな。それが終わつたら食堂めちゃ混みだつたから諦めたんだよ」「……野暮用つて淡のところ？」

「いや、違うけど。なんで大星?」

「昨日、淡が部活に遅れたのは見汐君と話してたからって聞いて」

「言つとくが俺は悪くないぜ? アイツにパフェを奢らされただけだからな」

四百円は普通に痛い出費だつた。進路決まつたらバイトしよ。

「ごめんなさい」

「いや、宮永が謝ることじやないだろ」

「淡は部活の後輩だから」

「んなこと言つたら単に俺の後輩つてだけの話だけどな。ハムチーやるから元気出せ

よ」

「いらぬいし、私は元気」

そうかい。

だが宮永は変なところで眞面目だから予想してないところで落ち込むこともある。  
要注意だ。

鹿島先生もその辺察せるようになんねえかなあ。

「それに、私もパフェの方が食べたい」

「まさかのリクエストだな……」

「冗談」

ですよね。まあそんなこと言えるくらいに元気だということは分かつた。  
多少落ち込んでるよう見えたのは勘違いかもしれん。俺も宮永マスターとしては  
まだまだだな。

しかし思ひ返せば会話のキャッチボールすらままならなかつた初期宮永（二年春当  
時）から考えれば大きな成長を遂げたもんだぜ。あ、目頭が熱く……。

という小芝居は置いておくにしても、よく白夏の世話をしにきてくれるしこの前も昼  
飯作つてもらつたりして宮永には感謝することがかなり多い。パフェ一つで返せる恩  
でもないけど、大星相手より気持ちよく奢れるのは間違いないな。

「でも最近の見汐君は学食とか購買が多い気がする」

宮永がポツリとそうこぼした。

よく見てんな。その通りだ。

こここのところ母親の仕事が忙しいせいで朝早くから四人分の弁当を作る余裕がなく  
なつた。なので今はもっぱら学食か購買で済ませている。

「ほら、うちつて母さんしか料理しないだろ？」

「もしかして千加子さんに何かあつたの？」

「心配すんなよ。仕事が忙しいだけだ」

といつてもあと一ヶ月は今の状況が続きそなのは懸念事項なんだけど。

帰りも遅くなる日が続くので夕飯は俺と沙奈が慣れない料理に四苦八苦しながら用意している。まあ半分くらいインスタントか出前に頼つてるのが実情だが。

昨日もレンジでチンしたご飯とレトルトカレーという到底料理とは言い難い夕飯で済ませたし。でも一応サラダもあつたから栄養バランス的にはそこまで悪いもんでもないだろ、うん。

「……」

「宮永？ どうした？」

なんか急に無言になられると少し怖いんだよ。

「なんでもない。じゃあ明日もお昼は学食？」

「まあそうなるかね」

「そう」

それで宮永との会話は終了した。時計を見れば時間もないのでパンをコーヒー牛乳で流し込んで五分もかけずに昼飯を食い終わつた。

よく囁まないと体に良くない、とでも言いたげな宮永の視線はスルーした。この前の寝起きカツラーメンの件と言いコイツ時々母親みたいなこと言うからな。結構健康志向なやつである。

ここはいつそ白米にたくあんだけという質素を通り越した極貧の弁当を見せつけて

多少不健康な食生活くらいは容認させるべきかもしない。

……いや、別に宮永が常に俺の食卓に入れるわけじゃないから要らん心配かそ  
れは。つていうかそんな弁当俺が耐えられないから。

せめてお茶漬けの素とお湯は装備させてくれよ。

そんなどうでもいいことを考えながら残りの授業を乗り越えた俺を待ち受けていた  
のは気合満点の妹だつた。

「明日のお弁当はあたしが作る！」

「任せた」

帰宅した俺になぜかやる気全開でそう宣言する沙奈。玄関で待ち構えてるくらいや  
る気MAXなら夕飯も作ってくれや、と思わなくもないがせつかく料理に目覚めたのな  
らそれに水を差すこともないか。

結局夕飯は俺お手製ざく切りキヤベツと豚バラ肉が入った焼きそばになつた。もち  
ろん麺と味付けはパツクのものだ。

で、翌朝。

あれだけやる気に満ちていた沙奈は起きてきた俺の顔を見るなり満面の笑みでこう  
言つた。

「お弁当作るの忘れちゃつた！」

「せめて悪びれろや」

いつも清々しいほどの笑顔だつた。

せめてもの腹いせに沙奈の両頬をビヨンビヨンと引っ張つてから家を出る。何がしたかつたんだアイツ……。

朝から脱力させられちまつたぜ。

「おはよう」

「おー……」

教室についた俺はなんとなくぐつたりしながら宮永にだらけた挨拶を返す。

別に弁当がないならないでいいんだけど、あると思ってたものがないと凹むこの症状に名前はあるのか？まあどつちでもいいかー。

今日はぐだーっとしよう。俺はナマケモノの化身となるのだあ。ぐだー。

そんな省エネモードに移行した俺の肩をつつく者がいた。

「見汐君」

「んー？」

机に突つ伏したまま首の向きだけ変えて宮永の方を向く。

眼前に差し出されたのは猫のマークが描かれた包みにくるまれた何かだつた。

「これは？」

「お弁当」

「誰の？」

「見汐君の」

「……誰が作ってきたんだ？」

「私」

「……」

「……いらない？」

おい宮永、ホームルーム前の教室の空気が凍つたぞ。お前すごいタイミングでぶつこんでくるな。

これが高校王者たる所以か……。

なんて軽く現実逃避していると徐々に宮永の表情が不安そうというか悲し気なものに変わっていく。無表情だけど（矛盾）。

あとついでにクラスの連中の視線も痛い。お前ら関係ねーから明後日の方でも向いててくださいお願ひします。いくらなんでもガン見し過ぎだからね。

こんな状況で要らないとは言えん。というか元より拒否の気ゼロだし、非常にありがたいんだけどさ。

せめてこう、渡す時は人目につかないようにそれとなくするわけにはいかなかつたか

なあ。これ後でまた噂話として面白おかしく広まるぞ絶対。

賭けてもいい。負けたら衆人環視の中で宮永にあーんしてやるわ。  
……何その自らネタを提供していくスタイル。ドMじやねーか。  
さすがの俺も動搖しておるわ。

「サンキュー。ありがたく食わせてもらう」

「うん」

内心の気恥ずかしさをなんとか誤魔化して宮永の手作りだという弁当を受け取る。  
だが宮永よ、最後に俺じやなくとも分かるくらいしつかり微笑むのは卑怯じやねえ?

## 12話　s.i.d.e 見汐太陽

朝っぱらからクラスメイト達の面前で宮永の手作り弁当を頂戴して数時間。現在時刻は昼の十二時を少し回つたところである。

あと十分ほどで四限目の授業が終わり待望の昼休みを迎える。  
しかし待望しているのは俺ではなくクラスメイト達の方だ。俺が宮永の弁当を前にどんな対応を見せるのか、出歯亀根性丸出しで待ち侘びている感がさつきから漂つているのを肌で感じる。

お前らどんだけ気になつてんだよ。

当事者の一人であるはずの宮永はそんなクラスの空気など微塵も察していないうないつもの無表情で黒板と向き合つている。今ばかりはその肝の座り具合を見習いたい。

まあコイツの場合はちょっとズレてるせいもあるんだろうけど。

そんなことを考えている内に時間は刻一刻と進んでいく。授業終了までは残り三分だ。

もう逃げ場はない。いやまあ元から逃げるようなもんでもない気もするが。

宮永のことだ、この弁当に込められている意味もお礼であつてそれ以上や以下のことはないだろう。例の後輩ちゃんから告白された時に俺のアドバイスのおかげでどうこう言つてたからな。

アドバイスつてほどのものとしたつもりは毛頭ないけど、それをどう判断するかは宮永次第だ。その結果として宮永は俺に感謝して、お礼に弁当を作つててくれたわけだ。

そんなバツクボーンを知らないクラスメイトからすれば「なぜか宮永さんが見汐に弁当を作つてきた」という驚きがあり、そこから「まさか一人は付き合っているんじゃ?」という面白半分の邪推に発展している。一部からは嫉妬も混ざつてそうだけどな。

だがしかし、それは言うまでもなく勘違いだ。

確かに最近宮永は休日になると俺の家に来て白夏と戯れるついでに自分で作つてきた料理をおすそ分けしてつてくれるし、この間の日曜なんか外出先から帰つてきたらなぜか俺の部屋のベッドに寄りかかるようにして眠つていた。

なんでそうなったのかと聞けば沙奈と二人で家中を掃除し、最後に天日干しをしていた俺のベッドの掛け布団を取り込んだところでちよどい疲労感に負けてつい居眠りしてしまつたらしい。

……改めて考えてみると俺宮永の世話になりっぱなしだな。頭上がんねーじやんさしづめ宮永大明神様つてところか。

祀つたら連續和了の加護とかありそう、なんてクソどうでもいいことを考えているとついに四限目の授業が終わつた。

日直が終了の号令をかけて教師が退出すると教室が一気に騒がしくなる。その中にこつちの様子を窺つている気配があるような気がしないでもなくない。正直気配とか分からんし、またぶんいるんじやない？程度の勘だけど。

さて、ここはどう動くべきか。

ぶつちやけこの空氣の中で弁当をつつくのは気が進まない。宮永が作ってくれたわけだししつかり味わつて食えるところに行くとしよう。

そう思い立つた俺の隣では宮永が自分の弁当を広げようとしていた。

マジかお前。本当に周囲の空氣なんぞお構いなしだな。

とはいえ本人が気にしなくとも俺が離脱して宮永だけここに残ればコイツが好奇の視線を浴びせられる恐れがある。

「なあ宮永」

「なに？」

「お前昼飯は誰かと食う予定でもあるのか？」

「特にない」

「なら外で食おうぜ」

好都合なことに今日の宮永はぼつち飯の予定らしいので俺の方から誘う。その一言に周りが色めき立つた。

これはこれで注目を集めると、それを全部俺が引き受ければノープロブレムだろう。どうせこのクラスで宮永本人に真相を直撃するほど物怖じしない生徒はない。聞きたい奴は全部俺の方に流れてくるだろう。

で、俺はそれを片つ端から否定してやればいい。面白がってるだけの奴がほとんどだろうからつまらない返答をくり返されればすぐに飽きるはずだ。

わざと勘違いをさせたままにしておいていざと言う時にそれを利用してやろうかとも考えたが、これは俺だけの問題じやなくて宮永の問題でもある。

夏のインハイ予選まで約一ヶ月。麻雀に集中したいんだろうこの時期に宮永に余計な負担をかけるのもあれだしな。

本人はそんなもんまるで意に介さないかもしれないが、妹との直接対決ができるようになに万全を期してやるに越したことはない。それが宮永の人生を左右する大きな分岐点になりかねないみたいだからなあ。

「うん」

「おーっし、じやあ行こうぜ」

了承を得たので宮永を連れ立つて教室から脱出する。俺達がいなくなつてすぐに教室内のざわめきが一段と大きくなつた。

これでアイツらの勘違いは加速したかもしけん。期待するだけムダだけどな！内心でそう強がりつつ宮永とやつてきたのは屋上だ。

全面コンクリートの床にところどころ錆びた金網のフエンス。ベンチの一つもない殺風景な光景のせいかあまり人気のあるスポットじやなかつたりする。今も先客は誰もいない。

「どうして屋上に？」

「人が少ないからな。ここの方が落ち着ける」

「……そう」

「まあ何はともあれ飯にしようぜ」

金網を背にしてどかつと座る。宮永はそんな俺の隣に、三十センチ四方ほどの敷物を敷いてから腰かけた。

「お前いつもそんなもの持ち歩いてんの？」

「一応、制服が汚れないように。見汐君も使う？」

「いらんいらん

てか自分用以外のも持つてんのかよ。宮永つて何気に女子力高いよな。  
料理を始めてに家事全般できるし、細かい気配りもできるし、よく見れば動作や作法なんかも洗練されてるような気がする。育ちの違いとあればけど、親の躊躇の賜物つてやつかもな。

沙奈や大星は宮永を見習つた方がいいんじやねえの?

「はい」

「お、ありがと」

宮永にお茶らしきものが注がれた水筒のフタを渡される。  
そーいや飲み物買つてくんの忘れてたな。

「つて宮永はどうすんだ?」

その質問に宮永が固まる。しばし考えた後、宮永はこう答えた。

「一緒に使う?」

「なんで疑問形なんだよ」

まあ持ち上げた途端に天然つぶりを炸裂させるところは宮永らしいと言えなくもないが。

「……ダメ?」

「ダメっていうか、お前がいいならいいけどさ……」

「気にしないから大丈夫」

それはそれで乙女として大丈夫じゃないような気もするが深く考えないでおくことにした。

二人の間に水筒とそのフタを置いて包みから弁当を取り出す。二段になつてある弁当箱だつた。

その中身は下の段がふりかけのかかつたご飯。上の段はおかずになつてゐるが、卵焼きとミニトマトしか分からん。

「なあ、こいつらはなんだ?」

「豚肉とブロッコリーを黒酢タレで炒めたのと、小松菜のからし和え」

「渋いなおい。あ、でも美味いわ」

「体にもいいからちゃんと食べてね」

「余裕で完食するから安心しろ」

相変わらずのオカン目線だが、宮永の料理の腕前も本当に大したもんだよな。女子高生が弁当のおかずに黒酢タレやらからし和えをチョイスするかね。

手間暇がかかつてるとか手軽にさつと作れるものなのかも判断できないけど、普段からしつかり料理してないとこういうのは作れないだろうな。

感心しつつ俺の箸は止まらず、ものの十分ほどで食べ終わつてしまつた。

「お粗末様でした」

「そう言つた宮永は自分の弁当をまだ半分ほどしか食べ終わつていない。まあ食つて  
る最中もこつちをチラ見してたからな。

美味いってのは本心からだつたけどやつぱり反応が気になるのかね。

「どこがお粗末なんだよ。マジで美味かつた。ああ、弁当箱は洗つて返すな」

「いい」

「いやでもな、ただ食わしてもらうだけつてのも……」

「いい。それは明日も使うから」

「明日も?」

「見汐君、しばらくお弁当ないつて言つてたから」

えーっと、それはつまり今日だけじゃなくて明日、さらには明後日以降も弁当を作つ  
てくれるつてことか?

そこまでされる覚えはないんだけど。

「さすがにそれはどうよ」

「……迷惑?」

「逆だ逆。そこまでしてもらうのは心苦しいんだつて」

「平気。私がしたいからやるだけ」

コイツそんなに料理好きだったの？万が一プロ雀士にならないならそつちの道も将来的にはありかもな。

案外料亭の女将とか似合うかもしけん。

『料亭みやなが』……ありだな。

そんなはずれた思考に走っている間にも宮永は俺を見つめている。その瞳に映る意思是固かつた。

宮永が麻雀以外でここまで気合を出すのも珍しい。まあ本人がやりたいっていうなら得しかしない俺が断る理由はないわけで。

「……じゃあ頼む。ただし宮永の負担にならない範囲でな」

「うん。任せて」

それが俺の出した落としどころだつた。まあ九割方押し込まれた形だけど。

宮永の意思を尊重した、という言い訳ぐらいしか立たない俺は悪くない。宮永の弁当が美味しいのが悪い。

# 幕間　s i d e 宮永照

「照、少しいいか？」

部活中、そう声をかけてきたのは董だった。少し外そと誘われたので誰もいないベランダまで出る。

六月の夕暮れ。吹く風は体にまとわりつくようにジトツとしていて、お世辞にも気持ちのいいものではない。梅雨明けはまだ遠く、しばらくこんな気候が続くかと思うと少し気が滅入る。

部室内にクーラーを設置してくれたりすればまた違うけれど。

「それでどうかしたの？」

この時期だしそろそろ始まる対抗試合についてだろうか。

白糸台高校の麻雀部には五人一組のチームがいくつか存在する。そのチームには各コンセプトがあつて私や董のチームは攻撃特化型。

そういったチームが対戦し勝ち上がったところが夏の予選大会に出場できる。春の大会は私達のチームが勝つたからレギュラーとして出場したけど、部内の競争で負けれ

ば夏は出られない可能性もある。

だから真剣に、本気で勝ちに行かなきゃいけない。

「息抜きのついでさ。そこまで身構えるような話題じやない」

「そう」

「ああいや、でも照にとつてはそうでもないのか？」

「どういうこと？」

董は咳払いをすると私の目を覗き込む。そしてこう言つた。

「照、お前は見汐のことはどう思つているんだ？」

「どうつて？」

「アソツのことが好きなのかどうかって話だよ」

好き、というのは異性として、という意味だろう。話の流れでそれくらいは分かる。  
分かるけど、好きかどうかその核心はまだ分からぬ。嫌いじやないのは間違いない  
けど。絶対に。

「……どうしてそんなことを聞くの？」

「照のところには行つていらないようだけど私のところへ聞きに来る一年は多いんだよ。

『見汐先輩と宮永先輩は付き合つてるんですか？』つてな。最近は特に多い』

「私と見汐君はそういう関係じやない」

「そんなことは承知しているがそれは今の話であつてこれからもそだとは限らないだろう。というかな、お前今日アイツに弁当を作つてきたそうじやないか。憎からず思つている相手じやなればそんなことはしないんじやないか？」

「それは……」

あのお弁当は日頃のお礼を兼ねたもの。

でも董の言う通り、お礼だけならそこまですることはないかもしない。少なくとも連日お弁当を作るなんて申し出は見汐君以外にはしないと思う。それは私が見汐君のことを好きだから、なのだろうか。

「別に後輩からの質問が煩わしいとかじゃない。しかしお前達が付き合つていないと私が断言すれば見汐にちよつかいをかけそうなのがちらほらいるんだ。お茶を濁すにも限界はある」

「……恋愛は自由。後輩の子達に気を遣わせる必要は——」

「馬鹿者」

ない、という言葉尻は董にかき消された。

「確かにそれは正論かもしれない。だが仮に見汐に彼女ができるとして照はなんともないか? 何も思うところはないと言えるか?」

「……」

そう問い合わせられて、私は返事をすることができなかつた。

この前、淡が部活に遅れたのは見汐君と話をしていたからだと聞いた。見汐君も淡にねだられてパフェをごちそうしたと言つていた。

そんな二人の光景を想像して心がざわついたのはまぎれもない事実。

あの時の羨望とも嫉妬ともつかない感情は、これまで感じたことのないものだつた。「私は麻雀部の部長だ。問題が部に関するものであれば照でも後輩でも公平に判断するつもりでいる。だが恋愛についてなら話が違う。もし見汐が誰かとくつつくことで照が傷付くというなら、私は徹頭徹尾お前の味方だよ。それが麻雀部の部長ではなく、宮永照の友人としての私の気持ちだ」

「董……」

「まあ人にはそれぞれのペースがあるし焦らせるつもりはないが、だからと言つて長引かせてもいいことはないと思つてな。特にお前達はお互いに鈍感で関係が進展しそうにないし」

「……否定はしない」

高校三年生にもなつてお付き合いはおろか未だに初恋すら経験していない自分が恋愛に聴いはずもない。

恋愛も、それ以前に他人との対話すらも避けて私は麻雀に打ち込んできた。それはあ

る意味でコミュニケーションからの逃げだつた。

そのツケが今、私の胸の中のもやもやとした想いとして現れているのかもしれない。「しかしながら見汐がモテるのか私には不思議でならないんだがなあ」

「そんなことないと思うけど」

「そうか？まあ確かに顔は良い方の部類だが」

「それだけじやない。見汐君は頼りになる人だから」

気難しいところのある淡がすぐに懷いたのがいい証拠だと思う。面倒見がいいお兄ちゃん気質は、特に年下からすれば魅力的なはずだ。

藤井さんも言つていたし、一、二年生から人気があるのはむしろ当然かもしれない。  
……人気なのかな、やつぱり。

「董」

「なんだ？」

「さつきのもし見汐君に彼女ができたらって質問だけど、たぶん平氣じやない……と思  
う」

「たぶん止まりか。まあそう言えるだけ進展しているのか？」

「こんな風に思うのは、私が見汐君のこと好きだからなのかな？」

「その答えばかりは自分で出すしかない。もつと見汐と、そして自分の気持ちと向き

合つてみるといい」

「……うん」

人と、そして自分と向き合う。それは私自身これから自分がやらなければいけないと考えていたこと。

それができれば私は……。

「さあ、そろそろ戻ろう。女子高生らしい恋バナも悪くはないが、私達にはやらなければいけないことがある」

「そうだね」

董は笑みを浮かべながら部室の中に戻っていく。

その背中に向けて、私は小さな声で「ありがとう」と呟いた。

# 13話 s i d e 見汐太陽

家に帰つた俺を待ち受けていたのは満面の笑顔を浮かべた沙奈だつた。やはり宮永とグル……いや、コイツが企んでわざと黙つていただけか。宮永が沙奈に対して口止めするとは思えないしな。

「ふふふふふ。お兄ちゃん、今日のお昼はどうだつたかな？」

とりあえず脳天に拳骨を食らわせた。コツンつて感じの軽めな一撃だが。

「あたつ！」

「いいドッキリだつたぞ」

「じゃあなんでぶつの!?」

「いいドッキリだつたからだ」

言いつつ、ぶーたれる沙奈に持つていた袋を手渡す。

「何これ？」

「アイス。好きなの食つていいぞ」

「お兄ちゃん大好き！」

「はいはい」

袋を抱えたままリビングに消えていった。我が妹ながら単純で助かるぜ。

沙奈が俺に情報を流さなかつたせいで朝から面食らつたわけだが、ぶつちやけあのサプライズに悪い気は全然しなかつた。むしろ嬉しかつたと言える。

まあそんなこと宮永にはもちろん沙奈にだつて言わないけど。アイツは俺と宮永をくつつけようとしてる節がある。もし明日以降も宮永に弁当を作つてもらうことになつた、なんてバレたら全力で食いつかれるのは目に見えている。めんどくさいこと請け合いだ。

つーかそれ以前に同級生に弁当を作つてもらうとかなんかアレな感じがしてわざわざ言う気も起きない。

そんな感じで色々あつた宮永手作り弁当事件の翌日。事件はまだ終わつていなかつた。

俺は確かに思つた。弁当を渡すならもつと人目のないところでしてくれよ、と。思つたよ? 思つたけどさ。

「おはよう、見汐君」

さすがに朝から家に来るのは予想外だつたわ。

朝の七時半過ぎ。インターフォンが鳴つたので沙奈に対応させたらなんとも形容し

がたい悲鳴っぽい声が聞こえた。何事かと思つて見てみればインターフォンのカメラに宮永が映つていました、というわけである。

驚きであまり反応できなかつた。あと沙奈はいい加減慣れろよ、宮永に。来ると分かつてる時ですら未だにそわそわしてゐるからな。

「……よう。どうした？」

「これ」

そう言つて宮永が差し出してきたのは昨日と同じ包みの弁当だつた。

「おお、サンキュ。わざわざ悪いな」

「ううん。昨日教室で渡したら目立っちゃつたから」

「宮永も気付いてはいたんだな」

「なんとなく」

あの熱視線でなんとなくかい。

じやあ今リビングの扉の隙間から沙奈が目を輝かせて俺達を覗き見ることには気付いてないんじやねえの。

昨日のはフラグだつたらしいな。これで沙奈にはバレたが、裏を返せば隠す必要性が無くなつたと言えなくもない。

「俺まだ朝飯の途中だからちよつと上がつて待つてくれ」

「いいの？」

「ここまでしてもらつて先に行かせるとかねーわ。学校一緒に行こうぜ」

「うん」

「朝飯は？」

「もう食べてきた」

「そうか。まあお茶くらいは出すぜ」

「ありがとう」

「コーヒーでも紅茶でもいいですよっ！」

せめて宮永が入つてくるまで待つてろよ。てか家にある紅茶つてパツクのしかねえ  
けど。

「おはよう、沙奈ちゃん」

「おはようございます、照さん！ささ、こちらへどうぞ」

コイツいつか宮永のことを「先生」とか呼び出しそうだな。

まあ宮永がプロの雀士になればそう呼ばれても違和感ないけど。宮永先生、か。

白のブラウスにタイトスカート。リムフレームのメガネに指示棒装備の宮永を想像する。……うむ、悪くない。というか、いい。

プロになつたらそういうスタイルで売り出すのもありだな。世のドM野郎共に人気

でそうだし。

「見汐君、変なこと考えてる?」

「まさか。俺は将来のビジネスモデルをだな……」

「お兄ちゃんが訳分からぬこと言いだした時は大抵下らないこと考えてますから注意してくださいね?」

「うん、知ってる」

「お前ら最近徒党を組んでるよな」

おかげで宮永と沙奈が揃つていると俺が不利な目に遭うパターンが増えている。

そんなことを思いつつ、沙奈と戯れる宮永を眺めながら俺は朝飯をかき込んだ。

この日を境に、宮永が朝俺の家に来て弁当を渡し、そのまま沙奈も含めた三人で登校する、ということが続くようになった。人間は慣れる生き物だとよく言われる通り、一週間も続ければ習慣になるもので、気付いた時にはそれもまた俺の日常の一つになっていた。

そんな感じで宮永との関係も少しずつ変わってきたことを実感し出した六月の下旬頃。未だに梅雨が明けずすつきりしない天気が続いていたその日、宮永のところに大星が泣きついてきた。

「テルー! 勉強教えてー!」

放課後の教室に飛び込んできた大星はいきなりそう言つた。すでに半泣きである。

大星の悩みは、なんというか悲しいほどに予想できていた感じのものだつた。

宮永が大星をあやしながらどうしたのかと話を聞き出す。要点をまとめると『期末テストが二週間後にあること、赤点を取ると補習に参加させられ、その日程が東京都予選の日程と被つていることをさつき知つた。五月のテストでは赤点が四つあつて、今回の期末は科目も増えるからもつとヤバい』つてことらしい。

「普段から勉強しとかないのが悪い」

「正論だが容赦ないな……」

話の途中で宮永を迎えて来た弘世がそんな言葉を漏らす。

「だつてー……」

普段張り合つてゐる元気が嘘のように影を潜めてぐすぐすと鼻を鳴らす大星。宮永はそんな大星の頭をずっとよしよしと撫でてゐる。

なんか家で白夏と遊んでいる姿と重なつて見えるな。  
「淡、どれが分からぬの？」

「全部だよー！」

「弘世、予選は大星抜きだ。まあ補習を受けても全国には間に合うから大丈夫だろ」「頭が痛い……」

部長つて大変なんだな。

大星はこんなバカっぽくても大将だつてし、予選とはいえ大将が欠場つてやつぱりヤバいのかね。

「先鋒の宮永が全試合で相手を飛ばしちまえば大将まで回らんし大星不在でもなんとかなるんじやねーの?」

「できなくはないけど、そうすると董達の初戦が全国になる。それは避けた方がいい」「なるほど。つーかできちやうのかよ」

さらつと恐ろしいことを言いよる。さすがチャンピオン、格が違つた。  
「だから淡にはなんとか赤点を回避してもらう」「ああ、無理でもなんでもな」

宮永と弘世から氣炎が立ち昇る。前門の竜コードスクリュ、後門の狙撃手シユータか。

強く生きろよ大星。

俺は自然な感じでフェードアウトしようと試みたが、ガシツと右腕を捕まれる。その犯人は宮永だつた。

「……宮永さん?」

「協力してほしい」

「大星の勉強をか? お前ら二人だけでも大丈夫そうだけどな」

「理数系は私や董より見汐君の方が得意。だから、お願ひ。……ダメ?」

宮永の瞳はいつもながらの無表情だ。しかしそれは表向きであつて、俺は宮永が妹との決着をつけるためにどれだけの意気込みで高校最後の大会に挑もうとしているのかを知つてゐる。

万に一つも予選で敗退となる可能性は排除したいのは分かる。

それになんだかんだで後輩の面倒見もいい宮永のことだ。大星をしつかり大将として戦わせてやりたいという想いもあるんだろう。

そこまで分かつていて、さらには日頃から弁当だのなんだの世話を焼かれている身である。宮永の頼みを断る、という選択が俺の中に存在しているはずもない。  
しかたない……とは言わないでおくか。

「明日のおかずはハンバーグな」

「うん。ちゃんと目玉焼きものせる」

食に関するては俺の好みを完全に把握しつつある宮永。

こうして俺は大星の赤点を回避させるための勉強会に参加することになった。

# 14話 s i d e 弘世董

急遽淡のために開かれた勉強会。その開催場所となつたのは図書館やファミレスではなく、照の自宅だつた。照は母親との二人暮らしで日中は照一人だけになる。周囲からの目を気にする必要もなく、静かで集中するには確かにちょうどいい環境と言えた。

まあそれはいいのだが。

「うえ……作者の気持ちなんてわからないよ」

机に突つ伏して今にも頭から湯気を吹き出しそうな淡を見てため息を吐く。淡の学力は想定を上回る……いや、この場合は下回ると言つた方が正しいのか。それくらいにはひどいものだつた。

今日からテスト勉強期間ということで部活が休みになつたとはいゝ、残り十日ほどしかない猶予で淡に赤点を全て回避させるのは難しいと言わざるを得ない。科目を絞つて、始めからいくつか捨てるということも視野に入れるべきだろうか？

「この手の問題は大抵設問部分より前に答えが書いてある。ここをもう一度読み返して

みて

先ほどから照が優しく諭すように教えているが進捗状況はよろしくない。別に淡い飲み込みが遅いわけではないが、やらなければいけないことが多すぎてどうしても詰め込み過多になってしまっている。

ここ数日は私と照がつきつきりで文系と暗記系の科目を教えているが、このペースでは如何ともし難い。

というか、だ。

「なあ照。見汐はどうしたんだ？」

この勉強会が開始されてから今日で五日目。見汐は初日に顔を出したのみでここ三日は姿を見せていない。今日も含めれば四日間不参加である。

学校には登校しているが何やら忙しそうに走り回っているのは目にしている。

「見汐君はやることがあるって。今日か明日には行けると思うからそれまでは私達で何かしてほしいと言われた」

やることつてなんだ？いやまあ普通に考えれば自分のテスト勉強だが。

アイツだつて受験生だし自分の勉強を優先させるのは仕方のないこととも言える。本来なら麻雀部とは関係ないのにこちらが巻き込んでしまったのだ。それでも今日明日から手伝ってくれるのだから文句など言えはしない。

そんなことを考えているとピンポーン、という音が室内に響いた。噂をすれば、とい  
うやつか。

「見汐か？」

「たぶん」

照が玄関まで迎えに行く。来客者はやはり見汐だつた。

「おー、やつてるな」

リビングに入つてくるや否やぐつたりしている淡を見て笑うが、こちらからすれば笑  
い事ではない。

「どうよ？ 大星の具合は」

「圧倒的に時間が足りん。いくつか科目を捨てる必要があるかもしねり」

「捨てるとしたら物理と古典、日本史、情報だな。まあそれはマジで最悪の場合だけど  
「どうしてその四科目なの？」

「予選の日程と被つてない補習日に再テストやる科目だからだよ。極論を言うとその四  
つは0点でもいいから無勉むべんもやむなし」

そう言いながら見汐が一枚の紙切れをテーブルの上に置く。それは補習の日程表  
だつた。

しかしこんなものは普通教師間でしか出回らないものじやないのか？

「どこでこんなものを……」

「職員室に忍び込んでちよちよいと」

「何!？」

「冗談だよ。まあどつかの部活の監督に恩を売つておいたおかげだな」

か、監督……。

というかこれもアウトかセーフかで言えばアウトだと思うのだが。

「ねえねえ！もしかして日本史やらなくてもいいの!?」

「喜んでんじやねーよ。最悪の場合はつて言つてんだろ」

見汐が丸めた紙の束で淡の頭をぽこんと叩いた。

最悪、ということは基本的に全科目の赤点回避を念頭にしていく、ということだろう。だがどう考えても時間が足りない。

「……言いたくはないけど全科目の勉強をしていたら間に合わないと思う」「だろうな。初日の惨状で俺もそう思つた」

どうやら教師役である私達三人とも同じ見解だつたらしい。

「だから教える部分を絞り込む。とりあえず大星はこれを解け」

見汐が淡に手渡したのは先ほどの紙束。覗き込めばそれは問題集のコピーのようだつた。

「これは？」

「今回大星が受けるテストを作る先生が去年以前に同じ時期のテストに出した問題」

「「え？」」

私と照、そして淡の声まで重なつた。

言われた意味を理解するのに少々の時間がかかる。そしてそれをなんとか飲み込めば今度は疑問が湧いてきた。

「だからどこからこんなものを手に入れてきたんだ……」

「先輩とか、先輩の先輩とか、そのまたさらに先輩とか。皆高校時代のテストとか結構持つてるもんで助かつたわ。あとは新任の先生もいたからそつちは中学の同級生とか友達の伝手を辿つて集められるだけ集めた。まずは重複してる問題とか似たような問題から重点的にやつてくる」

あつけらかんとそう言う見汐だが、これだけのものをかき集めるのは相当な時間と労力が必要だつたはずだ。

大体なんでそんなに人脈が広いんだコイツは？確かに誰とでもすぐに打ち解ける性格なのは知つているが、それになつて他の高校の過去のテストを入手するなんて容易じやないだろう。

「やることがあるつて言つてたのはこれのこと？」

「まあな。思つたより早く終わつて助かつたわ」

いやー、疲れた、などと言いながら屈託なく笑う見汐。それは疲れもするだろう。収集から比較、そして重要度の高い問題をピックアップするという作業をたつたの数日でこなしたのだから。

そしてそんな見汐を見つめる照の顔が、何というか……。

(完全に恋する乙女のそれじやないか?)

まあ自分のお願いに対してもここまでやつてくれたのだから感じるところも当然あるだろう。しかしどうしてこれで恋心を自覚できないのか甚だ疑問だ。

私としては照が見汐に惚れているのはもはや確定事項だと思つてゐるのだがな。

「……見汐君、ありがとう」

「いいつての。宮永には世話になつてからな」

見汐がクシャクシャと、照の頭を少し無造作に撫で回す。物凄く自然な動作だつた。まさか人目がない時はいつもこんな感じでコミュニケーションを取つてゐるのか?

そう思つたが、頭を撫でられて俯いた照の顔には赤みが差していた。別に慣れているというわけではなさそうだ。

問題なのはそんな照の様子に気付いていない見汐だが。

「この朴念仁め」

「いきなり俺を罵倒するのは何なの？お前の癖なの？」

「ああ、このままでは癖になりかねない」

「なんでだよ……」

見汐が悪いからに決まっているだろう。お前の真横で顔を真っ赤に染めている照が目に入らないのか？もしそうなら眼科にでも行つてこい。

まあ照も照でいい加減自分の気持ちに気付けとは思うが。これだけイチャイチャしておいて付き合つていらないどころか好きかどうかも分からぬといふのはおかしいだろう。

そして淡、こんな空氣の中で居眠りするんじやない。見汐と照が桃色空間を形成したが、元はお前の赤点を回避させるために集まっているんだからな？

（ああもう、本当に頭が痛い……）

ド天然同士のバカツブルと自由すぎるアホの子に板挟みにされて、私は今日何度もなるか分からぬいため息を吐き出すのだった。

# 15話 s i d e 見汐太陽

物言いたげな視線が弘世から飛んでくるが、それをつつくと藪蛇になりそうだという危険を察知して華麗にスルー。宮永が出してくれたお茶のグラスに浮かんでいた氷を一つつまんで、眠っている大星の背中にそれを放り込む。

「つめた、冷たい！ナニコレ！」

「氷」

グラスに注がれたお茶をすすぐながら答えを教える。  
しかし大星はそんなもの聞いてなかつた。制服の裾をつまんでバタバタと仰ぐようにして、背中の氷を外に掃き出すことに必死である。

コロン、と氷が大星のスカートの中から転がり落ちてきた。息も絶え絶えになつた大星だが、満場一致で居眠りしたコイツが悪い。

「よお大星、目は覚めたか？」

「もつと優しく起こしてくれても良くない……？」

「今のお前に与える優しさなんてねえよ」

むしろこうして面倒を見てやつてること自体が俺からの優しさである。つまりこの  
厳しさこそ俺の優しさと言つていいだろう。

さあ、俺の優しさとか愛とか慈悲とか、そんな感じのものを受け取るがいい。  
それからの数日間は苛烈を極めた。主に大星が。

なにせ俺がここまで準備を整えて、宮永や弘世にも世話を焼かれてんだからこれで赤  
点回避できなきや嘘である。自分で言うのもあれだけど、三年生三人組は一応成績優秀  
者だ。テストの順位で言えば全員学年で30位以内には入る。弘世とかたまに一桁の  
順位を取ることもあるくらいだ。

というわけで教える側としてもそれなりにプライドがあるんだよ。テメーこれで赤  
点取つたらマジで許さねえからな、つてなもんである。

こうして期末テスト直前まで宮永<sup>アメ</sup>と俺<sup>ムチ</sup>で調教され、終始涙目になりながら大星のテス  
ト勉強はそれなりの成果を出しながら進んでいった。

ちなみに弘世は大星に教えるのと同時進行で自分のテスト勉強してた俺と宮永の方  
も見てくれた。ありがとう、董姐さん。

そう感謝したら「先に私の名前を呼ぶとは何事だ」つつって蹴られたけど。ふくらは  
ぎにローキック叩き込むのはやめてほしい。

あとあーだこーだ言いながら大星に勉強を教える俺と宮永を見ながら「子どもの教育方針で意見がぶつかる夫婦みたいだな」とかぼそつと言うのもやめてくれ。心臓に悪いから。

そんなこんなありながら、ついにテスト前日。今日も宮永家のリビングを間借りして行っていた大星強化週間もようやく終わりの時を迎えた。

主役を務めてきた大星が歓喜の声を上げる。

「終わった―――！もうむりい……」

と思つたら萎んだようにテーブルへ沈んだ。

まあ相当詰め込んだからな。分かったのは大星つてバカだけど勉強できないわけじやないってことか。勉強してこなかつたからバカなんだけど、しつかり教えてやればそれなり以上に学習するのは早かつた。

これに懲りたら日頃の授業くらいは真面目に受けろ、と言いたい。ここんところ弱音と泣き言を吐きながら頑張つてたから今日は見逃すけど。

「お疲れさん」

労いの言葉をかける俺。

「がんばったね」

そう言つて大星の頭を撫でる宮永。

「よくやりきつたな、淡」

そして中々聞けない弘世の柔らかい声。弘世も大星の努力に感心していたのを俺は知っている。

この間も学校の昼休みに三人で弁当を囲みながらその日の放課後、大星の教育プランを立てていた時、遠い目をしながら「アイツがここまで勉強を頑張るとはな……」なんてしみじみ呟いてたからな。

もう目とか声が完全に親のそれだつたね。弘世いくつなんだよ。精神が完全におかんレベル。

「うわーん！みんなありがとー！」

優しくされたのが嬉しかったのか、今度は感極まつた様子で大星が抱きついてきた。俺達三人まとめてなぎ倒す勢いで。

つていうかお前、幼児退行してない？あ、大星つていつもこんなもんか。しかし今さらだけどちよくちよく敬語抜けるよなコイツ。

ちなみに三年生トリオはあえなく後輩一人に押し倒された。左から順に弘世、宮永、俺の順である。大星は宮永に覆いかぶさりながら両手で俺と弘世を巻き込んだ。

いやまあ俺は抵抗できたけど、ここはノリで倒されておくべきかなって。なんか空気読めないみたいになるし。床はフローリングだから地味に痛えけども。

大星は宮永の胸に顔をうずめて「ふえーん」なんて泣いてんだかなんだかよく分からん声を漏らしている。それを見る俺達の心境は、一言で表すと「やれやれ」という感じだつた。思わず苦笑を浮かべるくらいにな。

おバカだが、憎めない後輩である。愛されキャラつてやつか。なんて考えていたら、やつとこさ顔を上げた大星が何かに気付いたように「あつ」という声を漏らした。

「どうした？」

一応聞いておく。大星から帰ってきた答えは  
「董先輩、今日はサックスなんだ。可愛いね！」

というものだつた。

サックス？ 楽器の？ なんでサックスが可愛いんだ？

そもそも弘世がサックスってどういうことだよ。意味が分からん。

疑問符しか浮かばない俺に対し、なぜかその場の空気は凍つっていた。さつきまでの日常系四コマ漫画みたいなほんわかした空気どこ行つたんだよ。

つーか弘世めっちや怒つてない？ 無言で起き上がりつた弘世の雰囲気が日常系四コマ漫画の住人からバトル系少年漫画のキャラに変貌してゐんだけど。ゴゴゴゴゴ、みたいな効果文字が背後に見える。

「淡、覚悟は良いな？」

「え？」

「普段なら見逃してやつた。今この場に見汐がいなければな」

「……あ」

「え、俺？」

急にこっちへ飛び火してきたんだけど。リアクションの正解が分からぬ。

「ほ、ほら！ 太陽先輩なんか分かってないよ！ だから大丈夫……」

「それとこれとは話が別だ」

「た、助けてー！」

「……ドナドナドーナードーナー」

首根っこを掴まれて引きずられていく大星を見送りながら例の歌を口ずさむ。

どうやら大星は弘世に折檻されるらしい。その衝撃で教え込んだ知識が吹き飛ばないことを祈るばかりである。

二人が廊下に出ていき、リビングに残されたのは俺と宮永だけになつた。

「あれは一体なんなんだ？」

「気にしない方がいい」

「そーか」

まあ宮永がそういうなら気にしない方向でいこう。そしてこの会話を行つてゐる俺

と宮永は未だに寝転がつたままである。

「見汐君」

「ん？」

だから、名前を呼ばれて顔をそつちに向けると、宮永とばつちり目が合った。

そして思いの外、お互の顔の距離が近いことに気が付く。具体的に言うと宮永のまつ毛の長さがよく分かるくらい近い。触れ合ってはいないうが、相手の息遣いや体温が肌で感じられるような距離である。

さすがにはずい。が、宮永にしつかりと見つめられて視線を逸らすこともはばかられる。何だこの状況。

「ありがとう」

「……ああ、大星のことか」

一瞬、なんのお礼なのか理解できなかつた。恐らく大星に勉強を教える手伝いをしてくれてありがとうって意味だろう。

「気にすんなよ。宮永にはいつも世話になつてるからな。せめてもの恩返し的なあれだ」

「うん。それでも、ありがとう」

ふいに、右手が温かくなる。感触からすると宮永の左手が触れているっぽい。握ると

までは行かない、遠慮がちな感じだけど。

それを理解して俺の心拍数が一気に上がった。

「……」

どうしたらいいのか分からず、言葉に詰まつたまま無言の時間が続く。仕掛けてきたはずの宮永も俺と同じような状態に陥っていた。距離が近いから顔が赤く染まつているのが丸分かりである。

お前自分からやつておいてそれはなくね？え、それともこういう時は男が動かんきやダメなわけ？甲斐性的なあれで。

つか、ここで甲斐性を見せるつて、つまりそういうこと？

物は試しに俺の方から宮永の手を握つてみる。ちょっとビクツとしたあと、宮永の方からきゅつと握り返してきた。俺の熱か宮永の熱か、とにかく繋がれた手のひらが熱い。

これ、ラブ○rライク？どっち？

自慢じやないけど俺は年齢＝彼女なしだ。恋愛に疎すぎて宮永の反応を判断できな  
い。

ただ、繋いだこの手を、離したくな——

「まったく、これに懲りたらもう二度と……」

「ごめんね、すみ……」

ガチャリと扉が開いて弘世と大星が戻つて來た。そして時間が止まつたように硬直した。

状況を整理しよう。俺と宮永は手を繋いだままかなりの至近距離で互いの顔を見つめ合つてゐる。果たしてそれを目撃した一人にはどう見える？ 考えたくないし、むしろ考える必要もなかつた。

このあと、四人の間で一悶着があつたのは言うまでもない。

# 16話 side 見汐太陽

期末テストも終わり、未だ梅雨明け宣言とはいかずとも気温が右肩上がりで高くなり始めた七月の初旬。

文化祭実行委員としての活動がいよいよ本格的になってきた俺は、そんな役職とは全く関係のない、もはや通い慣れてしまった麻雀部の監督室に来ていた。なぜなら今日もまた鹿島先生に呼び出しを食らつたからである。

おかしい、最近はマジでなんかやつた覚えはないんだが。そんな疑問を抱えて俺は対面のソファーに座る鹿島先生へと尋ねた。

「それで今日はどんな用件ですか？」

「見汐、期末テストの成績が出たのは知っているな？」

「そりやまあ通知もらいましたし」

俺の順位は過去最高の十九位だった。大星に勉強を教えつつ宮永や弘世と一緒に勉  
知つていて。

期末テストの科目の合計点と順位が記載された通知表なら昨日配布されたので当然

強したおかげだろう。ちなみに宮永から「席だけじゃなく順位も隣」というセリフと共に見せられた順位は十八位。六点差の惜敗だった。

弘世? 学年七位だってよ。アイツのスペックやばすぎない?

「では大星の結果は?」

「赤点一つでしょ?」

そう、ギリギリまで詰め込んだが結局大星は赤点の完全回避には至らなかつた。まあそれでも前回の試験よりは格段に良くなつてゐるし、赤点も捨て教科の古典である。

補習日は東京都大会の日程とは被らないので大人しく受けければそれで済む。

「そう、一つだ。中間で四つも赤点を取つたあの大星が」

改めて聞くと赤点四つはないわー。しかも中間で。

これを機に大星は意識を改革するべきだと思うね。俺らが卒業したらアイツの勉強見てやる奴いなくなるし。

それに宮永や弘世が抜けた白糸台の麻雀部を次に背負うのは、下級生ながら大将に座る大星になるだろう。その主柱が赤点で大会に参加できませんとか笑えない。まあ俺は笑うけど。

「大星本人や宮永達からも聞いている。アイツの面倒を見ててくれてありがとう」

そう言つて鹿島先生が俺に向けて頭を下げた。

なんかお礼の言い方まで男前。弘世も将来はこんな感じになりそうだよな。

「自分の勉強のついでみたいなもんですよ」

「謙遜するな。ついでで過去のテスト問題を集めたりはしないだろう?」

「そこまで聞いてるんかい。口を滑らせたのはたぶん大星だな。」

「あー……そこは見逃してもらえると助かるんですが」

「ふ、確かに教師の立場としては言いたいこともあるが咎める気はないさ。まああまり派手にやられると困るがな」

マジで? てつきりあの所業に対するペナルティで呼ばれたのかと。

ビビり損である。とりあえず今後があれば注意しよう。

「なあ見汐」

「なんすか?」

「すぐく今さらな話なんだが、お前はどうして私の頼みを聞き入れたんだ?」「本当に今さらですね」

「前々から気になつてはいたんだが今回でようそ思つてな。見汐は元々成績優秀だし、わざわざ私からの力添えを必要としていないだろ?」

麻雀部の雑用をする代わりに成績に色を付けてほしい。

そんな交渉をした二年生当時、鹿島先生は俺のクラス担任でもなければ二年の世界史

を担当しているのは別の教師だった。おまけに世界史はどちらかというと俺の得意科目である。

俺が近くにいる時に限つて受け持つていらないはずの二年生の世界史のテスト範囲を独り言でぼろつと口にしてしまうことはあつたが、俺が今まで麻雀部の雑用をやつてきたのは実質ボランティアみたいなもんだ。今年めでたく担任になつてからは色々融通を利かせてくれているが、去年の段階ではそんな見通しがあつたわけもなく、鹿島先生が疑問に感じるのは当然と言えば当然だろう。

「まあぶつちやけあの約束はおまけみたいなもんですよ」

「ならどうしてだ？」

「言つちやなんですけど面白そだつたんで。あとはその場のノリです」

「……は？」

鹿島先生が意外そうに目を丸くするが、実際のところはそんなもんである。

だつてある日、いきなり面識のない先生に呼び出されて「部活の雑用をやつてくれ。褒美は出す」的なことを言われたのだ。漫画でしか見たことのないような展開に、何それ面白そう、とか思つた俺を誰が責められよう。

しかも教師とギブ＆テイクな関係とかちよつと悪いことしてると非日常的なワクワク感あるし。要は単なる安請け合いでしかないんだけど。

「本当にそれだけでここまでやってきたのか……」

「ええ、まあ」

「お前も大概変わった人間だな。宮永と馬が合うわけだ」「教師が生徒を変な奴扱いするのも相当ですけどね」

それ以外にも鹿島先生つて教師としてどうよ? って部分多いし。

結論。俺も宮永も先生も全員変な奴。

そんな残酷な真実を鹿島先生に突きつけてから俺は監督室を後にした。

只今の時刻は午後の三時過ぎ、放課後である。

普段ならこのまま帰るところだが、本日は文化祭実行委員としての仕事がある。

白糸祭ではクラスだけでなく各部活からの出し物も認められている。それを希望している部活には事前に希望届けを提出してもらっているが、正直なところそれだけだと情報不足なので直接部活の方に出向いて具体的な要望なんかを聞いて回るのだ。その上で他のところとの兼ね合せやら擦り合わせを経て、出し物の可否を決めることになる。

実行委員の仕事の中でも結構しんどい作業だともっぱらの評判だ。そして俺はこの仕事、二年連続二回目だつたりする。校内での顔が広いというのが抜擢理由らしい。押し付けられる感はあるが、まあ俺は特に苦でもないからいいんだけどさ。

で、いざ聞いて回るとたこ焼きとお好み焼きと焼きそばをやりたいところが多すぎた。そんなに焼きたいのかお前ら。

クラスの方の希望届けと合わせるとその三種類だけで十件超えるな。そもそも去年と比較しても食べ物屋ばかりで催しのバリエーションに乏しい。この辺は委員会で要話し合いだらう。

そうこうしている内に、気が付けばもう五時半を回っていた。  
今日のところはここで切り上げるか。そう思い昇降口まで来ると宮永と弘世に出くわした。

「よう。部活終わりか?」

「うん。見汐君は委員会のお仕事?」

「まあな」

「確か文化祭の実行委員だつたな。淡はどうしてる?」

「心配すんなよ。ちゃんと馴染んでるわ」

主に中塚という姉御肌な女のおかげだが。以前大星にアクセサリーの類いが趣味だと聞いたので、委員会の女子に似たような趣味の子がいれば大星との仲を取り持つてみてくれ、と頼み込んでおいた成果である。

何より良くも悪くもバカがつくほど正直な大星のことを中塚自身も気に入っている

ようだし、大星は大星で中塚へ懷きつつあるのでまあ大丈夫だろう。

アイツが周囲に馴染めないのは自信過剰が原因になつて無意識に傲慢な態度を取つてゐるからだと俺は思つてゐる。あるいはそれは壁と言つていいのかもしれない。

だが結局のところそれらは無意識であつて、大星自身がそういう態度を意図して取つてゐるわけじやない。調子に乗つた子どもみたいなもんである。向かい合つてよくよく觀察してみればアイツが築いている壁なんざ陸上ハードルくらいの高さしかなく、それをぴょんと飛び越えてみれば子どもらしく懷くのも早い。

面倒がつて遠ざけたりせず、こつちからも本音をぶつけてやれば打ち解けるのは簡単な部類の人間である。俺としては宮永の壁を切り崩すよりもよっぽど楽だつた。

「見汐君のおかげ?」

「なんですよ。アイツが成長したんだろ」

「確かに最近の淡は一段と強くなつてきたな」

「麻雀じやなくて人間性の話だつての」

なんて会話を皮切りに三人で並んで帰る。

主に話題の中心は大星だつた。これが手のかかる子ほどなんとやらつてやつか。

そのまま最寄り駅近くで電車通学の弘世とは別れ、そこからは宮永と二人になる。そして人気が少なくなると、俺の右手と宮永の左手が触れた。どちらからともなく手を繫

ぐ。

あの日以来、一人きりになるとなんとなくそうするようになった。じゃあそれで関係性に何か変化があつたかと言えばそういうわけでもなく、手は繋いでいてもこれまで通りの、どうでもいいような会話のやりとりが続いている。

こうして一緒に下校している時やリビングでテレビを見ている時、弁当を食べ終わつた後に昼休みが終わるまで屋上でぼんやりとしている時。なんとなく、何気なく、お互いがお互いの手を求めるようになつた。

初めて宮永の手を握った時こそドキドキしたりはしたが、今はむしろ気分が落ち着くくらいだ。

「見汐君」

「なんだ?」

「……私、このままでいいのかな?」

不意に宮永がそんな言葉を漏らした。相変わらず要領を得ない一言目だ。

ただ宮永の性格からして弱音や相談を本人に対しては口にしないだろう。そしてさつきまでいた弘世がいなくなつてから切り出したこと、さらには相談できる程度に俺とも関係のあるものと考えれば答えは絞られる。

「麻雀部のことか?」

宮永がこくりと頷く。

「前にも話したけど、私は麻雀で妹に勝ちたい。そのために家を離れて東京で麻雀に打ち込んできた」

「ああ。そして今度の全国大会が高校でその妹と戦える唯一のチャンスだな」

確かに進路希望の調査票になんて書いたらいいか迷っていた時に聞いた話だ。あの時は絶対に妹に勝つんだと珍しく息巻いていたが、今の宮永はその真逆。まるで落ちしているように見える。

前も今も、無表情だけだ。

「うん。だけどそれは私の事情」

「どううと?」

「私は妹に、咲に勝つことしか考えてなかつた。部のことを考えてこなかつた」

なるほど。宮永が何を言いたいのかおおよそは把握できた。

しかし口を挟まず、今は宮永にその胸の内に抱えている悩みを吐き出させよう。

「董は自分の代で連霸が途切れないようにいつも麻雀部全体のことを考えて部活と向き合つてる」

弘世は責任感の塊だからな。真剣に麻雀へ取り組んでいる姿は容易に想像できる。「堯深や誠子もそう。淡もただ勝つことだけしか考えてない。私だけが余計なことを考

えて、それを優先してしまつてゐる」

宮永の獨白という、ある意味で今世紀最大の衝撃映像。その内容は他の麻雀部員に対する負い目にも似たものだつた。

普段は天然のくせに変なところで眞面目な奴め。

「そう思い始めたのは最近か？」

「うん。三年生になつてから」

「俺はいいことだと思うぞ」

「……どういうこと？」

首を傾げる宮永に、俺は素直に思つたことを伝える。

「宮永が麻雀をやる理由は妹に勝ちたいから。もしかしたらそれしかなかつたのかもしれん。けど今はもうそれだけじゃない。大切だつた“妹に勝つ”つて目標に負けないくらい、“白糸台高校麻雀部の一員として勝ちたい”つて気持ちが強くなつたんだよ」

宮永は考え過ぎだ。普通の奴なら上手く自分の中で消化できるようなことを、愚直にも真正面からしか捉えられない。

それでいて優しいから、何かを切り捨てるこどもできずに立ち往生してしまう。仕方がないから俺がその背中を押してやる。

「宮永はもう妹に勝つってだけじゃ満足できないんだよ。弘世や大星、渋谷、亦野に鹿島

先生。それからレギュラーに選ばれなかつた他の麻雀部の連中。そいつら全員を連れ、お前は全国に行きたいんだろ？そいつらと一緒に全国の頂点に立ちたいんだろ？そう思えるくらい、白糸台の麻雀部を好きになれたつてことじやねえの」

宮永の目が少しだけ開かれ、茜色の瞳がわずかに揺れた。

妹に勝つという個人の目標。

麻雀部として優勝したいという全体の目標。

そんなの、両立させるのは難しくもないことだ。だつづーのにほんと、不器用というかなんというか。

まあそれも宮永らしいんだけどな。

「そうかもしれない……ううん、きつとそうだと思う」

「ならいっそのこと、お前が麻雀部を引っ張つて行くつもりで大会に臨んだらどうだ？」

「私が？」

宮永は強い。だけどそれだけじゃ団体戦を勝ち抜いていくのは大変だろう。強すぎる宮永を潰すために三対一という不利な戦いを強いられることも考えられる。

そしてもし劣勢に陥つた時、自分の中にあるのが妹に勝つという想いだけじやなく、麻雀部全員の悲願もあつたとしたら、それが土壇場で力になつてくれるんじやないかと俺は思う。

「ああ。自分のためだけじゃなく、皆のために。好きな奴のために打つてみたら宮永はもつと強くなれんじやねえかな」

だつてコイツは、思わず心配になるくらい優しいから。だからこそ、きっと皆の想いというやつに応えようとするだろう。

「宮永にはさ、自分の力だけで戦う強さよりも、仲間と一緒になつて戦う強さの方が似合うと思うぜ」

「見汐君……」

じつと見つめられて我に返る。

なんか柄にもなく熱弁を振るつてしまつた。思い返すと結構恥ずかしいことも言つてた気がする。

反応からして宮永もお悩み解決の糸口くらいは掴めたみたいだし、この話題は止めだ

止め！

「そうだ、今日はどうする?」

「寄つて行つてもいいの?」

「おう。沙奈と白夏も喜ぶしな」

あからさまだつたが話を逸らすことに成功し、俺は宮永と手を繋いだまま自宅へと向かう。

さつきより少しだけ強く宮永に手を握られていること、そして肩と肩が触れ合い、寄り添うほどに俺達の距離が縮まっていたのは、ここだけの秘密にしておこう。

# 17話　s.i.d e 見汐太陽

夏の訪れとともに全国高校麻雀選手権大会の予選が全国各地で続々と開幕した。

例年ならふーん、くらいにしか興味を引かれないニュースではあるが、今年は宮永の悲願がかかつていて、それなりに注目している。

そしてその宮永を擁する白糸台高校麻雀部は対戦校を鎧袖がいしゆう一触いつしょくしながら危なげなく勝ち進んでいた。先鋒の宮永だけで十万点以上の差がつくとかどうなつてんだ。麻雀つてそんな競技だつたつけ？

とまあそんな感じで準決勝まで駒を進めている白糸台はさて置き。俺の関心は今、宮永の妹の方に傾いている。

ネットで『長野県』『高校麻雀』『宮永咲』で検索をかけるといくつかの記事と掲示板への書き込みがヒットした。

それらの情報を複合すると『清澄高校という無名校が快進撃を続けていて、その大将に座っているのが一年生の宮永咲である』とのことらしい。

妹の方も順調に勝ち上がつているようでなによりだが、大会に関して色々と調べてい

く内に俺は見過ごせない事実を発見した。

それは『夏の選手権大会に出場登録した選手は先鋒から大将まで順番を固定して戦わなければならない』という大会規定である。たとえば病気等により出場できない選手がいた場合に他の選手を代替出場させることは認められているが、そこにすでに登録済みの選手を割り振ることはできず、あくまで出場登録のされていない控え選手から選ばなければならぬのだとか。

で、宮永は先鋒。宮永妹は大将である。直接対決できねーじやん。

一応個人戦もあるにはあるみたいだが、各都道府県から代表選手を三人選出、しかも北海道・神奈川・大阪は南北、東京と愛知は東西に分かれている。最終的には五二代表×三人の計一五六名でトーナメントを行う。

どつちも確実に決勝まで勝てるなら話は別だが、そうじやないなら宮永姉妹がぶつかる可能性は団体戦より低くなるだろう。  
「……どうすんだ? これ」

のどかな日本の原風景が車窓の外を流れていく。

手元のスマホに視線を移せば時刻はそろそろ十四時を指すかという頃合い。白糸台駅を出発して新宿で特急に乗り換え、さらにその他地方路線を乗り継ぐことおよそ四時間半。ようやく目的地が見えてきた。

閑散とした車両内に『次は七久保駅、七久保駅です』というアナウンスが流れる。

空調は効いておらず、窓を開けている程度では気休めにしかならないほど暑さと湿度。そのおかげで流れ放題な汗で濡れたワイシャツを座席から引き？がし、俺は人生初来訪となる長野県に降り立つた。

しかもこれまた人生初利用の無人駅だ。降りたのは俺だけだし駅前なのに人はいなしで、東京との落差にまるで違う世界に来たような錯覚に陥る。

この奇妙な感覚を楽しんでみたいところだが、そんなことしてる時間もないでのざつさと用事を済ませてしまおう。

事前にプリントアウトしておいた地図を広げて俺はふらふらと歩き出す。

容赦のない真夏日の陽射しを全身で浴びながら、あつちかなー？と地図とにらめっこすることしばらく。その間地元の人に道を聞いたり雑談に花を咲かせたりお茶やお菓子や特産品を頂いたりして、ついに目指していた場所に到着する。

「ここが清澄高校、ね」

門柱に長野県立清澄高等学校と書いてあるので間違はあるまい。見た感じ、校舎に年

季は入っているが普通の公立校っぽい。グラウンドではサッカー部や野球部が声を張り上げているし、校舎の方からは吹奏楽の演奏らしきものも風に乗って聞こえてくる。部活の時間で色々な格好の生徒が入り乱れてるならそこまで目立つまいと考えてそのまま敷地内に侵入。

「ねえそこのあなた、ちょっとといいかしら？」

しかし速攻で呼び止められた。まあ制服違うからな。

ここで逃走しても無意味どころか騒ぎを大きくするだけなので足を止め、声がした方へと振り向く。

そこにいたのは女子高生らしからぬロングスカートをはいた女子生徒。教師じやなくてよかつた。

「なんですか？」

「見たところ違う学校の生徒のようだけど」

「ええまあ。ちょっと友達に逢いに来て」

もちろん嘘だが。この高校には知り合いすら一人もいない。

「そう。それにしてはずいぶんと遠くから来たようね」

「その心は？」

「なぞかけをする気はないわよ。ただこの辺りの学校の制服じゃないみたいだから」

「まあ当たつてるよ。東京から来たし」

「東京!？」

「んで、君こここの生徒だろ？案内してくれない？」

「図太いのね、あなた……」

女子生徒が大きなため息を吐く。まあ自分でも無理を言つてるのは分かるが、職員室まで出向いて用件を説明して許可を得るのもめんどくさい。

こここの生徒なら麻雀部の部室の場所くらいは知つてるだろ。

「まあいいわ。部外者にうろつかれるくらいなら案内してあげた方が問題は起きないだろうし」

「感謝する。俺は見汐太陽だ」

「私は竹井久。清澄高校の学生議会長よ」

「学生議会長？」

「生徒会長のことよ。清澄ではそう呼ぶの」

「へー。つまり竹井は清澄の支配者なんだな」

「あなた、生徒会長にどんなイメージ持つてるの……？」  
「なんだろ、弘世とかそれっぽいイメージあるな。まあアイツは生徒会長じゃないけど。

「つて、話が逸れたけど見汐君の友達の名前は？どこにいるか当てはあるの？」

「ああ、名前は宮永咲。今ならたぶん麻雀部にいるはず」

「宮永さんの友達？」

竹井の視線がより一層訝しげなものに変わった。この反応から察するに竹井も宮永の妹と面識あるみたいだな。もしかして竹井も麻雀部だつたりするんだろうか。だとしたら都合がいい。ナイス俺の引き。

「なんかおかしいか？」

「まあそうね。宮永さんが見汐君みたいな、言葉は悪いけどチャラチャラしてると友達とは思えなくて」

「……やっぱ俺、そんな風に見える？後輩にもヤンキーみたいって言われたことあんだけど」

そりやまあ真面目な優等生つて外見じゃないけどさ。

でもそれくらい別に普通だろ？俺をヤンキー呼びわりした大星だつて金髪だしよ。

「髪を染めてるのはまあいいとして、髪型とかピアスのせいじゃないかしら」

「そういう竹井も見た目は一昔前のスケバンみたいだけどな」

「それ、スカートだけ見て言つてるでしょ？」

「あ、ちよつとこのヨーヨー持つてポーズ取つてみ」

「嫌よ！というかなんでヨーヨーを持つてるの!?」

「竹刀の方が良かつたか？」

「そういう問題じやないわよ！」

竹井がぎやーすかと騒ぐもんだから周囲からの視線が痛い。

それを指摘してやると竹井は悪目立ちしていることに気付いて顔を赤くする。そして俺を怪しむ感情よりも羞恥心が勝つたのか、「行くわよ！」と半ば怒りつつすごい勢いでその場から遠ざかる。

そう、校舎から遠ざかっていく。その足は小高い山の方へ向かっていた。  
なにこれ、このまま山に埋められる感じ？なんて考えていると、木々の合間から校舎よりもさらに古めかしい、木造の洋館らしきものが顔を覗かせた。

「なあ竹井、あの建物はなんだ？」

「清澄高校の旧校舎よ。あそこの最上階に麻雀部の部室があるの」

「ほほう。とりあえず見晴らしはよさそうだな」

「テラスはあるけど、広がつてるのは山や田んぼくらいよ？」

「東京の都心じやまず見れない風景だぜ、それ」

コンクリートジャングルで生まれ育った俺の目にはそんなありふれた田舎の景色も新鮮に映るもんだ。すでに空の広さと澄んだ空気には感動済みである。町中を流れる

小川の清流もきれいだし、清澄という名に恥じない自然豊かな町だ。

そんな所感を述べると、今度は竹井が目を丸くしていた。そして苦笑を浮かべる。

「人は見かけによらないのね」

「そのネタまだ引っ張る?」

「……そうね、その話はこの辺で手打ちにしましよう」

さつきからかわれたのが効いているのか、竹井はそう言つて話を終わらせた。

そのまま石段を登つて旧校舎の中へ入る。外靴のままで構わないらしい。ロードナーでギシギシと踏み鳴らしながら階段を昇つていく。

窓にはめ込まれたステンドグラスや屋内のランプ灯といった内装からはやはり一般的な学び舎という印象を受けない。どちらかというと教会のような雰囲気がある。

そして階段を昇り切った先。脇の壁に『雀部』と書かれた看板が張り付けてある扉が現れた。

それを両手で押し開くと、部屋の中からキラキラとした夏の陽射しが飛び出してくる。竹井は俺の方に振り返り、その光を背中に浴びながら、いたずらな笑みを浮かべて言つた。

「ようこそ、清澄高校雀部へ！」

## 18話 side 竹井久

清澄に変な男子がやつて來た。

その男子、見汐太陽君を見かけたのは放課後。普段授業が行われている校舎を出て、麻雀部の部室がある旧校舎へ向かっていた時だつた。校門の方から清澄高校のものとは異なる制服の男子生徒が歩いてきた。

太陽光を浴びて輝く、色素の薄いアッシュブラウンの髪。それをワックスで無造作に整えたショート気味のヘアースタイルはよく似合つていて、普段からしている手慣れた格好なのだろうと分かる。

さらにすつきりとした耳元には清澄高校でなら校則違反となるピアスをしているのも見て取れた。

長野県中の高校を探しても見つかりそうもない、絵に描いたような都会の男子。少なくともこの辺りの人間ではないだろうと、その雰囲気から察せられた。

失礼を承知で言わせてもらうと、とても怪しい。だから学生議会長という立場の人間として声をかけずにはいられなかつた。

そして話を聞けばわざわざ東京から長野くんだりまで足を運んだのは友達に逢いに来たからだという。それだけならそういうこともあるかと思つたけれど、その相手が私の部の後輩、宮永さんとなれば話が変わる。

宮永さんは気弱で大人しく、若干人見知りをするような性格の子だ。男子と接するのもあまり得意ではなく、中学時代からの友達だという須賀君以外の男子と話しているところは見たことがない。

そんな彼女が、こんな見るからにチャラチャラした男子と関わり合いがあるだろうか。当然、不信感を覚えた。

どうしようかと逡巡する。けれど今の状況は私が一方的に見汐君を怪しんでいるだけで、彼と宮永さんは本当に友達なのかもしれない。少なくともここで拒否したり追い返したり、という手段を講じるべきではないだろう。

だから万が一に備え私が目を光らせていればいい、と同行を了承した。そんなわけで彼を麻雀部の部室まで案内したわけだけれど……。

「部長、その人誰だじえ？」

部室に到着すると、部員の一人である片岡優希が尤もな疑問を発した。彼女以外の部員も声には出さないが、見知らぬ男子生徒を前に首を傾げる。その中には友達であるらしい宮永さんも含まれていた。

「こちら東京からやつて來た見汐太陽君。宮永さんのお友達らしいわよ？」

「ええ、私のですか!?」

突然話題を振られて驚きを隠せない宮永さん。なんとか思い出そうとしているのか見汐君の方へ遠慮がちに視線を向けてはそれを下に落とすという動作を繰り返す。そして申し訳なさそうに白旗を宣言した。

「ごめんなさい、思い出せません……」

「ということらしいけど?」

「そりやそうだ。初対面だし」

「へ?」

その間の抜けた声は宮永さんのものだつたけど、恐らくほかの部員も同じような心境だつただろう。

「……あなた、さつき宮永さんの友達だつて自分で言つてたわよね？嘘ついたの？」

「ついてねえよ。俺は今日、宮永と友達になりにきたんだ」

「はい？」

「今から友達になれば『友達に逢いに來た』つて言葉は嘘じやないだろ？」

まるで悪びれる様子もなく、むしろしてやつたりな表情でとんでもない暴論を吐く見汐君。頭が痛い。

「なんかすごい人やの……」

まこも頬を引きつらせながら苦笑している。いや、すごい人というか……。

「何、あなた宮永さんのファンなの？」

もしくはストーカー？ いえ、ストーカーがここまで正面切って乗り込んでくるとは思えないしやつぱりファン？

いやいや、ファンでも友達になりにきたとは言わないような……ダメだ、見汐君の真意がさっぱり読めない。

「このチンチクリンにファン!? 和のじやなくて!？」

「ちよつと京ちゃん！ どういう意味!!」

「お二人とも、ちよつと落ち着いて……」

言い合う宮永さんと須賀君の間に和が入つて場を収めようとする。うちの部ではよく目に見る光景だ。

それを見ていた見汐君は、小さな声で呟いた。

「見た目は似てるけど性格は結構違うんだな」

その目は宮永さんを捉えていて、彼女と、彼女に似ている誰かを重ね合わせているようだった。そして宮永さんに似ている、と言われて真っ先に思い浮かぶのは——  
「まあいいか。はいはい、ストップ！」

見汐君がパンパンと手を打ち鳴らす。

そうすることで全員の注目を自分に集めた。

「一応弁解しておくと俺は宮永のファンつてわけじゃない。そして友達になるのは宮永じゃなくても構わない。この部の部員でなら誰でもいいんだ」

「どういうこと？」

「あー、話すと長くなるんだけど、まずは单刀直入に聞くぞ。君達、宮永照と麻雀打ちたくない？」

一瞬、彼が何を言っているのか分からなかつた。

宮永照。それは全国優勝するためには絶対に避けられない、高校麻雀界のトップに君臨する者の名。そして、宮永さんが目標とし、全国で戦うことを切望している実の姉の名。

これに宮永さんが食いつかないわけがなかつた。

「お姉ちゃんのお知り合いなんですか!?」

「知り合いつてかクラスメイトね。はいこれ証拠」

雀卓の上にポイッと無造作に放り投げられた学生証。その表紙には全国高校麻雀選手権を連覇中である『白糸台高校』の文字と、見汐君の証明写真。

彼は本当に白糸台の生徒らしい。

「……あなたが白糸台の生徒だとして、どうして宮永照と麻雀を打つことに繋がるのかしら？」

「俺は文化祭実行委員ださ。今年の出し物がたこ焼きだのお好み焼きだのに偏つてていいちぱつとしないんだわ」

「なんの話？」

「まあ聞け。そこで俺はこう思った。なら自分達のクラスでちょっと変わった企画をやればいいじゃん、ってな。そして開催するのがこれだ」

そう言つて、今度はカバンから一枚のチラシのようなものを取り出して、また卓上に置く。

いかにも手作り感満載なのは高校の文化祭らしい。そこに記されていたのは『麻雀喫茶』という、清澄高校の麻雀部員にとつては割りと馴染みのある四文字。

そのチラシによると飲み物や軽食を取りながら自由に麻雀を打てるという企画らしく、もし面子が足りなければクラスの生徒が卓に入ってくれるとも書いてある。

「クラスの出し物だから当然宮永も出る」

「つまり白糸台の文化祭に行けば宮永照と麻雀が打てるつてわけね」

「そういうこと」

「どうしてそんなことをさせたいのかは分からぬけど、それは無理よ。清澄も白糸台

もそれぞれ代表校として全国大会への出場が決まっているの。大会の規則で代表校同士が試合をするのは禁止されているわ」

そう、見汐君の真意はどうあれ大会のルールで全国に行く学校同士では試合ができる。王者・白糸台はもちろん、私達清澄もつい先日決勝で風越や龍門渦を破つて全国大会への出場を決めたばかり。見汐君の提案は無意味なものだ。

けれど彼は笑みを深める。

「まあそれはそうなんだけど。でもこれは麻雀部なんて関係ない、ただの学校行事なんだよ。宮永はクラスの一員として参加するだけだし、君達は単に招待されてたまたまうちの文化祭に来るだけだ。『俺の友達として』な」

……なるほど、友達になりに来た、というのはそういう意味か。

そして友達になるのは宮永さんにこだわらないという理由も納得できた。見汐君も中々悪知恵が働くタイプらしい。

「要するに見汐君は私達の誰かと友達だつていう建前を作りに来たのね」

「理解が早くて助かる」

宮永さんは白糸台の生徒として文化祭に参加する。私達は見汐君に招待されて遊びに行く。

そこでたまたま『麻雀喫茶』を見つけ、その席に着くのがたまたま宮永照だった、と

いうだけの話。清澄と白糸台、どちらの麻雀部も関与していない、という状況が偶然にも揃うわけだ。

『高校生一万人の頂点』。その実力を全国の本番前に味わえるのは大きな経験になるんじゃないか?』

「……ええ、そうね。実際に魅力的な提案よ」

思わず心が揺れてしまうほどいやらしい誘惑だ。

けれど、それでじやあお願ひしますとはいかない。見汐君の話に乗ったとして、絶対確実に安全というわけにはいかないだろう。何よりも不気味なのはそうすることで彼に何の利益があるのか全く分からぬといふ点。

「でも大会の規則に抵触するリスクは負わなければいけない。そこまでの危険を冒す理由があるのかしら?」

「それは——つと、悪い。電話だ」

見汐君の言葉を遮るように着信音が鳴る。彼はポケットからスマホを取り出ると、その画面を見て顔をしかめた。

「げ、このタイミングで電話かよ、宮永の奴」

何気ない見汐君の呟きに全員が息を呑む。なにせあの高校チャンピオンから電話がかかつってきたというのだ。

自分達が会話をするわけでもないのに部室に緊張が走る。特に宮永さんはどうしたらしいかオロオロしている。

しかし見汐君はそんな空気に構うことなく、数秒だけ逡巡した後、電話を取つた。ただし電話口の声が私達にも聞こえるようにしながら。

「よう、どうした?」

『小旅行に行つたっていうから、今どこにいるのかと思つて』

「当ててみ。ヒントは自然が豊かなところだ』

『……樹海?』

「そんな殺伐とした小旅行があつてたまるかよ』

宮永照は自然豊かと聞いて樹海を連想するらしい。そんな一生使いどころの無さそうなトリビアを得る。というか同級生が学校のある平日に小旅行に行つたなんて事態をずいぶんあつさりと受け止めているような……。宮永照の器が大きいのか、はたまた見汐君の行動がいつも突拍子のないものなのか。なぜだろう、後者のような気がする。

一方で宮永さんは迷つた末に、前のめりになつて電話から聞こえてくる声を一字一句聞き漏らすまいとしていた。声の主は本物のお姉さんなんだろう。

『それでいつ帰つてくるの?』

「今日中の予定。夜遅くなるけどな」

『そう。じゃあ明日のお弁当は用意しておく』

「おー、いつもありがとな」

お弁当？宮永照が？見汐君に？

ものすごく手慣れた感じで話してるので、もしかして二人つてそういう関係なのかしら。え、じゃあ今私達は恋人同士の会話を聞かされてるの？

見れば宮永さんは意外そうな、そして他の子達は気まずそうな表情をしている。当然だ。カップルを通り越して、もはや新婚夫婦みたいな会話を聞かされてどんなリアクションをすればいいのか。

「あ、そうそう。話変わるんだけどさ」

『何？』

「宮永の妹のこと。ちょっと調べてみたんだよ」

なんて思っていたら、今度はいきなり宮永さんの核心に迫るような話題になつた。トークの振り幅が大きすぎる。ジエットコースターか。

ああ、宮永さんが今度は震え出した。感情が整理できなくて大変なことになつている。和、支えてあげてる。

『そしたら宮永の妹大将じゃん。先鋒のお前と戦えなくない？』  
『……本当に？』

「こんな嘘つくわけないだろ」

『普通ならエースは先鋒のはず。どうして咲が大将なの?』

「いや、俺に聞かれてもな。清澄の先鋒が妹より強いんじやねえの?」

そんなセリフに優希の肩がピクッと跳ねる。

うちの先鋒が優希なのは、彼女が点数移動を計算できないからという理由で選ばれた、ただの消去法なんだけど……。

「てかなんで気にかけてる妹のこと調べてないんだよ。たぶん今なら俺の方が近況に詳しいぞ」

そりやまあこうして直接会いに来てるくらいだものね。よくよく考えるとかなりぶつ飛んだ行動だわ。

それにしてもこの口振りだと見汐君は宮永照に内緒で清澄までやつて來たようだ。本当に彼はどういうつもりなのか。

『父さんから咲が高校でまた麻雀を始めたって聞いて、あの子なら絶対に先鋒を任せられると思ったから……』

「相変わらず変なところで抜けてんな。けどまあ団体がダメでも個人があるし、そつちで期待したらどうだ?」

『……咲は人と競うのがあまり得意じやないから個人戦で勝ち上るのは難しい。チー

ムのために戦える団体戦が咲に一番合つてゐる』

仲は疎遠だと聞いていたけど、さすがに実姉だけあつて宮永さんの性格をよく分かっている。

その分析は正しい。宮永さんが最も力を発揮できるのは間違いなく団体戦だ。

反面、個人戦では今一つな試合が多い。原因は闘争心の無さというか、どうしても一步引いてしまうところがある。それでも県三位に食い込んだのは宮永さんの実力を裏付ける結果だったが。

『それに個人戦には憩も出る。私より先に憩と当たつたら……』

「えーい、うろたえるな。憩つてのがどこぞの誰かは知らんけど、宮永は姉らしく、妹のこと信じてドーンと構えて待つてりやいいんだよ」

『咲を信じて……』

「ああ。強いんだろう？お前の妹は」

『……うん、強い』

「なら大丈夫だ。他ならぬ宮永照チヤンピオンからのお墨付きだからな」

そう返しつつ、見汐君は宮永さんに笑いかけながら親指を立ててサムアップのポーズを向ける。

これが見汐君なりの、宮永さんへの激励なのだろう。

不思議な人だ。よく分からぬ、知りもしない相手なのに、その言葉や行動が胸に響く。力を与えてくれるような気がする。今日初めて出会つたばかりだという事実を忘れそうになる。

その後見汐君は二、三言交わして通話を切つた。そして何事もなかつたかのように話を再開する。

「んで、なんだつけ？ああ、俺がここまでする理由だつたな」

「ええ、聞かせてもらえる？」

今のやり取りでなんとなく予想はついていたけど、私はあえて見汐君の言葉を聞くことを選んだ。

「何も複雑な事情があるわけじやない。ただ、宮永が妹と麻雀で勝負したがつてるつてだけだ」

「お、お姉ちゃんが私と……？」

「ああ。理由は本人が語るべきだろうから俺は言わないけど」

宮永さんの言動から、姉妹の間に確執があるのは知つていた。そして宮永さんはそれを解消したいと願い、その想いを原動力にして全国の舞台まで辿り着いた。

でもそれが一方的なものではなく、宮永照も妹とのわだかまりを解消したいと思つてゐるのだとしたら。お互いが全国大会での対戦をその契機にしたいと考えてゐるのか

もしれない。

しかし今ままではその望みが叶う可能性は低い。だからその機会を作るために、見汐君はわざわざこんな手の込んだことを……？

そう思い至ると、お腹の底から笑いが込み上げてきた。それをすんでのところで堪える。

まったく、世の中にはこんな人もいるのね。仲違いしてしまった姉妹を仲直りさせるために大会の規則をかい潜り、文化祭の企画を立ち上げ、遠路はるばる長野までやつてくれる。誰かのために、こんなに懸命になれる人がいるなんて。

楽しくて、嬉しくて、微笑ましくて、ちょっとだけうらやましい。

「宮永さん、あなたはどうしたい？・麻雀を打ちたいの？お姉さんと」

「……はい、打ちたいです！だから、行かせてください」

やれやれ、そんなに目を輝かせられたらダメなんて言えないわね。

「止めはしないわ。思い切りぶつかってきなさい」

「ありがとうございます、部長！」

「なんか宮永だけ行く感じになつてるけど、一応全員分の招待チケットあるからね？どうせなら団体で来て売り上げにも貢献してつてくれよな」

見汐君が半券付きのチケットを私に手渡してくる。

十枚はあるようだ。部員全員分を合わせてもお釣りがくる。他にも誰か誘つてみようかしら?

「抜け目ないのね」

「一石二鳥つつーんだよ」

軽口を交わし合い、ふと、ついさつきまで怪しんでいた見汐君に心を許していることに気が付く。

人を食つたような言動だけど、一番食えないのは彼自身なのかもしれない。建前なんて気にしなくていいや、という気にさせられる。

「ねえ見汐君」

「なんだ?」

「お友達になりましようか」

そう言つて、私は右手を差し出した。

建前上なんかじやなくて、本当の友達になるために。見汐君は一切迷うこともなく私の右手を握り、そして笑つた。

「よろしくな、竹井」

「ええ、こちらこそ」

しつかりと握手を交わす私達。その光景を見て、まゝは「どえらい危険なコンビが誕

生してしまった気がするのう……』と呟いていた。

# 19話　s.i.d.e 見汐太陽

「というわけでサッカー部の出し物はタコス屋に決定したぞ」

「何が“というわけで”なのかさっぱり分かんねえんだけど……」

俺のクラスの隣、三年C組に所属するサッカー部部長……ああ、ついこの前引退したから元部長か。そんな肩書きを持つ森原ことモリシに文化祭実行委員として決定事項を通達する。ちなみにモリシは森原のあだ名だ。『もり』はら『し』んいち、略してモリシ。

俺からの報せを受けてモリシは困惑を隠さずその理由を尋ねてきた。

「つーかなんでタコス屋？」

「前に希望が重複してるからたぶん変更になるって言つといただろ？」

たこ焼きの希望を出したのは一年と二年から一クラスずつ、あとは水泳部とモリシが部長を務めていたサッカー部だ。その内希望が通ったのは高校で初めての文化祭になる一年と、<sup>インターハイ</sup>高校総体の出場が決まっていて出せる人手が少ない水泳部だ。

去年の経験がある二年生と、すでに西東京予選で敗退して三年生が引退しているサッ

カーネルにシワ寄せが行くことになつた。あとは場所の問題もある。

一年と二年、そして水泳部は校舎内の教室が割り当てられているが、サッカー部のスペースは校庭の一角。つまりは屋外だ。たこ焼きのような小規模なもの以外にもできるだろうという判断もある。

「そうだけどさ。まさかタコス屋になるとは思わねーじやん」

まあな。俺も清澄の学食にタコスが売られてなきや思いつかなかつた。

あそここの雀部員、片岡が美味そうにバクバク食つてるからそれが気になつて興味本位で聞いてみたらまさかのタコス。あそこ公立校のくせにファンキーすぎんだろ。

「変わり種だけどその分目立つぜ。作り方や設備も凝つたもんは必要ないし、迷惑料として炭酸系の飲み物の使用許可はふんだくつてきた」

「おお、マジか！」

「マジマジ。喫茶店やるとこ以外、出店で炭酸出せるのサッカー部だけだから。ほら、これ基本のレシピ」

事前に調理方法やお客様への提供の仕方を調べて写真付きでまとめたレシピ帳を渡す。

これを参考にするもよし、無視して独自のタコスを編み出すもよし。

結局申請通りにはならなかつたし、まあこれくらいの融通はしてやつてもいいだろ。申請の希望が通つてないところはどうしても作業が遅れがちになるからな。

「助かるぜ、太陽」  
たいよう

モリシは俺のことを『ひろあき』じゃなくて『たいよう』と呼ぶ。理由は言わずもがな、名前の漢字がそう読めるからだ。

入学したばかりの頃はほとんどの同級生が俺の名前を太陽だと勘違いしていて、逐一訂正するのも面倒になつたから放置した。同学年に『たいよう』つて名前の生徒はいなかつたから間違つて呼ばれてもあんまり問題なかつたし。

今ではさすがに『ひろあき』が本名だつてことは浸透してゐるけど、中には一年以上俺の名前が『たいよう』だと勘違いしたままの奴もいて、いきなり呼び方を変えるのも慣れないからそのままにしてる友達も多い。モリシもそんな中の一人だ。

「ま、持ちつ持たれつってことで頼むわ。んじや俺次行くから」

「おう」

モリシと別れ、C組の教室から出る。

その廊下はと言えば喧騒で溢れ、あちこちから様々な作業音が聞こえてくる。文化祭の本番まで二週間を切り、この時期になると通常授業が午前で切り上げられ、午後は丸々文化祭の準備に充てられる。そのため普段なら授業で静まり返つてゐるこの時間帯も校舎内外問わず騒がしい。

こういう雰囲気つていいよな。祭りがやつて来るぞ、つて気分になつてテンション上

がるし。

その後も自分の受け持ち箇所をいくつか回り、所々で声をかけられては質問されたり作業をちょっと手伝つたりする。

おい二年、そのバカみたいにでかい装飾ゴテゴテの立て看板を置くのは良いけど建てつけはしつかりしとけよ。あと人が通る時の邪魔になるようなどこには設置しないようだ。

なんてお小言じみた注意を要所で挟んだりしつつ、最後は体育館のステージで看板製作に取りかかる。これは文化祭実行委員と美術部有志の仕事だ。ブルーシートの上に置かれた三メートル四方のベニヤ板それぞれに『白』『糸』『祭』の文字を書くわけだが、当然ゴシック書体だなんかでただ書けばいい、とはいかない。

趣向を凝らし、彩鮮やかに、ちょっとしたイラストなんかを描き込んだりしながら仕上げるのだ。ちなみに俺はペンキの塗り専門を言い渡されている。

絵心ないからな。でも悔しいから細い筆にたっぷりと青いペンキを染み込ませ、隙だらけな委員長・政也の頬に思いつきり線を引く。

「てい」

「ちよ、太陽!? 何すんだ!」

「カツとなつてやつた。今は反省している」

「反省するの早いな?!だが許さん!」

太陽は 逃げ出した!しかし 捕まつてしまつた!

首根っこを掴まれて潰れたような声が出る。

「何やつてんの?・アンタら……」

そうして捕獲された俺の頬には赤いバツテンマークが刻まれた。痛み分けである。  
そこへ自分の仕事を終えてきたらしい中塚が現れ、俺と委員長の顔を交互に眺めて呆れたようにそう言つた。

「いやー、根を詰めてばつかだと疲れるからこういう息抜きがあつてもいいかなと」「ふつふつふー、じゃあ私もやる!」

中塚の後ろにくつづいて来た大星が筆に手を伸ばすも、しかしそれを後ろから抱きかかえられるように制止される。

犯人は美術部二年の女子二人組だ。

「あの人達は放つておいて淡ちゃんはこっちでやろうよ」

「そうそう! 淡ちゃん絵を描くの上手いし、やつてほしいところあるんだ」

「ね? お願い」

「もー、しかたないなあ。私がバツチリやつてあげちゃうよ!」

アイツ、ちよろいなあ。頼りにされると張りきつちゃう辺りは子どもより子どもらし

い。

けどまあ仲良くやれてるようで何よりだ。あの様子だと美術部の二人にも気を許しててみたいだし、中塚があれこれ取り持つてくれたおかげだな。  
先輩に対するタメ口は治つてねえけど。あれはもう大星の個性だと考えるしかないのかもしれん。

「ねえ見汐」

「なんだ？」

「アンタ、淡を見る目が我が子の成長を見守る父親みたいになつてるよ」

「バカな、それは弘世の役目のはず……」

「何言つてんの？ 大体、父親がアンタなら母親は宮永さんでしょ

「……」

「あれ、否定しないんだ？」

「突拍子もないこと言われて脳が処理落ちしたんだよ」

冗談じやなく、割と本氣で。

「ああ、見汐の頭はバグつてるもんね。じゃなきやあれで宮永さんと付き合つてないと

か意味分かんないこと言わないだろうし」

中塚からの当たりがキツい。俺なんかしたつけ……つて考えるまでもなく面倒な頼

み事してたな。

にしたつてそれだけでコイツが不機嫌になるのはらしくないような氣もするが。

「なんかあつたのか？」

「……最近、淡と一緒にいることが多くなつたからさ」

ああ、アイツ委員会活動の時は俺か中塚の傍にいることがほとんどだしな。

「で、それがどうした？」

「淡の話題が見汐と宮永さんに偏つてんの。アンタ達の惚気具合を間接的に聞かされる身にもなりなさいよ」

「何やつてんだ大星の奴……」

そもそも俺と宮永がいつ惚気たつて？

確かに最近は一緒に登下校してたりほぼ毎日弁当作つてもらつてたりするけど、人前で見せつけるようなことはしてない。この間ソファードで宮永と手を繋いだまま二人して居眠りしてたところを妹に発見されて問い合わせられたりはしたが、さすがに沙奈——大星のラインはできてないだろう。

「いかにも意外そうにしてるけど、正直最近のアンタ達の距離感見てると淡から色々聞かされてなくとも胸焼けしそうだからね？」

「距離感だあ？」

「……まさかあれ無意識でやつてんの？」

あれってどれよ？ 何もやつた覚えがないから皆目見当がつかない。

俺がマジで首を傾げていることを悟つたらしい中塚は、これ見よがしに大きなため息を吐き出した。

「あたしは見汐とクラス違うけどさ、アンタを見かけると大抵隣には宮永さんがいるわけ」

「偶然だろ？」

「んなわけないでしょーが」

言いつつ、中塚が俺の方へ踏み出してきた。間合いが近すぎて中塚は視線を合わせるために俺を見上げる形になる。

さすがにこれは気まずい。

「どう？この距離」

「近いな」

「そうね。そしてこれが普段の見汐と宮永さんの距離。自覚してる？」

俺の返答を待たず中塚が一步下がる。それがお互にとつて適切なパーソナルスペース。

けれど言われて気付く。ああ、確かに宮永との距離感はもつと近い。数字にすればた

ぶん十五センチくらいか。

「彼氏彼女だつて学校でそんなにベタベタしないわよ。で、付き合つてもいない二人の関係はなんなわけ? つて考えたらもう夫婦でいいかなつて」

「よくねーわ。すっ飛ばしすぎだろ」

主に論理とか、宮永の気持ちとか。

というか、やつぱり中塚がおかしいな。元々面倒見はいい奴だが、ここまで突つ込んだことを言うのはかなり珍しい。仮に何らかの理由で俺と宮永の関係性にやきもきしていたとしてもこんな痛烈に苦言を呈すとは思えないんだけど。

何が中塚をこうさせるのか。少しばかり考えてみてもあまり有力な説が思い浮かばない。コイツに彼氏がいなけりや「まさか俺のことが……?」的な発想もあつたけど、そういう理由でもなさそうだ。

「……とりあえずベンキが乾く前に顔洗つてくるわ」

「……落としにくくなる前にそうした方がいいわね」

「おー。政也も行こうぜ」

結局微妙な空気になり、この話はとりあえずここまでと暗黙の了解を交わして終了になつた。

政也と連れ立つて体育館の外にある水飲み場に向かう。そんな俺の耳は、中塚が何事

か呴いたのを捉えた。  
かつた。

だが内容までは聞き取れず、それを聞き返す気にも今はなれな

# 20話 side 大星淡

「おーい、大星」

「なにー？」

文化祭で使う予定の看板に色を塗つていると、太陽先輩が私の方にやつて來た。顔についてたペンキは跡形もない。きれいに落ちてよかつたね。

「もう部活に行く時間だぞ」

「え、うそ」

慌てて体育館の時計を見れば三時五分前。

気付かない内にずいぶん時間経つちやつたなー。

「てなわけでさつさと行くか

「太陽先輩も？ なんで？」

「ちょっと鹿島先生に用があるんだよ」

「ふーん」

そういうえば先輩、麻雀部のマネージャーみたいなことやつてるけど正式な部員じやな

いんだよね。聞いたことないけどなんでそんなことやつてるんだろ？

麻雀は超弱いけど、先輩が部員じゃないことに違和感があるくらいには部に馴染んでるし。

「見汐先輩、淡ちゃん連れてつちやうんですか？」

「俺じやなくて麻雀部が呼んでんの。コイツはこれでも麻雀部の大将だからな」「これでもつてどういうこと？」

ちよつとカチンつてきたから太陽先輩を睨む。先輩はそれでもヘラヘラしてるけど。

「こういうのなんて言うんだつけ……のれん暖簾に釘？」

「あ、そつか。淡ちゃん団体戦の大将なんだつけ」

「まだ一年生なのにすごいよね」

「ふふん、まーね！」

「期末で赤点取つたけどな」

「むー！ それは関係ないでしょ！」

「おつと」

余計なことを言う口を閉じさせようとお腹にめがけた突進を、あつけなくヒヨイとかわされる。太陽先輩はそのまま体育館の出口に向かつて逃げていった。

「待てー！」

それを追いかける私の背中に他の委員の笑い声や、菜緒と優子の「いつてらっしやーい」って声が届く。私はそれに後押しされて駆けた。

なんか不思議な気分。今までこんな風に周りの人から応援されたことなんてなかつたし、あんまり仲のいい友達つていなかつたのに。

それが白糸台に来てどんどん変わつちやつた。そのきつかけになつたのは、たぶんテルや董先輩、そして太陽先輩と知り合つたからだと思う。そんなことをぼんやり考えていたら、急に追いかけていた背中が近くなつて急停止した。

「あぶなつ！ どうしたの？」

「この廊下を走る方が危ねえよ」

見れば文化祭で使う看板とか小道具、なにより人がたくさんいた。確かにこれで走つてたらぶつかつちやうかも。

そもそも太陽先輩が私をからかうから追いかけてただけで、そんなに急ぐ必要ないし。そのまま先輩の一歩後ろについて歩く。

こうしてよくよく見てみれば、前を歩く先輩は色んな人に声をかけられてる。文化祭の実行委員だからつていうのもあると思うけど、それで言つたら私だつてそうだし、きっと太陽先輩だからこそな気がする。

太陽先輩は通り過ぎ様にちよつとだけ言葉を交わす。先輩は笑顔。声をかけた人も、

かけられた人も笑つてる。こういうところは少し尊敬したりする。私には絶対無理だもん。

なんていうか、先輩は人と関わるのが好きなんだと思う。だから人にちよつかいかけるし、私の勉強を見てくれたりしたんじやないのかな。

「あ、そうだ。なあ大星」

「ん?」

人通りが少なくなつたところで、太陽先輩が振り返りながら話し始めた。

「お前文化祭当日はどうすんの? 自由時間」

「あんまり考えてないかも。でもテルのクラスは喫茶店やるつて言つてたからそこは行くよ」

「おい、来い来い。宮永も喜ぶぞ。大星の自由時間つて午前? 午後?」

「覚えてない。なんで?」

「大星が来る時に合わせて特別サービスしてやる」

「ほんと!」

やつた! サービスつてなんだろ? 喫茶店だし、やっぱりケーキとかお菓子かな?

あ、でも太陽先輩のことだしなー。なんか悪だくみしてそうかも。

「なんだ、そのいかにも“怪しんでます”って感じの目は」

「……別にー？ それとさ、先輩」

「あん？」

「どうして私やテルのこと名字で呼ぶの？ 普通名前で呼ばない？」

「どうしてって言われてもな。特に理由はねえよ」

「ふーん」

変なの。仲が良い相手なら名前で呼べばいいのに。

特にテルにはそうした方が良いと思うんだけどなー。だつて太陽先輩にとつて一番特別な人はきつとテルなんだろうし。

私や董先輩だつてそこと親しいと思うけど、太陽先輩が撫でたりつついたり、体に触れるのはテルだけだ。私だとせいぜいハンカチを押し当てられたり背中に氷を入れられるくらいだもん。

そしてたぶん、テルにとつても太陽先輩は特別なんだと思う。かなり無口なテルが口を開く時は、だいたい麻雀の話か太陽先輩の話。

……でも、あり得ないだろうけど、もしかして。太陽先輩にとつてまだテルがそこまで特別な存在じやないって可能性もあるのかな？ そうだとしたら、誰が先輩にとつての特別になれるんだろう。

ねえ太陽先輩、私知ってるよ。私にばれないように、陰から助けてくれてること。

叶かなえ

にお願いして、私が委員会で孤立しないようにしてくれたこと。

そんなこと教えたら、先輩は驚くかな？ 困った顔して、その後に訳の分からぬ言い訳するだけかもね。

先輩が嫌がるだろうからお礼は言つてないし素直に言えもしないけど、本当は感謝してるんだ。きつかけは太陽先輩がお願ひしたからだつたとしても、叶も、菜緒も、優子も友達になれたから。大会が終わつたら一緒に遊びに行く約束だつてしまつたし。

それだけじやない。私の悪口を真つ向から否定してくれた時も、私は近くにいたんだよ？ ま、気付いてないだろうけど。

そこまでしてくれるのは、太陽先輩にとつて私が少しほ特別だつたりするから？ それとも、単なる友達や後輩だからつてだけでそこまでできるの？ さっぱり分かんない。

もしも、だけど。

私の名前を呼んでほしいつてお願いしたら、先輩はなんて言うかな。

いきなり腕に抱きついたりしたら、どんな反応をするのかな。

私がそんなことを考えてるつて知つたら、この気持ちに応えてくれたりするのかな。

——なーんて、ね。

大丈夫だよ、テル。太陽先輩のこと、横取りしたりしないから。てか、できそうにないもん。どう考えたつてテルが先輩にとつて一番特別な存在だよ。

心中でテルを励ましながら、この鈍感を振り向かせるのは大変だろうなあ、なんて考えて、私は誰にも見られないように目を擦る。ちょっとだけ濡れた袖口は、すぐに乾いた。

## 21話 s i d e 大星淡

珍しくもない話だけど、私の家には雀卓がある。学生時代に麻雀をやっていたお父さんの趣味が高じて、行きつけだった雀荘が閉店するときに譲り受けたつて子どもの頃に何度も聞かされた。

お母さんとの出会いも麻雀がきっかけだから、昔からウチは家族で麻雀を打つことが多かつた。休みの前になるとお父さんの麻雀友達がウチに来て、徹夜で打ち続けることもざらにあつた。

そんな環境で育つた私が麻雀を打つようになつたのは自然な流れだと思う。

最初はこれっぽっちも勝てなかつたらしいけど、初めて牌に触つたのが三歳とかそれくらいの時のことだから、私自身は覚えてない。

記憶にあるのは小学生になつてからのことだけで、その頃には普通に勝つたり負けたりしながら両親や両親の麻雀友達とよく打つていた。そして三年生になるともう周りの大人に負けることはほとんどなくなつて、そうなればもちろん同世代なんかに負けるわけがない。

私は強かつた。中学では麻雀部に入つたけど、同級生はおろか上級生にも相手になるような人はいなくて、ここにいても強くなれないし何よりつまらなかつたから半年も経たずに辞めた。麻雀のスクールでセミプロとかアマチュアの高段者と打つ方がよっぽど性に合つてたし。

けどそれも長く続かなかつた。たぶんまだ子どもで、なんの実績もない私に負けるのが面白くなかったんだと思うけど、まあそれはどうでもいいや。とにかくスクールでも疎まれ出して、そんな空気に嫌気がさしたから足が遠のいた。

好きな麻雀が好きなように打てない。私が宮永照という存在を知つたのはそんな風に悩んでいた時期だつた。

一年にして全国王者。それも個人と団体の二冠。テレビ画面越しでも伝わつて來た圧倒的な強さ。

この人と打つてみたい、つて思つた。中三の夏、テルが連覇を達成するとその想いはもつと強くなつた。そして今年、私はついに白糸台高校に入学した。

これで宮永照と麻雀が打てる。それしか考えてなかつた。どうせレギュラーになるくらいならわけないと高を括つていたし、高校生活なんて中学の焼き増しにしかならなつて見限つてたから期待なんて全然してなかつた。

そして肝心のテルはといえば期待した通り……ううん、期待以上にすごかつた。

どんな風に打つても勝てない。感じた壁を乗り越えてもその奥にはもつと高い壁がそびえている。まるで底が見えない、初めて経験した勝てないとと思わされる絶対的な強さ。

本気で打つても受け止めてくれる、弾き返される。負けるのは悔しかったけど、それは私がずっと求めていた相手で、そんなテルに惚れ込むまで時間はいらなかつた。部活中べつたりなのはもちろんだし、休み時間まで三年生のテルの教室まで遊びに行くようになつて——そこで太陽先輩に出会つた。

第一印象は“なんかチャラチャラしてて近付きづらい人”だつた。髪は染めてるし、ピアスしてるし、制服の着こなし方とか、あとはテンションの高さも。

イケイケな感じっていうか、中学にもいたけどクラスや学校の中心人物によくいるタイプに見えて、私が今までの人生で関わり合つたことのない人間。最初はそんな人が有名人でもあるテルにちよつかいをかけてるのかなつて思った。

だからテルを変な男から守らなきやつていう使命感でテルと太陽先輩の間に割り込んだ。

「大丈夫テルー!？」

「……淡、どうしたの?」

「テルがヤンキーフボい人に絡まれてるから助けに来たよ!」

立ちはだかるように両手を広げて、とりあえず精一杯の威嚇を向けた。いきなり現れ私に先輩はちょっとだけきよとんとして、でもすぐにふつと笑いながらおもむろに立ち上がる。

「よくぞここまで辿り着いたな小娘。だがもう遅い」

そして特撮ヒーローの悪役みたいな演技がかつた口調でそう言つて、最後に私をズビシイ！つて感じで指差しつつなんかよく分からぬボーズを取つた。

「宮永はすでに連続和了しかできない体に改造されたのだ！」

今度は私が呆然とする番だつた。え、これどういうノリ？なんて混乱することしかできなくて、ただ“連続和了しかできない体”というフレーズだけが意識の端に引っかかる。

雀士の性がそれに釣られて、特に意識したわけでもなかつたけど私の口から言葉がぼろつとこぼれた。

「なにそれ、超最高じゃん」

これが私と太陽先輩が初めて出会つた瞬間だつた。

それからというもの、先輩はいつもテルの隣の席にいるし、どうしてかたまに雀部にも来るからほんと毎日顔を合わせるようになつた。その中で太陽先輩のイメージは『怖い人』から『変だけど面白いテルの友達』にすぐ変わる。そしてさらにそれがテ

ルの友達、じゃなくて自分の友達に変わるまでほとんど時間はからなかつた。

だつて太陽先輩つて実は三人くらいいるんじやないかつて思うほど校内の至るところで会うんだもん。一年の廊下でちよくちよくすれ違つては声かけてくれるし（そもそもなんで一年の階にいるの？）、担任に呼び出されて職員室に行つたら外国人の先生相手に片言の英語とごり押しの日本語を駆使してなんか盛り上がつてるし（しかも私まで巻き込まれた）、昼休みに学食で他の男子と早食い勝負とかして騒いでるし（学食のおばちゃんとも異様に仲が良い）、ふらつと部活に顔を出しては平気で部員に指示を出して普通に受け入れられてるし（自然すぎてしばらく太陽先輩をたまに来るマネージャーだと勘違いしてた）。

極めつけは登校中に鉢合わせしたときだよ。あいさつした流れでそのまま並んで登校したんだけど、話に夢中になつてた私は先輩が一年の教室まで一緒だつたことに気付かなかつた。

けど太陽先輩は当たり前のように私の教室に入つて、クラスの男子と同級生とするみたいに碎けた感じでしばらく雑談してたこともある。あれは入学してまだ一ヶ月も経つてない頃のことで、その光景を見てもしかして全校生徒が太陽先輩と知り合いなんじやつて思つた。

いやまさすがにそんなわけないんだけど。知名度ならテルの方がずっと上だし。

でもそれは一方的なもので、双方向の知り合いとか友達なら、たぶん太陽先輩がこの学校で一番多いのかも。私もそんな中の一人だし。

その頃になると太陽先輩とは気安い関係になつていて、今思えば私はもうそのときには先輩に惹かれてたのかもしれない。そしてそれが決定的になつたのはある日の放課後のことだつた。

部活に向かう途中、忘れ物をしたことに気付いて、それを置きっぱなしにしてあるだろう教室にUターンした。そしてもうすぐ自分の教室に着くつてところで見慣れた後姿を発見する。あの髪の色は見間違いようがない。

なんで三年生の太陽先輩が一年生の教室がある三階にいるのかなんてことはもう疑問にすら思わず、驚かせようと身を隠しながら近付いていく。そしてあと少しつてところで私の耳にこんな声が届いた。

「そういや先輩ってなんで大星と仲いいんすか?」

自分の名前が聞こえて、思わず足が止まる。物陰に隠れながら確認すると太陽先輩と会話していたのは見覚えのある顔の男子。確か同じクラス……だつたと思う。

そんな二人は私の存在に気付くことなく会話を続けていた。

「なんでってどういう意味？」

「大星つて自分勝手つていうか、正直付き合いづらくないですか？クラスでも敬遠されますよ、アイツ」

普段ならそんな陰口なんて気にしない。自分のことを悪く言われていようとその場に皮肉の一つでも放り込んで笑つてやるくらいわけないのに。

けど、できなかつた。太陽先輩が私のことをどう思つてゐるのか気になつたから。その反面、もし先輩が私のことをクラスの男子と同じようにウザい奴だと思つていたらどうしようという恐怖もあつた。結局その二つが混ざり合つて足は地面に縫い付けられたようにならなかつた。

そして太陽先輩が口を開く。

「付き合いづらいつて、どこが？」

あつけらかんと、なんでもないようこう言つた。

あまりにも呆氣なく否定されて、私はすぐに太陽先輩の言葉の意味を理解できなかつ

た。その間にも先輩は言葉を重ねていく。

「まあ確かに前が言つた通り身勝手つていうか生意気な部分もあるけどさ、俺は大星がそうしたくてしてゐるわけじゃないと思うぞ」

「どういうことですか？」

「これは俺の憶測だけど、アイツは人との関わり方が分かんねえだけだと思うんだよ。理解したり尊重したりするような友達とかがいなかつたから自分だけを大事にしてればよかつた。だから自分が上に立たないで人と接する手段がない」

太陽先輩の言葉が胸に刺さる。それは少し痛かつたけど、そんなことどうでもいいくらいに温かかった。

だつて誰にも打ち明けたことなんてないし、そうするような友達すらいなかつた私の、自業自得と言つてしまえばそれまでの苦悩を、先輩は理解してくれていたから。その上で私に手を差し伸べてくれていたことを理解できたから。

本人は憶測だなんて言つてはしまへばそれまでの苦悩を、先輩は理解してくれていたから。私はつきりと友達って呼べる人がいなかつた。必要ないんだつて思つてた……思い込もうとしてた。その方が楽だから、自分こそが正しくて、それを認めてくれない周りの人間なんてどうでもいいやつて切り捨てた。

そんな私が唯一他人を意識するのが麻雀で、だからそれを介さないのに私を分かつてくれる太陽先輩に驚いたし、嬉しかつた。

「そりやどつちが悪いかつて言つたら大星なんだろうけど、それを指摘してやるものかわいそうな気がしてなあ」

「俺のイメージだとそんなこと言われても気にしなさそうですがね」

「なら教室で俺と一緒にいる時の大星を思い出してみろ」

「……なんか犬っぽいかも」

え、太陽先輩と話してるときの私ってそんな風に見られてるの!?

いや確かに最近、テルとおんなじくらい太陽先輩にもべつたりしてると氣もするけど。

「だろ? 俺なんかたまに大星に犬の耳と尻尾を幻視することがあるぞ」

何それ、ハズいんだけど!

っていうかテルにもネコミミ付けてたりしたし、もしかして先輩ってそういう趣味があるの?

コスプレかー。先輩が好きならちよつとくらいやつてもいいけど、あんまり過激のはやだなあ。あ、でもテルと一緒にやるなら楽しいかも。

「でもそれって先輩には懷いてるからですよ」

「そりやそりや、懐かれるくらいの関係を築いたんだから。でも初対面の時なんて開口一番ヤンキー呼ばわりだつたぜ?」

「え、先輩つてヤンキーじゃないんですか?」

「制裁が必要みたいだな」

「すいません冗談です! てか凄まれるとマジでヤンキーフボくて怖いですって!」

しばらくそんなじやれ合いが続く。

それが一段落したところで太陽先輩が本題に戻した。

「つたく……で、大星だけな。気難しい奴に見えるかもしないけど、アイツはただ単に子どもなだけだ。言うことは本音ばっかりだし行動に裏表もない。素直すぎる言動を面倒だと思つて遠ざけたりせずにしつかり受け止めてやれば大星だつて心を開くんだよ」

なんて太陽先輩は言い切る。でも人付き合いが苦手な私だつて分かるよ。それが難しいんだつてことくらい。

自分勝手で生意氣で偉そで他人を下に見てる奴なんて、私は友達になれないし自分から歩み寄ることなんて絶対にありえない。でも先輩は当然のようによができる人なんだ。ありえないくらい、優しいんだ。

「太陽先輩、大星に肩入れしすぎじゃないですか？」

「まあな。アホっぽいし生意氣だけど、俺にとつては可愛い後輩なんだよ。そりや見る目も多少は甘くなるさ」

「……もしかして先輩がよく一年の方に来るのって、実は大星のためだつたり……」

「察するなよ。言わぬが花つてやつだ」

そう言つて、先輩は困つたように笑う。

もう限界だった。これ以上太陽先輩の言葉を聞いていたら私は泣いちやうかもしない。忘れ物を取りに来たことなんてすっかり忘れて、私はただ先輩から逃げるよう走つてその場を去つた。どこをどう通つたのかは覚えてない。ふと見えた無人の空き教室に駆け込んで扉を勢いよく締め切つた。

そしてその扉を背にして、私はずるずるとへたり込む。

息が苦しい。心臓が痛い。でも、その原因はここまで走つて來たからじやない。さつきの太陽先輩の言葉や笑顔がずっと頭の中に残つていて、それを思い出すだけで胸が苦しくなる。顔だつて間違ひなく赤い。ここまで条件が揃つているなら、もう考える必要もなかつた。

——ああ、私は、太陽先輩のことが好きなんだ。

さしたる抵抗もなくそう納得できた。

いつも楽しそうに笑つてて、相手をからかうのが好きで、掴みどころがない人。けど飄々としてるよう見えて、その胸の内に秘めている優しさに私は触れてしまつた。名前の通り、おひさま太陽みたいな、温かい優しさに。

こんなこと隠してたなんてするいよ。もし今日みたいな偶然がなかつたら、私は一生

太陽先輩の本当の優しさを知ることができなかつた。  
 ずるいよ。こんなぬくもりを知っちゃつたら、好きになつちゃうに決まつてんじや  
 ん。

……なのに。

「好きだつて気付いた瞬間に失恋とか。ほんと笑える……」

初恋は叶わないつてよく言うけど、こんな即失恋とかさすがにひどい。  
 でも太陽先輩にはテルがいる。あの二人はお互に自覚がないだけで、絶対に両想い  
 だ。私にとつては一番つて言えるくらい好きな二人が、傍から見ても分かるくらいお互  
 いを想い合つてる。

そんな間に割り込もうなんて思えるわけないし。

万が一私が太陽先輩の彼女になれたとしても、そのせいでテルが傷付くなんていや  
 だ。

だから私はあきらめなきやいけない。私の友達になつてくれて、私に大切な気持ちを  
 教えてくれた太陽先輩とテルを幸せにするために。

ううん、あきらめるだけじゃダメ。この恋心だけは悟られちゃいけない。優しさの化  
 身みたいな二人が私の気持ちを知つたらきっと邪魔になるもん。なら一生隠し通して  
 やる。

それが太陽先輩とテルへの、私なりの恩返し。

そう、だからこの言葉を口にするのはこれが最初で最後。私しかいないこの場所で、誰にも届かないように、たつた一度だけ告白するのを許してね、テル。  
「好きだよ、先輩。私、太陽先輩のことが、好き……」

はつと意識が覚める。キヨロキヨロと周りを見渡してみれば学校の昇降口だった。  
寝ちゃつてた……わけじやないや。ただあの日のことを思い出してボーツとしていただけみたい。うーん、やっぱりまだあきらめきれてないのかなー？

まあだからつて太陽先輩に告るつもりはないけど。

「こんなところにいたか、淡。探したぞ」

ふと背後からそんな声が聞こえた。

「あれ、なんか用？ 董先輩」

「いや、用というかだな……」

董先輩の歯切れが悪い。らしくないけど、どうしたのかな？

不思議に思いながら見つめていると、董先輩は意を決したように尋ねてきた。

「淡、お前何か悩んでいるのか？」  
ドキッとした。

でもそれを顔に出さないようにしてなんとかやりすぐそうとする。

「別にそんなことないよ？どうしてそんなこと聞くの？」

「いやな、部活の前に見汐からお前の様子がおかしかったから気を配つておいた方が良いと言われてな」

太陽先輩の名前が出て、今度こそ私の表情が崩れた。マズい、と思つても手遅れ。  
それを見逃すほど董先輩の観察力は甘くない。

「やつぱり何かあるんだな」

疑問じやなく、確信を持つて董先輩が断言した。

否定しなきやいけないので、今の私はそれどころじやなかつた。どうしてバレたの？  
今日も今まで通り普通だつたのに。変わつたことなんて何も――

(あ……)

一つだけ、あつた。前を歩く太陽先輩の背中を見て、ちよつとだけ。時間にすれば十  
秒もないくらい。

でも確かにあのときの私は先輩へと気持ちが向いていた。  
それだけ？たつたそれだけで太陽先輩は私が何か隠し事をしてゐるつて気付いたの？

信じらんない。どれだけ私のことしつかり見てんの？それとも太陽先輩の人を見る目つて、まさか異能なんじや……。

そんなことを考へてるうちに董先輩の視線がどんどん心配そうなものに変わつていく。落ち着かなきやだめだ。

たぶん太陽先輩は私が変だつてことには気付いたけど、それが何かまでは分かつてないはず。でなきやあの人人が董先輩任せにするわけない。何か適当なウソで誤魔化せば……。

そう思つていたのに。ふいに董先輩の手が私の頭を撫でた。

「言いにくいくことなら無理に話せとは言わない。だが話すことでも少しは楽になるなら私は言うといい。どんなことでも全て私の胸の奥にしまつておいてやるさ」

泣きそうになつたけど、泣いてなんかやるもんかつて、意地を張つて涙をこぼすことだけは堪えた。

でもそつちに意識を割きすぎて、董先輩の優しさに耐えられなくなつた心が、私の意思とは裏腹に言葉を吐き出してしまう。

「董先輩。私ね……太陽先輩が好きなんだ」

ついに口にしてしまう。絶対秘密にしようつて思つたのに、二カ月くらいしかもたなかつた。いくらなんでも自分が情けない。

思いがけない告白に、董先輩がなんとも言えない顔で固まっちゃつた。さすがに予想外だつたかな？

でも普通そうだよ。だつてうまく隠し通せてるつて自信あつたもん。それをあつさり見抜く太陽先輩がおかしいんだ。

思えばテルも麻雀では人の本質を見抜くのが得意だし、そういう意味でもやつぱりお似合いだよね。

そんな場違いなことを考えて、なんとか暗くならないように、笑顔を浮かべて言つた。  
「それでね、テルのこともおんなじくらい好き。だから私は二人を応援するよ」

きつとそれが、私を含めて全員が幸せになれる選択だと思うから。大好きな二人の未来を壊しちゃつたら、私は一生後悔する。

それだけは間違いない。

私がこうやって自分以外の誰かを想うことができるようになつたのも太陽先輩とテルのおかげなんだから。この気持ちは二人のために使いたい。

「……そ、うか？」

董先輩は私の選んだ道を肯定も否定もしなかつた。その代わりにギュッと抱きしめられる。

あつたかいなあ。

「私はお前を尊敬するよ」

「ありがとう」

「今の大星なら大丈夫だ。きっとお前にもいい人が現れるさ」

「ううん、それは難しい気がするけど」

「そんなことは——」「だつて」

董先輩の言葉を遮つて、私は嘘も偽りもない素直な感情をさらけ出した。  
絶対、秘密にしてね？

「太陽先輩とおなじくらい優しくて、楽しくて……こんなに好きになれる人なんて、そういういるわけないもん」

昇降口の外から射しこむ西日に照らされた私の頬には、きっと一筋の涙が伝つてい  
た。

## 22話　s.i.d.e 見汐太陽

梅雨も明け、連日の真夏日が体から水分と体力を奪い取る中、文化祭の準備もついに佳境へと入つた……っていうか早いもので本番はもう明日だ。

予定よりも準備が少々押したとはいえ、なんとか大きなトラブルに見舞われることもなく文化祭実行委員としてやるべきことは終えた。あとは本番を迎えるばかりである。なので未だに片が付いていないクラスの方の仕事を手伝おうかと思つて覗いてみたところ、こつちももうすぐ終わるから大丈夫だと断られた。ただしその代わりに……と衣装担当の一人、大山に何やら紙袋を渡される。

「なにこれ？」

「宮永さんの衣装。出来上がるの遅れちゃつて」

「これを届けろつてことか」

時計を見れば午後七時少し前。もう部活は終わって家に帰っている時間だろう。

「ごめんなさい。本当はもっと早く仕上げたかったんだけど……」

「いやまあしようがないつしょ。その分気合い入れてクオリティ上がつてるらしいじゃ

ん

俺達三年生にとつては高校生活最後の文化祭だ。思い残すことがないようにできることは全て注ぎ込みたいって気持ちはよく分かる。後悔はしたくないよな。実行委員の準備が押したのも半分くらいはそれが原因だし。

そのおかげで明日は全力で楽しめそうだしな。

それは大山達も同じだろう。趣味のコスプレで衣装を手作りしてやうな奴らだし、凝り性をいかんなく發揮したメイド服の出来栄えは可愛くて上品さがあると女子達からの評判は上々だった。

「うん。宮永さんはうちのクラスの目玉だから特に気合を入れたよ。ふふふふ……」

大山が怪しく笑う。同じく衣装班の他二人も似たような笑顔だつた。不気味である。

「あの宮永さんに私達の手作りメイド服を着てもらえるなんて光榮の極みだよねえ」「絶対写真に撮らなきや……あ、もしサイズが合わなかつたら徹夜して直すよ。だからすぐに連絡して！」

「頼もしいなお前ら。そこでそんな情熱溢れる君達に差し入れだ！」

抱えていた段ボール箱を開いていた机の上に置く。中身は近くのスーパーで買い漁つてきた大量のおにぎりとお茶やジュースだ。おにぎりも飲み物も値引き商品とはいえそれなりの数だから多少の値は張つたけど、まあ景気づけつてことで。

お金の使い所つてのはこういう時だしな。パーティと行こうぜ！的な。

「太陽、愛してる！」

「その愛は残りの作業にぶつけろや」

なんて野郎<sup>グラスマイト</sup>からの愛の告白をバツサリ叩き切る一幕もあつたりしたが、差し入れの効果は上々だつた。士気が上がつたのなら何よりである。

それから少しだけクラスに残つておにぎり片手に一緒にわいのわいのやつて巡回中の鹿島先生に「うるさい」と俺だけが叱られたあと、任された任務をこなすべく宮永の住むマンションに向かつた。テスト勉強の期間で通い慣れた道だし、インターホンを鳴らすことにもためらいはない。

ボタンを押すと、扉の向こうでピンポーンという音が聞こえた。それから少しの間を空けて扉が開いた。こここのマンションはインターホンカメラが標準装備なので警戒されることもない。

「見汐君、どうしたの？」

「宮永にお届け物だ」

その言葉に宮永は首を傾げる。それから俺が手に下げている紙袋を見た。

「上がつて」

「いいのか？邪魔になんない？」

「大丈夫。今は私しかいないから」

ならいいか。そう考えて宮永に促されるままリビングに足を運ぶ。

宮永が言つた通り、母親のアイさんの姿はなかつた。テーブルの上にはティーカップが置いてあるだけで、たぶん食後のティータイムとかだつたんだろう。「それでお届け物つて？」

「明日の衣装だよ。着てみてサイズの確認してほしいってさ」

「メイド服？」

「おお」

「……分かつた」

宮永が紙袋を受け取つて席を立つ。部屋で着てみるんだろう。そう思つていたが、その足が止まつてこつちを振り返つた。

「見汐君、夕飯は？」

「ん？まだだけど」

さつきおにぎり一個食べただけだからまだ空腹だ。むしろちょっとだけ食べたせいで空腹感が増してゐる気がしないでもない。

「良かつたら食べていく？」

「ありがたいけど、アイさんの分は？」

「平気。明日見汐君の家に持つていく予定だつたのがあるから」

「いつもすまないねえ」

畏まつた礼を言うと宮永が嫌がるからネタっぽく返してるけど、最近宮永からの食糧供給率が半端ない。学校がある日のお昼はもうほとんど宮永の弁当だし、こうして家で作つた料理のおすそわけの頻度も上がつてゐる。

かといつてもらつてばつかだと宮永家のエンゲル係数が大変なことになるので俺の家から材料や料理のおすそ分け（配達人は俺）が行われるようになり、配達ついでにそのまま夕飯に招待されたりと宮永の手料理を食べる機会がものすごく多い。

アイさんがいた場合は確実に引き留められるしな。

しかしアイさん不在の今日も今日とて、俺は宮永宅でご相伴にあずかることになつた。

宮永が夕飯を取り分けてくれてゐる間に、とりあえず母親の携帯に電話を入れておく。スリーコールで繋がつた。

『もしもし。どうしたの？』

「悪いけど今日夕飯食べて帰る」

『はいはい、また照ちゃんにごちそうになるのね』

「まあそういうことで」

『ちゃんとお礼言つておきなさいよ？あと照ちゃんによろしく伝えておいてね。この前の筑前煮美味しかつたつて』

「りょーかい」

通話終了。もはや家族の間でも俺が夕飯要らないと言えば宮永の家で食べる、という等式が出来上がつてゐる。まあこんだけ頻繁にごちそうになつてしまつてや當然だが。

なんかもう餌付けされてるんじやないかと錯覚しそうになるな。そんなことを考えていると、お盆に料理を乗せた宮永がキツチンから出てきた。

「どうぞ」

目の前に置かれたのは白菜の入つた肉豆腐とパリパリに焼かれた塩サバ、茄子とこんなにやくの煮浸しと、きのこ類のたつぶり入つた味噌汁という、これぞ和食と言いたくなれるようなメニューだつた。

洋食にも挑戦しているが、基本的には和食や中華の方が得意らしい。まあ何食つてもおいしいけどな、宮永の料理。

「おお、うまそ～」

「ご飯のおかわりもあるから」

「サンキュー」

至れり尽くせりだよな。

そして俺が料理に舌鼓を打つてゐる間、宮永の姿が消えた。今之内に今度こそ部屋で試着してゐるんだろう。万が一サイズが合わなきやこれから手直しである。そうなつた場合、大山達は明日の文化祭に参加する気力と体力はあるのか心配になるな。

まあ執念で宮永の晴れ姿だけは見届けそうではあるけど。仮にも全国レベルの有名人に自分の作つた衣装を着てもらえるのは、アイツらからすると名誉なことみたいだし。

まあ今は料理を食べることに集中しよう。熱々の肉豆腐がやたらうまい。

結局十分足らずで平らげてしまつた。これを宮永に見られるともつと噛んで食べないと健康に良くない、とか注意される。言つてることは分かるけど、うまいもんはついかっ込んでしまうのが男の性なんだよ。

しかし戻つてこないな宮永。着脱に苦戦してんのか？メイド服とかどんな構造してんのかよく分かんねえしな。

まあいいや。今の内に使つた食器でも洗つておくか。

そう思い立つてキッチンに立つ。そしていざ洗おうか、というところで後ろから声がかかつた。

「洗い物は私がやる」

「いいつてこれくらい。それよりもサイズはどう……」

だつた、という言葉は出てこなかつた。なぜなら、振り返つた先にいた宮永がメイド服のままだつたからだ。

黒を基調とした膝にかかる程度の長さのスカートに、レースのついた純白のエプロンドレス。頭にはこれまたレース生地のヘッドドレス。足元はリボンがあしらわれたハイソックス。露出の少ない清楚な、それでいて充分魅力的なメイド姿である。てつきり部屋で着て確かめたら脱いでくるもんだと思つてたせいで、突然降臨したメイドに固まつてしまつた。

「サイズは問題ない……似合う?」

「ああ、可愛いと思う」

ほとんど反射的に思つてたことが口に出る。それに対する宮永の反応は「そう」というそつけないものだつたが、ちょっとだけ視線が逸れたところを見るとあれは照れてるな。

照れる照つてか。……落ち着け俺。

「代わる」

「メイド服のままやるのかよ」  
ちょっとばかり惚けているうちに流しのポジションを取つて代わられた。つていうか。

「一応どの程度動けるか確かめる」

ああ、そういう意味合いも兼ねてるのか。単にメイド服姿を披露したかつたわけじゃないらしい。

居場所を奪われた俺はダイニングテーブルに座つてメイド姿のまま洗い物を片付ける宮永を何の気なしに眺める。手慣れた手つきと格好のせいであるで本職の人っぽい。「……どうかした?」

「いや、なんか本物のメイドみたいだと思つてさ」

「そうかな?」

「おう、これなら明日も大丈夫そうだな」

妹が襲来するけど。どんな反応をするか楽しみである。

「だといいけど……」

「不安なのか?」

「少し。接客はあまり得意じやないから」

「じゃあ慣れるためにメイドっぽいことしてみたらどうだ?」

特に何も考えず、適当なことをのたまつてみる。

なので宮永に切り替えされて返答に困った。

「メイドっぽいことって？」

「あー……掃除とか」

「今から？」

「だよなあ」

「こんな時間から掃除とかないわな。

そもそもメイドって家事以外に何するんだ？ 紅茶を淹れるとかか？  
メイドに関する知識なんぞないから分かんねーわ。

「見汐君」

「なんだ？」

「ソファーに座つて

「んん？」

宮永がふと何かを思いついたらしく、よく分からぬリクエストをされる。とりあえず言われるがままダイニングテーブルからソファーに移動した。

すると何か持ってきた宮永は俺の隣にややスペースを開けて座る。そして自分の太ももの辺りをポンポンと軽く叩いた。

「何してんだ？」

「……膝枕」

絶句した俺を誰が責められよう。

「メイドらしいこと、するから」

「……メイドらしいのか？膝枕つて」

それでもなんとか言葉をしぶり出した。

そんな俺に対して、宮永は手に持っていた何かを見せつける。

「耳掃除」

耳かきを手にした宮永の表情はいつものポーカーフェイスだったが、その頬にはしつかりと赤みがさしていた。

## 23話 side 見汐太陽

右耳の内側をカリカリと優しく、丁寧になぞられるような感覚に、少しゾワゾワして肌が粟立ちそうになる。

だがそんな感覚よりも顔の左側。宮永の太ももに、スカート一枚を隔てて接している部分のぬくもりの方が俺の体を強張らせる。

「痛くない？」

「ああ。むしろ気持ちいいくらいだな」

「よかつた。初めてだから失敗したらどうしようつて思つた」

「耳かき失敗とか怖いこと想像させないように」

なんて軽口は叩くものの、失敗云々より気が気じやないことがある。

手作りだから仕方ないのかもしれないが、スカートの生地は薄めだった。エプロンドレスも同様だ。

そのせいで宮永の太ももの温度と柔らかさがかなり生々しく感じ取れてしまう。そしてそれは同じ人間かよと思うくらいには衝撃的な感触だった。

でもそんなのは考えてみれば当たり前のことかもしれない。

つづいた頬や、繋いだ手。これまで俺が触れたことのある宮永の体は、どこもかしこも男とは別物の柔らかさだった。

それを今更ながら思い出す。そして本当に今更ながら、改めて思う。

——宮永も、やっぱり女なんだよな。

失礼この上ないと自分でも思うが、俺にとつての宮永はもう異性という認識が介在しないくらい、ほとんど家族とか漫画でよくある兄弟同然の幼馴染みみたいな存在になつてた。

最初はただのクラスメイトで、でもその人間味を知つてからはとにかく面白いやつだつてことが分かつた。だからよくからかつたりしてゐる内に、いつも傍にいることが普通になつていた。

そして思い返せば白夏との出会いが俺と宮永の距離をそれまで以上に近付けた。

朝起きたら宮永が家にいて、白夏と戯れていても驚かない。家のキッチンで料理を作ってくれることを簡単に受け入れられる。俺の部屋で居眠りしたのを見つけた時だつて、何やってんだかつて苦笑いしながらタオルケットをかけてやつた。

そんな気心知れた宮永との関係性が心地よかつた。

だから宮永を女の子だと、異性だと意識しないようにしていった……のかもしれない。意識してしまえば宮永との関係性が変化してしまったような気がしていたとか、そんな感じの心理じゃなかろうか。

そんなあやふやな言い方になるのは無意識でやつてたからなのか、過去を振り返つてみてたところで自分でもはつきりとした答えが出ないからだ。

ただ一つだけ言えるのは、俺は今、間違いなく宮永を異性として意識している。

膝枕されるまでそんな簡単なことを自覚できなかつたのは我ながら相当なポンコツだと言わざるを得ないが、それを自覚してしまつたからこそ、俺の心臓はあり得ないくらい早鐘を打つているわけだ。

宮永のぬくもりが、耳に触れる指先の感触が、規則的に聞こえる微かな息遣いが、俺の心をこれでもかとかき乱す。

「終わった」

「ん、ありがとよ」

そんな至福なんだか苦行なんだか判断が難しい時間もようやく終わりを迎えた。時計を見れば十分もかかつてなかつたが、俺にとつては長く感じる時間だったのは言うまでもない。

今は宮永を直視するのも難しいのでここはひとまず退散して気持ちを落ち着けよう。  
そう思った。

「次は反対側」

思つたが、退散できなかつた。

そうだよなあ、耳つて二つあるもんなんあ。片方だけじや終わんねーか。

そういう理屈はまあいい。けどさ宮永。

「場所入れ替えねえの？」

「？」

「いや、首傾げてるけど」

今、俺はソファーアの右端に座つている。そして一人分のスペースを空けて、左端に宮永が腰かけている。だというのに宮永は座つたまま、また自分の膝をポンポンと叩くだけ。

三人がけのソファーアだしあ互いの体の位置を入れ替えないと左耳の掃除はできない。

そう説明すると、宮永はそんなことかとばかりにこう言つた。

「見汐君が私の方を向いて横になれば大丈夫」

宮永の方を向いて？あー、それってつまり……。

「……」ういうことか？」

「そう。動かないで」

メイド服のエプロンドレスによつて視界が白く染まる。そして耳掃除のためにやや前傾姿勢を取るため、宮永の腹部が鼻先に軽く触れるくらい密着してしまう。抵抗を示すことなく横になつた俺が言えたことじやないけど、これはさすがに……。ぬくもりや感触に加え、今度はほのかに甘い香りまでしてくる。これは服の匂いなのか、それとも……いや、これ以上考えるのは止めとこう。

というかこれつて傍目から見たら俺すごく間抜けな体勢じやないか？

宮永に頭を抱き抱えられているようなもんである。しかも宮永はメイド服。特殊なプレイの最中だと思われても言い逃れできねえわ。万が一アイさんに見られたらどうなることか。

しかし現役JKコスプレ耳かきリフレとか犯罪臭がヤバいな。

「……お金は取れそっただけど」

「どういう意味？」

ついつい漏れた言葉を宮永に聞かれる。意味なんて正直に言えるわけがなかつた。

当たり障りのない感想で誤魔化す。

「あー、お金取れるくらい気持ちいいってことだよ」

「お金はいらぬ」

「まあそうだろうけど」

宮永がそんなことしておこづかい稼ぐわけないしな。どつちかっていうと雀荘で代打ちとかしてた方が似合う気がする。

雀荘で勝ちまくってたら店の奥から宮永が出てくるとか、想像したら絶望感しかないな。

「だからしてほしくなつたら言つて」

「……んん？」

「またするから」

「お、おう」

どうやらこれからはリクエストしたら耳掃除をしてくれるらしい。

何そのサービス。オプションで服装とか選べそうだな。

「なんか俺ばかり色々してもらつてるな」

「私がそうしたいだけ。気にしなくていい」

とは言われても。今日だつて明日の衣装届けに来ただけで夕飯をぐるぐる走になつた挙

げ句、ここまで世話を焼かれる身にもなつてみろ。

なんかこう、やり返したくなるだろ。

「なあ宮永」

「何?」

「前に俺が『猫カフエの従業員は必ずメイド服を着なきやいけない』って言つたの覚えてるか?」

「覚えてる。でも、あれは嘘」

「さすがにバレてたか」

「うん。バレバレ」

嘘つけ。あの時は普通に騙されてたくせに。

お前の騙されやすさは大星どどっこいどっこいだつて俺は思つてるからな?そんな  
んがエースと大将に座つててなんでうちの麻雀部はあんなに強いのかね。

麻雀つて騙し合いとか裏のかき合いが必要なんじゃないっけ?

「そうか。じやあ嘘ついたお詫びに今度猫カフエ連れてつてやるよ」

宮永の手が止まつた。耳かきも離れる。

自分でも下手な誘い方だと呆れるな。普段ならもうちよつと自然に誘えそうなもん  
だけど。

若干の名残惜しさを感じつつ体を起こす。

「……いつ?」

「そうだな。大会前に休みはあるのか?」

明日から二日間の白糸祭を終えたらすぐ夏休みに入る。そして八月になれば全国高校雀選手権大会の開幕だ。

一応十日くらいの余裕はあるが、白糸台の麻雀部に休みがあるのかどうか。

「ある。八月二日はお休み」

「大会の直前じやん。大丈夫なのか?」

「問題ない」

「……じゃあその日に大会前のリフレッシュも兼ねて行つてみるのはどうよ?」

「行く」

即決だった。まあ宮永の猫好き具合を見てれば納得である。

しかし学校帰りに寄り道したり夕飯の買い物の荷物持ちしたりつてのはよくあるけど、宮永と二人でどつか遊びに行くつてのは初めてだよな。

そう思うとなか緊張しないでもない。

緊張する理由についてはもうある程度予想はついてるけど。

ここまでくれば、なのか。ここまできてようやく、なのかは分からぬが。

まあどちらにせよ、恐らくそういうことなんだろう。遅ればせながらこの歳になつて初めて知る。

誰かを好きになるってのは、こんなにも落ち着かない気持ちになるもんなんだな。

# バレンタインデー編 Side 見汐太陽

大きなあくびを一つ。それだけで冬の冷たい空気が肺になだれ込み、まだまだ寝足りない頭を少しだけシャキッとさせてくれる。

まあそれでも眠いもんは眠いんだけど。

頻りにあくびをくり返しながらあと半月ほどでお別れとなる制服に着替える。

スラックスのズボンにTシャツ。その上に学校指定のYシャツとネクタイを身に付け、さらにカーディガンを着込む。

右脇にブレザーとコートを抱え、左手に通学カバンを持つて部屋を出る。

リビングに入るとまずもつて照があいさつをしてきた。

「おはよう、太陽君」

「おーう」

時刻は朝の七時半前。

なんでこんな時間から照がいるのかといえば、タベ家に泊まつたからだ。といつても寝たのは沙奈の部屋でだが。

昨日は照と沙奈がバレンタインのチヨコ作り白熱してそのまま泊まることになつた  
というだけの話だ。ちなみに九割方沙奈がご教授を賜つていただけである。

「太陽君、これ……」

あいさつもそこそこに、照が後ろ手に隠していた、綺麗なラッピングが施された長方形の箱を差し出してきた。

「早くね？」  
え、このタイミングで？俺まだ心の準備できていないんだけど。

思つたことがつい口に出る。それに反応したのは沙奈だつた。  
人差し指を左右に振りながらちつちつちつ、と舌を鳴らす。

「お兄ちゃんつて毎年義理チヨコはそれなりにもらつてくるでしょ？」

「まあな」

マジで義理だけどな。

「だからこそ！一番最初にあげるのは照さんでなきやダメ！」

「うん……それに、私のはちゃんと本命だから。受け取つてくれる？」

少し恥ずかしそうに、でもしつかりと俺の目を見ながら照はそう言つた。

当然、世界のどこを探したつて断る理由なんぞ見つかりっこないのでありがたく受け取る。

「ありがとな。これからもよろしく」

「私の方こそ、よろしくお願ひします」

「いやー、朝から見せつけてくれるわねえ」

俺と照のやり取りを眺めていた母さんがコーヒー片手にニヤニヤしている。

「見世物じやないんですけど?」

「顔真っ赤なままよ、太陽」

「うつさい。さつさと仕事に行つとけ」

「はいはい」

母さんは仕方ないわね、と言いたげな苦笑を浮かべながら仕事に向かつて行つた。

数日はこの件でからかわれるな。まあ照からの本命チヨコの代償と考えれば圧倒的プラスだからどうでもいいか。

「照さんが渡し終わつたから私からもあげるね。はいどーぞ!」

沙奈が朝食のラインナップに昨日作つたチヨコを並べてくる。これをおかげに白米食えつてか?

「というか、昨日の時点での失敗作を延々食わされてるんだけど。」

「ホワイトデー期待してるね!」

「それが目的かよ」

いやまあこれに關しては毎年のことだけさ。今年は何を買わされんだろ……。

我が家は朝からにぎやかなことこの上なかつた。

それでも家から一步出ればいつも通りの朝だ。

気温は一ヶタ前半。放射冷却によつて冷え込んだ朝の外気に晒されて体が軽く震える。雪国の人間には気温がマイナスじやないくせに何言つてんだつて難癖つけられそうだけど、こちとら生まれも育ちも東京なんでこれくらいでも結構身に染みる。

「うおー、寒い」

「はい」

当たり前のようすに差し出される照の右手。それをいわゆる恋人繫ぎのかたちで握ると、そのまま俺が着てゐるダッフルコートのポケットに突っ込んだ。

これがかなりあつたかいし、何かをする時も手袋をしてるより作業がしやすいのでオススメである。なのでここ最近の登校スタイルはもっぱらこれだ。

一つのマフラーを一緒に巻いたりしてゐわけじゃないしこれくらい別に普通だと思うんだけど、案外そうでもないらしく最初はよく呆れられたりした。その最たる人物は弘世である。

「おはよう、二人とも」

その弘世とばつたり鉢合せした。こうして俺達の通学路が駅前通りと合流する地

点で遭遇するのは珍しくなかつたりする。

「董、おはよう」

「おっす」

しかしそんな弘世も冬休みに入る前にはこのスタイルには何も言わなくなつた。慣れたか、単に注意するのをあきらめただけの可能性もあるな。

「さて見汐、今日はバレンタインデーだが戦果は期待できそうか?」

「もう照からもらつてつからどう転んでも勝ち組ですー」「何? もうか?」

「一番最初にもらつてほしかつたから」

「なるほどな。そういうことなら気兼ねなく私も渡せる」

そう言うと弘世はカバンから包みを一つ取り出した。

「ありがたく受け取れ見汐。義理チヨコだぞ」

「……ありがとよ」

堂々の義理チヨコ宣言。ありがたみ半減である。

まあチヨコに非はないので頂戴するが。

「ところで照、明日の予定についてだが十一時で大丈夫か?」

「うん。でも本当にいいの?」

「今さら今さら。沙奈も張りきつてるしな」

「……ありがとう」

「私達がやりたいからやるだけさ。むしろ見汐と二人きりの方が良かつたりしないか？」

「そんなことないよ……それに太陽君はあとで二人きりの時間作ってくれるから」

「ほほう」

「彼女の誕生日を祝うのは彼氏の役目ですし?だからニヤニヤすんな」

そんな感じで駄弁つてゐる内に高校に到着し、眠気に耐えながら授業を受ける。もう進路も決まつてゐるし出席日数も足りてるから授業に対する意欲は最底辺だけどな。

ボーッとしたまま授業を消化すること四時限分。やつとこさ昼休みになつて照と机を並べて弁当を食べる。弁当は当然照の手作りだ。今朝も早く起きて俺ん家の台所で母さんと一緒に作つたらしい。

「失礼しまーす」

騒がしい昼休みの教室にそんな声が割つて入る。が、特に注目を集めることもない。

これもまたよくある光景だからだ。俺としてはようやく入室のあいさつをしつかりできるようになつたところに成長を感じる。

大星は真っ直ぐ俺達の方に向かつてきました。

「やほー！はい、テルー！」

「これは？」

「友チョコ！」

「……ありがとう。これ、お返し」

「やつた！大切にするね」

「いや食えよ」

思わずつつこんでしまった。

「えー、でももつたいなくない？テルの手作りだよ？」

「食べられなくなる方がもつたいないだろ」

「……そうかも！」

しばし考えた後に大星はそう答えた。

アホっぽさ抜けないなあこいつは。それが癒しのような気がしないでもないけど。

「はい、じゃあ太陽先輩もちゃんと食べてよ。」

「ん？俺にもあるのか」

「特別だからね？義理だけど」

特別なのに義理とは一体……。

つか大星といい弘世といい、わざわざ宣言しなきやならんもんかね。まあ照に余計

な気を遣わせない為つてのは理解できるが。

俺が照以外になびくわけねーじやん。

「はいはい」

「それで明日の誕生会だけどさ、私部活終わってからしか行けないよー……」

「それは仕方がない。私は淡が来てくれるだけでうれしいよ」

悲しみに暮れる大星を照が慰める。今まで何度も見てきた光景だ。

照の誕生会は十一時開始予定だし、麻雀部の練習も一時過ぎには終わるからそこまで焦らなくてもいいと思うけどな。慌てすぎてプレゼント忘れたりしないか不安である。

大星は照の慰めも虚しく昼休みが終わるまでめそめそしていた。

そして放課後。この時期の三年生にもなると放課後の学校にこれといった用事もなく、俺は照と一緒に帰る。相変わらず寒いので当然朝と同じように手を繋いでいる。

特にいつもと変わりない帰路。もうすぐ別れ道に差し掛かるというところで照がこんなことを口にした。

「太陽君」

「んー?」

「……これから、私の家にきてほしい」

「いいけど、なんかあるのか?」

「うん。少し」

「なら行くか」

珍しい照からのお誘いである。何の用事かは分からないうけど特に予定もないしな。

照と一緒にいられる時間が長いならそれだけで行く意味はある。

通い慣れた照の住むマンション。なんならそこの住人達とも顔馴染みになりつつ今日この頃である。

もう照ん家には俺の着替えとか普通に置いてあるからな。まあ俺の家にも照の私物あるしお互い様だが。

「少しだけリビングで待つてて

「りよーかい。暖房つけていい?」

「うん」

とりあえずコートを脱いでハンガーに掛け、暖を取りつつ照を待つ。時間にすれば数

分のこと。

部屋から出てきた照はどこか緊張した面持ちで現れた。

「あの……」

「どうした？」

「今朝、一番最初にチョコをあげたよね」

「おう、確かにもらつたぞ」

「でも、それだけじや嫌だから……」

おずおずと、照が包みを差し出す。

「それ、チョコか？」

「うん。太陽君に渡すのは最初も最後も私がいい……」ういうの迷惑？」

「全く迷惑じやないわ。むしろ嬉しいって」

いじらしい彼女である。思えば出逢つた時と比べてずいぶん自分の気持ちや考えを表に出せるようになつたもんだ。

俺がそれに好影響を与えてるなら誇らしさすら覚える。

「……それで、このチョコと一緒に食べたくて」

「いいじやん。食べようぜ」

俺に促されて照が包みを開く。

中に入つていたのはあまり目にしたことのない、ひょうたん型のチョコレートだつた。

「面白い形してんな」

一つつまみ上げて口の中に放り込む。

それを噛むとチョコの味が一気に変わった。どうやらひょうたんの丸みの中に何かが入っていたらしい。これは……バイナップルヒブルーベリーのフレーバーか？ 見た目同様変わり種だな。

「それだと食べ方が違う」

「正しい食べ方とかあんの？」

「うん。まず噛まないで片方を咥えて」

「ほうか？（こうか？）」

ひょうたんの片側を咥え、半分が口の外に出るような形になる。

このままだとなんか間抜けだよな、なんて考えていると、残った片側を照が咥えた。

二～三センチほどの大きさしかないチョコでそんなことをすればどうなるか。答えは明白である。

俺の唇と照の唇がしつかりと触れ合つた。

……ああ、こういうやつね。驚きながら頭の片隅ではやけに冷静にそんなことを思う。

照と付き合つてそれなりの長さになる。キスも初めてじゃない。

でもいきなりこんな展開になるとさすがにどぎまぎするというか、はつきり言つてめつちや恥ずかしい。それに耐えられずチョコを中程で折つて離れる。ビビリと蔑むことなかれ。

「……囁んじゃダメって言つたのに」

「無茶言うなよ。あーもう、すげードキドキしてんだけど」

驚きと、緊張と、あとは愛しさで。割合的には1:1:8くらいだ。

「……太陽君は何味だった?」

「たぶんバナナだと思うけどな……」

ぶつちやけ味なんて冷静に判別する余裕すらなかつた。

「私はイチゴだつたから外れ」

「……外れた場合はどうすんだ?」

「これは中身の味が揃うまで続けるものだから……」

今度は照がチョコを咥え、少し突き出すようにして目を閉じた。

……ちよつと君、大胆すぎません? いつからそんな子になつちやつたのかね?

俺もここまでされて引き下がれるほど甲斐性なしじゃない。

歯がぶつからないようにそつと、照の頬に手を添えながらチョコを口に含む。

しばらくそのままでいると双方から咥えられたチョコレートは体温で溶けだし、そ

れが滴つて制服を汚さないようにお互いが舌を這わせて唇を舐り合う。そうしている内にコーティング部分のチヨコがなくなり、その中に詰められていたフレーバーが口内に溢れ出した。

一旦唇を離し、その中身を告げる。

「オレンジだな」

「私はブルーベリー」

「じゃあもう一回か」

「うん」

三度チヨコレートを咥えたままキスを交わす。一度目より二度目、二度目より三度目と、くり返すごとに行為の激しさは増した。というか途中からはチヨコなんてそっちのけでお互いの唇を貪るように求め始める。

俺と照の唾液、そして溶けだしたチヨコレートが混ざり合つてじゅるじゅると卑猥な水音を立て、それが脳髄にダイレクトで響くような感覚。

チヨコと一緒にになって理性や自制心が溶けてなくなつていくのが分かる。それをダメ押しするように、照のほつそりとした両腕が俺の首に回された。

俺のあぐらの上に乗り、向かい合わせに抱き合つた体勢でのキス。照の艶めかしい息遣いと欲望をぶつけ合うようなキスの感触で頭が茹で上がる。

なま

味が揃う揃わないなんて最早どうでもいい。もう口の中にはチヨコなんて欠片も残つてない。それでもキスは終わらないし、味覚は甘さを訴え続ける。もしかしたら照の唾液が甘いのかかもしれない。

長く激しいキス。その合間に覗かせる照の蕩けきつた表情が、どうしようもないくらいに俺の欲情を搔き立てる。

「……照」

「何……？」

お互に呼吸が荒い。キスと興奮で酸欠不足なのかもしない。

でもこの息苦しささえ気持ちいい。

「ベッド行こう」

「いい、よ……今日、お母さん帰つてこないから……」

その言葉が最後のトリガーを引いた。

「じゃあ俺も泊まるつて連絡するかな」

「それなら、たくさんできるね」

「ああ」

照と恋人になつて初めて迎えたバレンタインデーは、こうして暮れていく。

泊りの連絡は、文字通り事後承諾になつたのは言うまでもない。



『あ、お兄ちゃん！やつと出た！』

心地よいまどろみの中で迎えた朝。そこから意識を目覚めさせたのは妹の甲高い声  
だつた。

『今何時だと思つてるの!?』

「時間だあ……？」

まだ万全とは言い難い寝起きの視界。それでも時計の針を読み取ろうと何度も目を  
しばたかせる。ぼんやりと見えてきた。

「十一時、五分か……」

『大正解！じやあ今日は十一時から何がありますか？』

「何つて、照の誕生会……ああ、オッケーちょっと待つて状況把握したからマジで少し待つてほんとに」

色々理解が追い付いて急激に焦る。

整理しよう。今日は二月十五日の土曜日で、予てから予定していた照の誕生会の開催日だ。開催予定時刻は午前十一時、場所は照の家。<sup>かね</sup>つまりここだ。そして現在の時刻は午前十一時八分。

問題なのが俺と照の状況である。まず俺達は一糸まとわぬ姿でベッドインしている。 ゆうべはおたのしみでしたね、つて言つてる場合か。

とりあえず着替え……の前にシャワー浴びなきやダメだなこれ。あとは部屋の換気と、ベッドシーツも洗濯しなきやいかんね。一応乾いてるけどすごいことになつてるし。

だつてのに照は未だに俺の腕にすがりついたまま寝息をたてている。……そういうやほとんど休憩なしで朝方まで頑張つてたもんな。おかげで空腹感もヤバい。でも一番ヤバいのはこの状況だ。

『中にいるんでしょ？寝坊したことは怒らないから入れてよー』  
寝坊は寝坊でも大人の寝坊なんだよ。……いや、大人の寝坊つてなんだ。落ち着け

俺。

とはいえ玄関先に沙奈がスタンバつてゐるこの状況で落ち着けつてのはかなり無理がある。どうすつかな……と絶望してゐると電話口の声が変わる。

『見汐か?』

『おおう、弘世……。お前も一緒なのか。

『……いかにも、見汐だぞ』

『何も聞かない。一時間後にまた来るからそれまでに支度を整えておけ』

貴方が神か。電話の声に後光が差して見える。どういうことかは俺にも説明はできない。

『いいな?』

『はい』

『……妹はまだ中学生だろう。あまり強い刺激を与えないように』

『仰る通りで』

つーか何があつたのかほぼ見抜かれとるなこれ。俺と照はしばらく弘世に頭上がんねーわ。

とりあえず火急の事態は脱した。まずは眠りこける照を起こした。

『おはよう、太陽君……』

「おう。で、いきなりだけど状況説明するぞ」

とりあえずシャワーとシーツの交換、部屋の換気をしつつ身支度を整える。それを一時間以内に済ませなければいけないことを伝える。

「分かつたか？」

「うん、分かつた」

「じゃあ先に……」

行動を開始しようとした俺の胴体に、照がガツチリと抱きついてくる。  
結構きつめの抱きつきだ。

「……あの、照さん？」

「……シーツの交換は、五分もかかるない。お風呂も一緒に入れば時間を短縮できる」「つまり？」

「……意地悪。分かつてるくせに」「いじけるなよ。悪かつたって」

抱きついている照の頭を撫でる。きめ細かくさらさらとした髪質は肌に触れている  
と気持ちいい。それになんとなく落ち着く。

「……落ち着いてる場合じゃないけど。ないんだけど。  
「まあ、あと少しくらいこうしてても間に合うよな？」

「うん」

夕べだけでも数え切れないくらいしたのに、まるで飽きる気配もなく俺と照は唇を重ねる。ああ、マジで最近爛たたれてきたなあ俺達。

そう思つてゐるのに俺も照も歯止めが利かない。むしろ求めても求めても全然足りないんだから仕方ないじやん、つて開き直りつつある。

どつちから求めても、どつちも際限なく受け入れてしまう。今でさえあと一回くらいなら平気かな、とか口に出してしまいかねない。

結局一時間経つても支度は終わらず、二人揃つて弘世からガチ説教を受けることになるのだった。

## 24話　s i d e 宮永咲

「着いたじえー！」

見渡す限りの人、人、人。校門から校舎に至るまでの道のりにたくさん的人が溢れている。一高校の文化祭だけでこの人ばかりって、東京はすごいなあ。

そしてそんな人波に飛び込んでいこうとした優希ちゃんを京ちゃんが止める。

「勝手に行こうとするな！迷子になるぞ！」

「咲ちゃんじゃあるまいし大丈夫だじえ」

「う……わ、私だってそう簡単に迷子になんて……」

そう言いかけて、でも言葉尻がしほんでしまう。そうだよね、いつも迷子になってるもんね、私……。

方向音痴は治したいんだけどなあ。

「まあ咲の手は和にしつかり握つておいてもらうとして」

「はい」

部長に言われて和ちゃんが私の手を取る。

高校生までになつてここまでされなきやいけない自分が情けない。

「それでも中には入りませんの？」

きれいな金髪にお嬢様みたいな話し方。みたいなつていうか、本物のお嬢様だけど。龍門渕さんが肩にかかつた髪を軽く払いながら部長にそう尋ねる。

「見汐君に『もう着くわよ』つて連絡したら校門まで迎えに行くつて言われたのよ」

「つまりここで待つてなきやいけないわけか」

井上さんが溜息をつきながら氣怠げに咳く。確かに屋台とかを見て回るならともかく、炎天下の中でただ待つているだけなのはつらい。

東京の暑さは長野の暑さとはまた一味違つて、それにも慣れないから余計にそう感じちやう。

そんなことを考えていた時だつた。

「待たせたな皆の衆」

私達の集団に向かつてそんな声が飛んできた。

「久しぶりね、見汐……く、ん……？」

「よく來たな。歓迎するぜ」

そんな言葉と一緒にパン、という炸裂音。その正体はクラッカーだった。

振り返った部長にテープが降り注いで引っかかる。それも原因の一つではあつたけ

ど、それ以上に見汐さんの出で立ちが私達を困惑させた。

でも見汐さんは戸惑う私達なんてまるで意に介することもなく笑う。……たぶん、笑っていると思う。

どうしてそんな不確かな言い方になるのかと言えば、その顔がマスクに覆われていて表情が読み取れないからだつた。

「べ、ベイダー卿!?」

いち早くリアクションを取つたのは京ちゃん。私はあまり詳しくないけど、それでも見汐さんらしき人がしている格好がダース・ベイダーだつていうのは分かる。暑そう。

そんな見た目で散らばつたクラッカーのテープや紙吹雪を回収する姿はシユールだつた。一度面識のある私達ですら困惑して動けないんだから、完全な初対面になる龍門渕の人達はあっけに取られている。

一応部長が「かなり自由そうな人」って説明してたけど、さすがにこれは予想外だよね……。

そして見汐さんはそんな龍門渕の人達に食いついた。

「それで君達が龍門渕の麻雀部?」

「そ、そうですわ! 私は龍門渕透華。本日はお招きいただきありがとうございます」「いえいえこちらこそ。よくいらっしゃつて下さいました」

ダース・ベイダーがサラリーマンみたいにペコペコお辞儀してゐるのつて違和感すごいなあ……。

それから見汐さんはマスクを外して改めて自己紹介をする。

「というわけで俺が見汐太陽だ。よろしくな」

そんな軽い自己紹介に、龍門渕の人達も口々に名前を名乗る。その中の一人、国広さんが率直な疑問を見汐さんにぶつけた。

「どうしてダース・ベイダー?」

「実行委員の企画でさ。校内にベイダー、スパイダーマン、貞子、ピカチュウがいて、全員と写真撮れば粗品贈呈すんの」

「……ピカチュウ?」

「そう。ピッカ一つてな。知らない?」

「いや、知つてるけどピカチュウがいるってどういうこと?」

「ああ、ただの着ぐるみだよ。作んの苦労したわ」

自作なんだ。もしかしたら見汐さんが着ているダース・ベイダーの衣装もそうなのかもしれない。

高校の文化祭つてこんなに力を入れるものだなんて知らなかつた。

そしてこんな感じでいいさつを交わしていくつて、いよいよ最後は衣ちゃんの番。衣

ちゃんはじつと見汐さんを見上げる。

「お前がひろあきなのか？」

「そうだぞ」

「宮永照と麻雀を打たせてくれると聞いた」

「おう。まあ宮永の妹がメインだけどな」

「構わぬ。衣は今日この日を心待ちにしていた。宮永照と遊べる機会を設けてくれたこと、じんしゃ甚謝の限りを尽くさせてもらおう」

「なんか仰々しいけど、要するに感謝してるつてことか？」

「如何にも」

「なら受け取つとく。んじや早速行くか」

「も、もうですか……？」

「そりやそのために来たんだし」

「そうなんだけど、こんなにいきなりだと心の準備が……。」

「うう、緊張するよお……」

「大丈夫だつて。別に取つて食われるわけじやないんだから」

結構失礼なことを言いながら、ヘラヘラと笑う見汐さん。再びマスクを装着した見汐さんを先頭にして歩き出す。

……歩き出したんだけど。

「お、太陽！ 一つ買つてけよー！」

「せんぱーい！ これ味見していきません？」

「ベイダーだ、ベイダー！ すいません、写真いいですか？」

するから校舎に入るまでに三十分くらいかかっちゃつた。というかどうしてこの学校の生徒はマスクをかぶつてるのに見汐さんだつて分かるんだろう……？

そんなこんなで校舎に到着するころには私達の手の中には大量の食べ物が収まつていた。ほとんどが見汐さんに差し入れられたもので、全員でもすぐには食べきれない量になつてしまつていて。

「……ダメだ、限界！」

そして校舎に入つてすぐ、見汐さんは唐突に声を上げるとマスクを外した。その顔には汗が滴つている。

まあ真夏の日差しの下で長い間そんな格好してたらそうなるよね。

「あ、おい太陽。なんで脱いでんの？」

「暑すぎて無理。これお前にやるわ」

「そこはせめて実行委員の奴に渡せよ……」

そして脱いだ途端、それを見とがめられる。同じ学校の生徒とはいえ見汐さんは知り合いが多すぎるような……。

そんな私の疑問が解决されることはなく、本当にマスクとマントを通りがかりの人に押し付けた見汐さんは解放されたように背伸びをした。素顔を晒すだけで一気に都会の男子！という感じに変貌する。制服姿でさえ洗練された印象を受けるのはなんでだろう。

そしてマスクを外した見汐さんはさらに声をかけられるようになる。その姿を見て、井上さんはしみじみと呟いた。

「すげー人気なんだな、あんた」

「友達が多いってだけで、人気なら宮永の方が全然上だぞ」

「そりや比べる相手が悪い。相手は全国レベルの有名人だろ」

「まあな。というか井上の方こそ人気ありそうじやん？男よりかは女の方にモテそうな感じだけど」

やつぱり宝塚的な雰囲気がない、なんて言いながら見汐さんは井上さんを見てうんうんと頷く。これには少し……ううん、かなりびっくりした。

そしてその衝撃は私達より龍門渾の人達の方がさらに大きい。

「……一つ聞きたいのですが」

「ん？」

「あなたは純が女性だとお思いで？」

沢村さんが单刀直入に尋ねる。内容的にはかなりおかしな質問かもしけないけど、井上さんの性別を初対面で見極めるのは難しいと言わざるを得ない。

百八十七センチを超える長身にシャープで整った顔立ち。銀髪は短く整えられているし、女の子としては低めな声に一人称は“オレ”。

ボーカル・シチュエーションの井上さんを、外見的な要素で女性だと見抜ける人はまずいなって思つてたけど……。

「はあ？ お思いでつていうか、女だろ井上は？」

あつけらかんとした、まるで疑問を感じる方がどうかしているとでも言いたげな反応。それは井上さんが女性だつて、確信を持つていてるようだつた。

「驚いたぞ、ひろあき。まさか純の正体を初見で見抜くとは！」

「正体て。確かに外見だけなら迷うかもしれないけど実際に会話までして性別間違えるほど失礼じゃねーよ」

「……敬意を込めて兄貴つて呼ばせてもらうぜ」

「どんだけ男と間違えられてんだよお前。絶対その言動も原因の一つだと思うわ」

一目で女性だと分かつてもらえたことに感動したらしい井上さんが見汐さんを兄貴

と呼び、それに対して見汐さんは呆れたような顔をした。

兄貴……お兄ちゃん、か。私にはお姉ちゃんしかいないけど、お兄ちゃんがいたらこんな感じなのかな？上手くは言えないけど、見汐さんのことをお兄ちゃんって呼ぶのはしつくりくるような気がする。

……でも私が見汐さんをそう呼ぶことは、お姉ちゃんと見汐さんが結婚するつてことだよね。お姉ちゃんが結婚つてあんまりイメージできないうけど……つて、な、何考えてるんだろう私。

見汐さんはただのクラスメイトだつて言つてたし、別に付き合つてるわけじやないんだからそれは飛躍し過ぎだよね。

「どうしたんじや？咲。さつきから暗い顔したり赤くなつたり」「ふえ？ななな、なんでもないです！」

染谷先輩が私の顔を覗き込む。それに驚いて思いつきりのけ反つてしまふ。

「なんだ？まだ緊張してんの？」  
「し、しますよ……」

「仕方ない。特別にこれを見せてやろう」  
隠してもしようがないので本心を打ち明ける。

すると見汐さんは私をちよいちよいと手招きした。なんだろうと思ひながら近付く

と、私にだけ見えるようにスマホを差し出す。そこに写し出されていた画像を見て、私は硬直した。

「だつて、だつて……！ 猫耳をつけたお姉ちゃんの写真だなんて予想外すぎるよ！ 「あの、見汐さん……」の写真は一体……？」

そう聞いた私の声は衝撃で少し震えてたと思う。

「アイツの誕生日の記念にな。どうよ？ この写メ」

「どうと言われても……お姉ちゃんがこういうのをつけるのは意外っていうか」

「まあそうだろうな。でも可愛いだろ？」

「あ、はい。それは間違いありません」

「で、こんなお姉ちゃんに今から会うわけだ。緊張なんてするだけムダムダ」

「見汐さん……」

「これは私を勇気づけてくれてるんだ。

なんでこの人はここまでしてくれるんだろう？ お姉ちゃんが私と麻雀で真剣勝負をしたいと思ってるからって、文化祭で企画を作つて、長野まで私を誘いに来てくれて。私達の仲を取り持とうとしてくれている。

「あ、ちよい待つて」

そう言うと見汐さんは首だけを入れて教室の中を覗き込む。

「おーい、将」

「太陽？お前今実行委員の仕事中じやねえの？」

「お客様の案内です。ここに宮永いねえよな？」

「宮永さんなら接客側となりだぞ」

「オッケー。皆こつちに入れ」

見汐さんが私達を急かして教室の中に入れる。

その中にはすごく簡易的なキツチンと、パーテーションで囲われたスペースがあつた。私達は教室の三分の一くらいを占めるそのスペースに招き入れられる。そこにあつたのは立派な雀卓だった。

「ここは？」

「VIP用ルーム……という名の隔離スペース。一応他のお客様に見られないようにな」「準備が良いですわね」

「そりやまあ白糸台と清澄にとつては少なからずリスクがあることだし」

四人掛けの雀卓と、その周囲にはイスがいくつか置いてあつて座れるようになつている。

打たない人もちゃんと観戦できるようになつてゐるらしい。

「んじやちよつと待つてくれ。宮永連れてくるから」

そう言つて、見汐さんがパーテーションで区切られた空間から出て行こうとする。  
私は咄嗟にその背中を呼び止めていた。

「あの、見汐さん」

「ん？」

「……どうしてここまでしてくれるんですか？」

不信感を覚えているわけじゃない。ただ、単純な疑問。

それを思い切つて尋ねてみた

「あー、まあ理由はいくつかあるんだけどな。一番の理由としては“宮永をしつかり理解してくれる奴が一人でも多く増えてほしい”んだよ」

「お姉ちゃんを、理解してくれる人……」

「宮永はさ、学校……つい一かクラスの連中からも特別視されてんだよ。高校麻雀二連覇のチャンピオンだし当然つちや当然だけど」

そう言つて見汐さんは少しだけ苦笑した。

「クールで完璧超人なチャンピオン。自分とは住む世界が違う人。そんな風に思われてる」

そんな言葉に少しだけど心当たりがあつた。

お姉ちゃんは麻雀がすごく強いし、高校麻雀の全国大会でも優勝して、姉妹なのにはす

ごく遠い存在に感じている。それは今もそうだった。お姉ちゃんと疎遠になつて離れて暮らしているのも理由かもしれないけど……。

「でもな、宮永はそんな大それた人間じやないんだよ。確かに麻雀は強いけどそれだけだ。それ以外は普通の、君達と何も変わんねえ女子高生なわけ」

麻雀が強いだけの普通の女子高生。

見汐さんはそう言い切つた。私はそれに、ううん、私以外の皆も開いた口が塞がらない。だつてあのお姉ちゃんを、全国の凄く強い人達が打倒を目標にしているお姉ちゃんを普通の人だなんて……。

見汐さんは絶句している私のことをじつと見つめると、こんな質問をしてきた。  
「妹さんはアイツが好きな物つて何か知ってる？」

「え？・えーっと……」

突然そんなことを言われてもぱつとは思いつかない。

一緒に住んでた頃を思い出してみると、好きな物と聞かれてこれというものは出でこなかつた。

「……やっぱり、麻雀ですか？」

「ここまで続けてるし好きではあるだろうけど。実はアイツ、お菓子と猫に目がない」  
お菓子と猫。とても普通で、でもお姉ちゃんには釣り合わないように思つてしまふ。

それくらい、私の中でお姉ちゃんは自分とは違う存在になってしまっているのかもしれない。

見汐さんは柔らかく笑う。でもそれはどこか悲しそうに見えた。

「普通のことなのかもしないけどさ、宮永は高校雀のチャンピオンって看板ありきで周りの人間には見られてる。確かにそれは間違つてないし否定することでもない。でもそれだけじゃないんだ。宮永照つて人間が抱えてるのは雀以外のもんの方が多いし、重いんだよ。」

麻雀が宮永の全てじゃない。っていうかアソツの一部でしかない。けどチャンピオンって肩書きが大きすぎるからそればっかり注目されてんだ。だからその分、近くにいる奴にはアソツの、単なる宮永照としての部分を知つてほしいんだよ、俺は。我を忘れて猫と戯れたり、修学旅行先で迷子になつてめちゃくちや焦つてたり、妹との関係に思い悩んだりする十七歳の女の子をさ」

聞いてるだけでこつちが恥ずかしくなりそうな告白。でも不思議とそんな気分にはならないで、すんなり聞き入れることができた。

たぶんそれは、見汐さんが本気でそう思つて行動しているからなんだと思う。この人は自分の言葉に一切の偽りもなくお姉ちゃんのことを想つているんだと理解できた。

「まあ雀は一人を繋ぐものなんだろうし大事にしていくべきだと思うけど、それ以外

のものでもきつと繋がれるし分かり合えるよ。二人揃つて不器用そうだけど、君と宮永は姉妹だからな。お節介ながら俺はそれを勝手に後押ししたいだけ」

——ただそれだけだよ。

最後にそう言い残し、もう見慣れてしまつたヘラヘラした笑みを浮かべて見汐さんは教室を出て行つた。

あそこまで真つ直ぐに誰かを思いやれるのが眩しくて、あんなにも大切に想われているお姉ちゃんが少しうらやましくて。そして何よりも、見汐さんが本当にお兄ちゃんだつたら良かつたのにな、なんて。

廊下に消えた背中を見送つて、私はそんな風に思つた。